ミッドナイトブレイカー

あべかわきなこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ミッドナイトブレイカー

【Nコード】

N1037F

【作者名】

あべかわきなこ

【あらすじ】

地味な高校生活を送る東条英輔のクラスにやって来たその転校生は、明るく元気で可愛いくて、すぐに人気者になった。が、夜の学校で正体不明の化け物に襲われた英輔の前に現れた彼女は、昼間とは少し雰囲気違っていて……？平凡を守る少年と、平凡を壊す少女のミッドナイト学園ファンタジー。

プロローグ

深夜零時。

坂の上に位置するその学校には、繁華街の賑やかな音や光、走行する車のそれすら届かない。

当然のように、校舎に灯る明かりもない。

しかし校庭には妙な明るさがあった。

紺碧の空に浮かぶ、白いモノ。

幻想的な光を放ち、糸のような足をひらつかせて浮遊する様は、まるでクラゲだった。

「……今回もハズレ、か」

空に浮かぶクラゲを見ながら、私は自然とそう呟いていた。

するとクラゲは声おとに反応したかのように、幾つもの足をこちらに伸ばしてきた。

「遅い」

その緩慢さに呆れつつ、私は地を蹴った。

そうして、一閃。

右手に持った得物えものによって、クラゲのようなそれはいとも簡単に両断された。

その、あまりのあっけなさに溜め息すら漏らし、私は得物をしまった。

が。

「!?!」

背後に違和感を覚えて振り返ると、真っ二つに割られたクラゲの体から、光の玉のようなものが膨らんでいた。

(しまった!)

しかし時は既に遅く。

光が、爆発した。

第1話：壊れた夜

まだ暑さの残る9月の初日。

街外れの、山のふもとに位置する公立高校へ続く坂道は、長期休暇を終え友人と再会してはしゃぐ高校生達で埋まっていた。

そんな様子を傍目に、俺は黙々と坂を上る。

幾人も追い抜いて、足早に校門をくぐると見えるのは、昨年立て替えたばかりの白い校舎。

といつても市の財政があまり良くないのか、現代風の凝ったデザインになっただけでもなく、これといつてぱっとしない外見というのが俺の感想だ。

視線を横に移すと、古びた木造の校舎がある。

大部分は取り壊され、残っているのは一部だけだが、それでも前の校舎が残っているのは何か曰くがあるからではないかとクラスの女子が騒いでいた記憶がある。

(まあ、あながち嘘でもなさそうだけど)

が、俺にはそんなことはどうでもいい。

俺にとつて重要なのはただ毎日を平凡に過ごすことであり、それが幸福せいわせなのだと思っていた。

教室の賑やかな様子は夏休み前と全く変わっていなかった。

「あつ久しぶり〜東条君！」

俺にその声を掛けてきたのは、短髪で小麦色の肌をした、いかにもスポーツ系の少年、森下武だった。

「おはよ。焼けたな、森下」

俺がそう返すと

「おうよ！ そういう東条君は全然焼けてないな？ 水泳部だろ？」

と、森下は首をかしげる。

「プールも建て替えしてただろ？ その間屋根つきの市民プールで練習してたんだ。学校のプール使ったのはここ1週間だけ」

「へー。じゃあ水泳部は一足先に新しいプールに入っただんだー。いいなーいいなー」

と、森下がじゃれついてくる。彼は人懐っこい性格で、男女問わず気兼ねなく話せるということもあり、このクラスのマスコットの存在と言っても過言ではない。

人付き合い、特に女子と話すのが苦手な俺としては彼を見習いたいと思う時もあるが、今更それは無理だと悟っているつもりだ。

中学の時からそうだったのだが、クラスの女子が無口な自分のことをどこか怖がっている節があるというのは空気で感じ取っていた。

「あ、そうだ！ さっき俺日直だったから職員室行ってきたんだけどさ、中谷の横に『鷹の方』の制服着た女の子がいたんだよ！」

森下がそう言うと、近くで喋っていた女子数人が会話に食いついてきた。

「ねえ森下、それって転校生ってこと？ 『鷹の方学園』っていったら超お金持ち学校じゃん！」

「中谷の横にいたってことはうちのクラスに来るのかな？」

「これで中谷の娘だったら笑えるね〜」

と口々に女子が喋る。

ちなみに中谷とはこのクラスの担任の中年男性教諭である。

「それはないよ！ すっげー可愛い子だったもん！」

と、森下が冗談なのか本気なのか、そんなことを言って、辺りにはさらに笑いが起こった。

そんなこともあってか、朝のホームルームが始まるチャイムが鳴

り終わる頃には、クラスの面々はどこか期待の眼差しで教室のドアに視線を向けていた。

かくいう俺も、視線こそは向けないものの、ドアが開く音を窓の外を眺めながら待っていた。

そして、チャイムが鳴り終わって数分経ったところに、教室のドアがようやく開いた。

「すまんすまん、ちょっと遅れた。皆元気だったか？」

そう笑いつつ入ってくる中谷は、夏休み前と全く変わっていないかった。

というより彼が1人で入ってきたものだから、クラスの何人かが溜め息をつき、意外に大きな音となった。

「なんだなんだ、朝から溜め息か？ そんなシケた顔じゃ転校生に失礼だぞ」

と中谷が言うところ『おお』と声上がり、再び幾つもの視線が教室の入り口に集中する。

皆の単純さに少し呆れながら、俺も視線を移した。

そんな期待に応えるように、その少女は入ってきた。

最初に目が行くのは、やはり見慣れない制服だろうか。

この学校の女子の制服はセーラー服なので、ワイシャツにネクタイといった都会風（だと俺は信じている）の制服は目に新しい。

赤いチェックのスカートの丈が短いようにも思えるが、膝上まである黒いニーソックスのお陰か、嫌らしさはない。

華奢なわりに堂々とした足取りで、彼女はまっすぐ教卓の前へやって来る。

肩ぐらいまでの髪は活発さをイメージさせ、顔立ちもさっぱりし

ている。そしてうるたえることなく真っ直ぐ前を見据える瞳には、力強さと共に華やかさがあった。

「今日からうちのクラスの一員になることになった朔夜憐さんだ」
中谷がそう紹介すると、彼女はぺこりと一礼した。

「父の仕事の都合でしばらくの間だとは思いますが、どうぞよろしくお願いします」

凜とした、それでも明るい声で、彼女はそう言った。

極めつけは笑顔だった。媚びなど一片も感じさせない、華が咲いたような笑顔で、周りの空気が一気に軽くなったような気がした。

(ああ、こいつは人気者になる)

俺は教室の恍惚状態を見て、そう思った。

「えーと、朔夜の席はあそこでいいか？」

中谷が指をさしたのは偶然にも、俺の席の隣だった。

といつても通路を挟んでの隣だが。

「大丈夫です」

彼女は颯爽と歩いてきて、俺に少しばかり会釈して、席についた。近くで見ると余計に華やかさが際立った。

(地味な俺とは大違いだな……って)

俺は少しばかり彼女をじっと見つめすぎたことに気が付いて、さっと視線を前に戻した。

1 限目の休み時間から、俺の予想通り、彼女の周りには人ばかりが出来た。

「ねえねえ、朔夜さんって鷹の方から来たんだよね？ やっぱあっちから見たらここって田舎？」

ある女子がそんな当たり前のことを尋ねていた。が、当の本人はさして鼻にかける様子もなく答える。

「うーん、確かに向こうのほうが立地条件は都会だけどここの学校のほうが新しいし綺麗だし……鷹の方って名前だけ立派で実際校舎は相当古いんだよ?」

と、彼女は楽しそうに喋る。

鷹の方っていうからもっとお嬢様で堅苦しいのかと思いきや、そうでもないようだ。

「『しばらくの間』って言ってたけどまたすぐ転校しちゃうの?」

と、俺も少し気になったことを誰かが訊くと

「うーん、こっちでのお父さんの仕事が片付いたらまた向こうに戻る感じかな」

と苦笑しながら彼女は答えていた。

「あ、じゃあうちの制服は買ってないんだね」

と誰かが言うとな彼女は素直に頷いていた。

(だから制服は前のままなのか)

と、最初のうちは俺も隣で繰り広げられる会話を耳だけで聞いて一人で納得したりしていたが、こんな状態が2限、3限、と続いてくると流石に鬱陶しくなってきた。席を立てて教室の隅に移動すると

「あ、ちよつとうるさくしすぎたかな。東条君移動しちゃったよ」

「そういうところがちよつと怖いんだよねー」

「あ、やっぱり?」

と、背後でそんな女子の声が聞こえた。

(そんなこと言われても……騒ぐなどは言えねえし)

と、俺が1人ふてくされていると

「よ、英輔。何仏頂面かましてんだよ」

と、茶髪の少年が教室に入ってきた。鞆を持っていて、今さっき登校してきたらしい。

「また遅刻か? ヒロ」

「そう言うなよ、午前中に間に合っただけマシだろ?」

と笑う沢田ヒロ。俺とこいつは小5の時から付き合いで、今も同じ水泳部だったりする腐れ縁だ。校則違反で髪を染めているあたりからこいつの生活態度は確かに良くはないが、性格は悪くないし、危ないことにも首を突っ込むタイプじゃないので俺は安心して交友関係を続けている。

「お、あの子誰よ？ 転校生？」

と、早速こいつも朔夜に気付いたようだ。

「ああ。しばらくの間だけかもって話だが一応転校生だ」

「へーえ、可愛いじゃん。あそこっってお前の席の隣だろ？ チャンスじゃん」

とヒロは俺の背中を叩くが

「何がチャンスだよ。お前今まで俺の何を見てきたんだ」

と俺が言うと

「ははっ、そろそろその女子恐怖症治さねえとな。お前ビジュアル的には悪くねえのに……勿体ねえよ」

とヒロはおどける。

「それで結構だ。俺今日学食行くからな。あそこじゃおちおち食べてられん」

宣言どおり、俺はその日の昼休み、学食でパンを食べた。

そう、結局その日のうちに、その転校生は人気者になっていた。

女子からは名前で呼ばれるようになっていた。数人の男子とも楽しそうに談笑していた。放課後にはもうどこか遊びに誘われたのか、幾人かの女子と固まって下校していた。

(ま、田舎の学校ってのは転校生に弱いよな)

俺はそう思いつつ部活へ向かう。

(でもまあ、俺もあれくらい社交的だったら……)

と、柄にもなくそんなことを思っていた。

部活を終え、帰宅して、洗濯機と向かいあった時、俺は気付いた。
(あ……水着忘れた)

更衣室で着替えて、その後部室に寄ったときは確か持っていたはずなので、恐らく部室に置き忘れたのだろう。

これはかなり致命的だった。
明日も部活はあるわけで、予備の水着は今家にない。今日洗濯しなければならぬのだ。

(でも今から行ってももう校門閉まってるかな……)

と諦めかけたが、明日濡れたままの水着を着るのを想像するとどうも嫌な感じがしたので

(だめもとで行ってみるか)

どうせ今週はお袋が友達と海外旅行へ行っていて家にいないし、親父は単身赴任でもともと家を空けていた。5つ上の姉貴は大学生で、下宿中。まだ大学生は夏休み期間らしいがバイトで忙しいらしく帰ってくる予定はないらしい。

そういうわけで、俺は再び街を抜けて、坂の上の学校へと向かうことになった。

時刻はもう8時すぎで、空は言うまでもなく真っ暗だった。

学校へと続く坂道には外灯がちらほらと立っているが、あまり明るくはない。

そうして坂を上りきってたどり着いた学校も、やはり真っ暗だった。正門はきっちり閉まっている。

「あー、やっぱり閉まってるよなー」

つつい声に出して俺は嘆いた。

しかし、よくよく門を見ると乗り越えられない高さでもなさそうだし、乗り越えたら警報が鳴るとかいう最新のセキュリティが施されているとも聞いていない。さらに、いつだったか先輩から受け継いだ秘密の部室の合鍵も手元にあった。

(せっかくだし、行っちゃおうか)

と、俺は珍しく大胆な行動に出た。

無事校庭に侵入する。確かに夜の学校は不気味だが、別に校内に入るわけでもないので気は軽かった。

旧校舎の近くにある部室棟へと急ぐ。水泳部の部室は1階だ。

俺は水泳部の部室の前に立ち、暗くてよく見えない鍵穴を手探りでガチャガチャと探していた。

すると背後に、涼しげな風が吹いた。

「……………」

妙な感覚を覚えて、俺は振り返る。

するとそこには

小さなクラゲが浮遊していた。

(……………は!?)

ここは海でもない。

どうしてこんなものが浮いているのか。

そもそもこれはクラゲなのか。

そんなことを考えている間に、可愛らしく浮いていたクラゲが急に割れて、割れた面からグロテスクな牙を剥き出しにした。

「うわぁっ!?!」

俺は驚いて鍵を取り落としてしまったが、そのまま逃げた。

とりあえず校庭のほうへと戻ろうとしたのだが、後ろを確認しようとして振り返ると、小さかったはずのクラゲもどきはいつの間にか肥大化していて、俺の背丈より大きくなっていった。

(なんだよこれ!?)

夢なんじゃないかと思う余裕もなく、俺は見事に何かにつづいて転んだ。

「っ!」

早く逃げないと喰われるかもしれない。

けれど足がもつれて動かなくなってしまった。

くらげもどきの化け物は、ここぞとばかりに口を開ける。

(もう駄目だ　!!)

俺がそう、目を瞑った瞬間、

風が巻き起こった。

「へ………?」

急に空気が穏やかになったので、俺は恐る恐る目を開ける。喰われたわけでもなさそうで、俺の身体はちゃんとあった。目の前にいたはずのクラゲもどきの化け物はいつの間にか姿を消していて、代わりに1つ、人影が見えた。

「誰かいんの?」

つい先ほど死の恐怖すら感じていた俺にとっては、どこか軽薄にも聞こえる声でした。

(……でもどっかで聞いたような……)

暗闇にようやく目が慣れたのか、俺の目はその人影をはっきりととらえる。

ショートヘアに、他校の制服。

手には2本の短刀。片方からは不気味に赤い光が発せられていた。

それは間違いなく

「朔夜……？」

今日うちのクラスにやってきた、あの転校生だった。

夜の校庭に、どうして彼女が刀なんか持って立っているのだろうか。

というか、さっきの化け物は何なのか。

今更だが、これは夢だったりして。

だが掴むグラウンドの土の感覚があまりにもリアルだったし、それはないように思えた。

「ん？ お前もしかしてうちのクラスの……えーっと」

と、なんだか昼間とは雰囲気、というか口調が違う彼女がこちらに近づいてくる。

刀を鞘にしまいながら、彼女は俺の目の前にしゃがみこんだ。

ふわりとスカートが風をはらむ。俺は慌てて目を伏せた。

「東条……だっけ？」

さらに、至近距離でそんなことを言われても俺は慌てるだけだったので、俺は手だけでざっと後退しつつ

「あ、ああ。東条英輔だ」

と、意味もなくフルネームで名乗っていた。

「ふーん……」

と、彼女はそのまま何か考え始めた。

そして

「ここで腰抜かしてるってことは、さっきのアレ、見たんだよね？」

と、彼女は俺に尋ねてきた。

というかやっぱり違和感がある。

口調のせいか。

「べ、別に腰抜かしてなんか……」

と、俺はどこことなく反発気味に反論していた。

すると彼女は可笑しそうに笑う。

「じゃあなんでそこでひっくり返ってんだよ」

……やっぱり変だ。

朔夜の、明るい感じは昼間のままだが、口調がなぜか男っぽくなっている。

しかしそんなギャップに呆気にとられている暇はなかった。

「英輔」

一瞬、誰のことか理解できなかったくらい自然に、彼女は俺をそう呼んだ。

……いきなり名前の呼び捨てで。

俺が何か言う前に、彼女はにっこりと微笑んでこう言い放った。

「お前は今から私の『目』だ。目なんだから私から離れるな、逃げるな、勝手に動くな。これは命令だ」

第1話：壊れた夜（後書き）

新連載、ついに始まりました！ 1話を読んでくださったありがとうございます。ついでにありがとうございます。現代ファンタジーを書くのは2度目なのですが、また前の作品とは違った感じにドキドキできる面白い作品に出来ればいいなと思っています。精一杯頑張るのでよろしくお願いします。ここまで読んでくださった方々、ありがとうございます！気に入ってくださったら次回もどうぞよろしくお願いします。

第2話：宿直室にて

いきなり言われたその言葉の意味を、俺はまったく理解できなかった。

「は？」

俺があまりにも間抜けな声を出したせいか、朔夜はやれやれと呆れ気味に首を振った。

「とりあえず立てよ。話は中でしょうぜ」

そう言っただけで彼女は立ち上がり、俺に手を差し伸べた。

それで気付いたんだが、なぜか彼女の手は黒いグローブで覆われていた。

俺は頭を混乱させたまま、とりあえず手を借りて立ち上がる。

すると彼女はそそくさと新校舎のほうへ歩いていく。

「おい、どこ行くんだよ」

俺がそう言うと

「あ？ 宿直室だよ。お前も早く来いよ」

彼女は面倒くさげに振り返ってそう言った。

「はあ？」

……もう、何がなんだかさっぱりわからないことになってきていた。

結局俺は今、学校の宿直室にいる。

どうして鍵がかかっているはずの校内に入れたかというところ

「朝のうちに玄関にちよつとした仕掛けをしないとんだよ。ここの学校、新しいくせにほんと警備がなってないよな。私としては有り難いけど」

……らしい。

どうして宿直室に入れたかというところ

「朝のうちに鍵をくすねた。ダミー置いてきたから誰も鍵がなくなつたなんて気付かないし」

……らしい。

というか宿直室なんて古風なものがこの学校にあったという事実には俺は驚いていた。見た目はオーソドックスだが一応新築された校舎なのに。

といってもやはり部屋は真新しく、畳も緑色で蘭草の匂いがまだしていたし、壁もきれいだっただ。広さもまあまあで、シャワールーム、流し台を除いて10畳くらいだろうか。

朔夜はすでに1度この部屋に入っていたらしく、彼女の荷物らしき鞆やら紙袋やらが部屋の隅に置かれていた。

「……お前ここに住みつく気か？」

俺はその荷物の多さを見てそう尋ねた。

「ん？ まあ1週間くらいは」

彼女は軽くそう答える。

……俺は半分冗談のつもりで尋ねたんだが。

「それよりお前も明日には準備してこいよ。今回はちょっと長丁場になりそうだからな」

と、彼女はまたしても理解不能なことを言い出した。

「ちょっと待て。なんで俺までここで寝泊りする準備をしなきゃいけないんだよ」

俺は素直にそう言った。

さつきから朔夜の喋り方がまるで男なので意識せずに俺も喋っているが、さつきの発言は色々と問題があると思う。色々。

「だからー、言つたろ？ お前には今日からしばらく私の目になつてもらつて」

「だから何なんだよその『目』って!!」

俺は苛立ち気味に叫んだ。

すると朔夜は「あー、説明まだだっけ？」みたいな顔をしてから

俺に座れとジエスチャーする。

俺は仕方なくその場に胡坐あぐらをかいた。

「さつき校庭にクラゲみたいな奴いただろ？」

朔夜はそう話をし始めた。

「ああ。クラゲより気持ち悪かったけどな。あれ、何だよ？」

「ああいう化け物のことを私たちは『ケモノ』って呼んでる。まあ名前なんてどうでもいいけどな、とりあえず化け物だ」

「……ふうん。妖怪みたいなもんか？」

「いや、妖怪とは別物。ケモノっていうのはもともと人工的に創られたものらしいからな」

「は！？ あれがか！？」

「……まあその辺は私も詳しくは知らない。何の目的で誰が創ったのかも分かってない。けどケモノはたまに凶暴で、人間のものを奪う癖がある」

朔夜はそこまで言って、少し息をついた。

「人間のものって……具体的に何だよ？」

俺は気になってそう尋ねた。

「色々。ケモノによって違うけど。さつきのケモノは『視力』を奪う奴だ」

「視力？」

それで話が少し見えてきた。

「じゃあお前がさつきから言ってる『目』って……」

俺がそう言いかけると、朔夜は頭を抱えて

「ああ。昨日の夜ここに下見に来たとき、あいつに出くわして視力を半分取られたんだ」

そう、苦々しく言った。

「……半分？ お前今視力どれくらいなんだよ」

俺は不思議に思っただけで尋ねた。見た限りでは別に彼女は何の不自由も感じていないように見えるのだが。

「もともと1・0はあつたから、今は0・5くらいかな」と、彼女は言った。

「それだけあれば十分なんじゃないのか？」
確かヒロもそれくらい目が悪かったはずだが、あいつは眼鏡もコンタクトもしていないのだ。

「分かってないなあ、問題はそっちじゃないんだ。確かに日常生活は困らないけど、半分取られたつてのはこっちにしちゃ大きな痛みだ」

と、朔夜は腕組をした。

「？」

俺が首を傾げると

「ほんと分かってないな、英輔は。ケモノっていうのは普通の人間には見えないもんなんだよ。それこそ幽霊とか、妖怪とかと同じで朔夜はそう言った。

「……………」

それで俺は気が付いた。

俺は見ちゃいけないものを見たんだと。

「お前には霊視力がある。そうだろ？」

朔夜のその問いは俺にとっては詰問だった。

「……………だったら何だよ。悪いが俺は帰るぞ。もうそついつのとは関わらないって決めてるんだ」

俺はそう言つて立ち上がる。

しかしズボンの裾を思いっきり掴まれて、立ち止まらざるを得なくなつた。

「おい！ 何すんだよ！」

(ズボン危うくずり落ちそうになつただらうが！)

俺が妙なところで内心はらはらしながら振り返ると、

「そつちこそ何すんだ、だ。言つたろ？ 私から離れるな、逃げるな、勝手に動くなつて」

朔夜はただ真っ直ぐに、俺を見上げていた。

その真つ直ぐさに気圧されつつ、それでも俺は反抗した。

「そんなこと言われても困るんだよ！俺に何しろって言うんだ！？」

すると朔夜はこう言った。

「特別何をしろって言うてるわけじゃない。ただ私の前に出て、ケモノの核の位置をとらえてくれればそれでいい。今の私の視力じゃケモノの輪郭くらいしか捉えられないんだ」

「な！？お前の前に出てって……それ十分危険だと思うんだが！？」

「まあそう言うなよ。やばくなったら下がっていいから。あ、でも勝手に逃げるなよ。この校内には少なくとも3匹くらいはケモノがいるからな」

「は！？『3匹くらい』ってなんだよ、アバウトだな！？」

「そう喚くなよ。あのクラゲ、斬ったら分裂しやがったんだよ。まあ正確な数はお前が見てくれれば分かるだろうし、とりあえず頼むぞ。この学校の平和とお前の平和はお前にかかってるんだ」

朔夜はどことなく脅し文句な正論を述べながら、にっこり笑った。

で、結局俺は帰れないまま、宿直室の隅で体操座りをしていた。

朔夜はというと、シャワーを浴びにシャワー室に入っていた。

(ほんと、何なんだ、あいつ)

先ほどの会話の中でも彼女の素性はまったく分からなかった。

というより何なんだろう、この昼と夜の違いは。

昼間は、そりゃあ確かに元気で明るい子だったとは思うがそれでもやっぱり女の子らしさがあったように思う。が、今は全くそれが感じられない。

まるでオセロみたいな奴だ。

……と、そうこう考えているうちに本人が何やらぶつくさ言いな

がら出てきた。

「シャワー室狭すぎ。頭ぶつけたし」

(……シャワー室があるだけまだマシだと思えよ)

俺はそう思ったのだが、彼女は不満そうな顔のままおもむろに押入れを開けて、敷布団を一式取り出した。

そのまま白い布団に顔を埋め、

「うん、まだ新品みたいだな」

彼女はそうひとりでに満足して、そそくさと布団を敷き始めた。

「おいお前、寝るのか？」

俺は彼女の行動に付いていけなくなつて一応尋ねた。

「ん？ 仮眠だよ仮眠。ケモノが本格的に動き出すのは零時過ぎてからが多いから。英輔も今のうちにちよっとくらい寝とけよ」

そう言つて朔夜は布団に潜り込んだ。

「……つておい、ちゃんと髪乾かしてから寝ろよ！」

と、俺はつい突っ込んでいた。

昔お袋が姉貴によく言つていた台詞だ。

「……うるさいな！。母親みたいなこと言つなよ」

横になったまま彼女はそうぼやいた。

というよりも既に眠たげな声だった。

「……お前こそ男みたいだぞ。ほんとに女か？」

皮肉を込めて俺がそう言つと

「……襲えば分かるぞ。殺すけどな」

彼女はそんなことを言い残して、眠りについてしまった。

布団は朔夜が使っている一式しかなかったので、俺は部屋の隅の壁にもたれたまま眠りにつこうとした。

うつらうつらとはするものの、俺の意識は一気に眠りには落ちてくれなかった。

……部屋の壁にかかっている掛け時計の音がカチカチとうるさい。

もう少し静かにならないものだろうか。
これじゃあ眠れない。
全然、眠れない。

けど。

そう、実のところ眠れないのは時計の音のせいだけじゃない。

「……………」

真つ暗な部屋に響くのは、穏やかな寝息。

今まで修学旅行とかで男子と雑魚寝したことは何度かあるけれど、こんな羽根みたいに軽い音は初めてだった。

つまり、やっぱり朔夜は女の子なんだと認めざるを得ないわけで、それがむしろ気になってしまつて、目が冴える。

(くそ、いつそ起こしてやろうか。今何時だよ)

バックライト機能付きの腕時計を見ると、時刻は23時を半分過ぎたくらいだった。

(ちようどいいくらいだな。よし、起こすぞ)

俺はそう決心してゆっくりと彼女の方に近づいていった。

彼女は布団の中に潜り込んでしまっているのでどうにも起こしにくい形だった。

やっぱり諦めようかとも思ったが

(いや、でもどうせ起こさなきゃいけないんだし……………)

と、俺が手を伸ばした瞬間

「っ」

彼女が急に寝返りを打った。

妙に、苦しそうに。

(……………!?)

俺は一瞬彼女が起きたのかと思って無意識のうちに後ずさっていたのだが、しばらくしても彼女はそのままだったので、本当に寝返りを打っただけらしい。

が、彼女は何か言葉を漏らした。
まるでうなされるように。

「……かえ、して……」

……その後はよく聞き取れなかったのだが

(……『返して』？ あいつ、視力奪われた時のこと思い出してんのかな)

俺はそう思っつて、今度こそ朔夜の肩を叩いた。
すると

「……ん？」

彼女は普通に目を開けて、むくりと身体を起こした。

「なんだ、英輔。何か見えたのか？」

と、彼女は眠そうに目をこすりながら言う。

「え、いや……。そろそろ零時だし、起こそうかなって……」
うなされてみたいだったし、というのはあえて言わないでおいた。

「んー……そう言ってもケモノが毎日出てくるとも限らないしなあ……。英輔は窓から何か見えないか見とけよ。私もうちよつと寝るから」

と、彼女はそう言ってまたぱたんと布団に倒れこんだ。

「はー!? おいコラ、何だよそれ!？」

俺が反論しても彼女は無視するつもりらしい。またしても彼女は頭が隠れるほど布団の中に潜っていった。

が、

「……」

次の瞬間、彼女は布団を翻ひるがえして飛び起きた。

「な、なんだよいきなり!？」

俺はその派手なアクションにただ驚いていたのだが

「この階に来たぞ、化け物クラゲが」

彼女が眼を煌々とさせてそう言うので、俺は息を呑んだ。

そんな間に彼女は枕元に置いてあった黒いグローブを慣れた手つきで手にはめて、壁に立てかけてあった2本の刀を取る。

「行くぞ英輔」

そう言っつて朔夜はドアを開けた。

「お、おいちよつと待てよ」

(こっちはまだ心の準備が出来てねえっつーの!)

そう心の中で愚痴りながらも、俺は勢いよく飛び出していく彼女を追いかけた。

第2話：宿直室にて（後書き）

えーと、まだまだ謎だらけのヒロインですが、次の次くらいにもうちよつと明らかにあります。

現在ストックが6つくらいあるので、1つ仕上がれば1つ出すといった感じで行こうかと思えます。

アクションも入るんですが結構ゆったりめのお話なのでまったり(?)と楽しんでいただければ幸いです。

ここまで読んでくださった方々、ありがとうございました。次回もどうぞよろしく願います。

第3話：そして妙な生活が始まる

夜の学校は当然のように真っ暗だったが、廊下を走る分には窓から入ってくる明るさで不自由はなかった。

「なあ、どこにいるんだよ」

俺は朔夜に向かってそう尋ねていた。

ケモノがこの階にいるって言うからすぐそこにいるのかと思いきや、宿直室を出て生徒玄関のほうに真っ直ぐ走る間にはそんな影は見えなかった。

「お前気配ぐらい察せないのか！？　そこ曲がってすぐだ！」

「は！？」

そう言ってる間に俺たちは角を曲がった。

「！！！」

彼女の言うとおり、目の前にそれはいたが、

「ちょっと待てよ、どこがクラゲなんだよ！？」

廊下の天井に届きそうなくらいの白いそれは、既にクラゲの形ではなかった。

形容するならば、巨人。

顔とかそんな細かい部品は出来ていなくても、二足で立っている。

「ふーん、さっきの奴が私から奪とった視力ちから使って人間の形に化けたのか。生意気な」

朔夜はどこか苛立ち気味にそう言った。

そうしている間に巨人は俺たちに気付いたようで、巨大な足を上げた。踏み潰す気らしい。

すると朔夜が刀を抜いて、左手の刀で巨人の足を斬った。

それは空気を切るような太刀筋で、俺の前髪がふわりと浮いて……

「って！　前髪！　切れてる！　お前どこ見て刀振ってただよ！！」
ひらひらと舞い落ちた自分の前髪を見て俺は叫んでいた。

「あ、悪い。暗いと余計に見えないんだよな」

一歩間違えればひどいことになっていたのに朔夜は事後的にちょっと消しゴム借りましたよ的な言い方をする。

足を斬られた巨人は派手に倒れたが、切断された足がまた巨人の身体へとくっついていった。

「再生する力まで得たか。こりゃこつちじゃ向かないな」

彼女はそう言って左手に持っていた刀を床に置いた。

「おい英輔、奴の核はどこだ」

「は？ 核？」

いきなりそんなこと言われても答えられない。

そうしている間に、白い巨人が再び立ち上がり、腕を大きく振り上げる。

「うわあ！？」

俺は慌てふためいて避けようとするが、がしりと朔夜に腕を掴まれた。

「馬鹿！ 逃げるなつつたろーが！ 核を探せ核を！ やつの身体のとつかにあるだろ、なんか目立つもんが！」

朔夜はそんなことを言ってくる。

「は！？」

(目立つもんって何だよ！?)

俺は半分涙目になりつつある目で白い巨人を凝視する。

すると巨人の真ん中辺りに、青く光る丸いものが見えた。

「あ、あれか！？ ちょうど真ん中ぐらいに青いもんが見えるぞ！？」

そうこうしているうちに白い巨腕は振り下ろされる。

俺はまた反射的に目を瞑っていた。

すると

「真ん中だな」

俺の耳元を、そんな声が通り抜けた。

刹那、風が吹く。

秋の夜にはそぐわない、熱風だった。

俺が目を開けると、目の前には朔夜の背中があつて、その右手には赤く光る刃を持つ刀が握られていた。

その刃は白い巨人をちょうど真ん中で叩ききっていて、俺が見た青い球体も、両断していた。

巨人は静かに床に崩れ落ちる。

その身体は霧散して、青い液体だけが床に残った。

「ふう、これでやっと1匹片付いたか」

朔夜は怪しげな刀を鞘にしまいつつそう呟いた。

「あと何匹いるか分かるか、英輔？」
いきなり振られても困る。

「知るかよ、俺はあいつらが見えても気配は察知できないんだよ！
お前こそさつきみたいに気配で分からないのかよ！」

「ケモノだってそこまで馬鹿じゃねえよ。普段は気配を消してやがるんだ。……となるとあんまり使えないな、お前」

と朔夜は言う。

俺は少しばかりカチンときて

「お前が勝手に使ってるんだろが！　じゃあ俺はもう要らないな
！？　俺は帰るぞ！」

そう言い放つて彼女に背を向けた。すると

「ああ、今日のところはな。気をつけて帰れよー」

意外とあっさり彼女は俺を送り出した。

深夜、俺はようやく家に戻ってきた。

とりあえず浴びそびれていたシャワーを浴びて、食事もとらずにそのまま自室のベッドに倒れこむ。

(ああ……なんだったんだ今日は……)

宿直室であまり眠れなかった分、ここにきてよつやく睡魔が襲ってきた。

(全部……夢だったら、いい……のにな……)

俺はそんなことを思いながら、眠りに落ちた。

翌朝、目覚ましをかけ忘れていたのでいつもより起きるのが遅くなってしまった俺は、生のままの食パンを頬張りながら支度をして、予鈴ギリギリに学校へたどり着いた。

教室に入るとやはりもうほとんどの生徒が着席していて、先生が来るのを待っている状態だった。

俺がそそくさと席に着こうとすると、隣にはやっぱり当たり前のように朔夜が座っていて、

「おはよ。昨日はよく眠れた？」

なんて、『爽やかな』笑顔で彼女は言った。

……やっぱり夜とは雰囲気が違う。

使い分けているのか、それとももつと本質的に2重人格とかそんな感じなのかは分からないが、とりあえず。

「……このオセロ女」

俺はそう呟いて、席に着いた。

昨日のことが嘘みたいなのに、その日はいたって普通に過ぎていって、あつという間に放課後だった。

掃除も終わって、部活へ行こうと教室を出たのだが

(あ……そっぴや水着……。部室行かなきゃ……)

昨日の災難の、そもその原因を思い出して俺の気分は一気にブルーになる。

さらに

「おい」

後ろから、昨日初めて聞いたはずなのにもうすでに聞き慣れてしまった声に呼び止められて、俺の気分はどん底に沈んだ。

後ろから駆けてきて、ぱっと目の前に現れたのはやはり朔夜で、

「今から部活？ 終わったら宿直室に来てね」

そう笑顔で言っただけで彼女は軽やかに教室に戻っていった。

(ちょ、おい、やっぱり今日も行かなきゃ駄目なのか?)

俺はしばらく廊下に立ち尽くした。

そして日も暮れかけた6時半ごろ、俺は非常に不機嫌な顔をしながらもしぶしぶ宿直室に向かっていた。

……別にトンスラかまそうと思えばかませるのだが、そうすると明日あいつに何をされるか分からないのだ。

今日の様子を見た限り、朔夜のクラスでの人気はさらにヒートアップしており、この調子だと今期の学級委員長にでもなってしまうんじゃないかとすら思える。

ミーハーな他クラスの男子が『憐ちゃんとお友達になろうの会』とかいうネーミングセンス全くなしのファンクラブまがいのものを結成したとかいう話も森下から聞いた。

(……あいつがそうやって権力くさいものを手に入れていくと俺の生活はどんどん危険に晒されていくような気がする……)

俺は『魔王・朔夜憐』の図を思い浮かべながら、宿直室のドアを開けた。

すると、なぜかすぐくへっぴり腰気味に窓際の荷物を引きずっている朔夜の姿が目に入った。

「……何やってんだ、お前」

俺は先ほどのイメージとのギャップに呆れつつ、一応尋ねた。

「英輔っ！ お前良いとこに来たッ！」

何かよく分からないが救世主でも見たかのような顔で朔夜は走り寄ってくる。

「あれっ！ あれを何とかしてくれ！」

朔夜が窓のほうを指差して喚く。

「あれ？」

俺は何かまた良からぬものがあるのかと緊張したが、窓を見ると……蛾が

少し大きめの蛾が、窓ガラスの内側に留まっていた。

「早く外に出すとかなんとかしてくれよ！ あのままじゃわけのわからんアレルギーを引き起こす鱗粉を撒き散らしてモスラのごとく飛ぶぞあれ！」

(……いちいち形容が長いな)

「蛾くらいで喚くなよ」

俺は呆れつつ鞆からポケットティッシュを取り出して、窓際に近づく。

蛾は留まったらそうそう動かない。

俺はそつとティッシュで包んで、窓の外に放り出した。

「これでいいのか？」

俺が振り返ると、朔夜はどこか目を輝かせて

「今、お前のことちよつと見直した！」

そう言った。

(……いや、そんなとこで見直されても……)

俺は少し複雑だったが

「あーっ助かった。あのままだったらほんと寝床替えようかと思っ
てたんだよ」

朔夜が本当に嬉しそうだったのでスルーすることにした。

「寝床替えるって……他にどこがあるんだ？」

「ん？ 保健室かな。あそこならベッドもあるし、水道もあるし」

(…………なるほどな…………つて)

「おい、お前保健室の鍵まで持ってんのか!？」
俺は叫んでいた。

「ああ、今朝マスターキーのスペアを手に入れたんだ。すごいだろ
彼女は鍵をちらつかせてにやりと笑った。

(…………こいつ、手癖悪い…………)

俺は職員室のセキュリティの甘さを心配した。

「ん、そーいや何で英輔頭濡れてんの？ 雨なんか降ってないだろ
?」

朔夜がそんなことを指摘してくるので

「俺水泳部だから」

と答えると、なぜかまた朔夜は目を見開いて、

「へー、英輔って水泳部だったのかー。すごいなー」

と、本当に感心しているような顔でこくこくと頷いた。

「? なんで俺が水泳部だったらすごいんだよ」

と、素直に訊くと

「や、私全く泳げないから。泳げる奴を見ると感心するんだよ。何
で水に浮けるかなあ？」

なんて朔夜は本気で考え込むように言った。

(…………変な奴)

俺はそう思いつつ腰を下ろした。

「じゃあこっちも質問。なんでお前、昼間と今じゃそんなに違うん
だよ？」

と、気になっていたことを尋ねる。

「ん？ 違うって、何が？」

と、朔夜はきょとんとしている。

あまりにきょとんとしているので俺は尋ねにくくなってしまった。
「…………いや、ほら、口調がそもそも違うだろ。…………2重人格とか？」

「はー？ そんなわけないだろー。私は私。2重人格なんてもって
の他だし別にどっちが地つてわけでもないぞ。まあ強いて言うなら

昼間と夜じゃ気合が違う」

と、彼女は笑いながら言った。

(……気合……?)

俺は呆れて俯いた。

しばらくして、寝転がって何か本を読んでいた朔夜がこんなことを言い出した。

「……お腹減った」

「……は？」

先生が全員校舎を出るまでは宿直室の電気はつけられないので、窓際に寄って外の明かりを頼りに明日の数学の予習をしていた俺は腕時計を見た。

(……7時過ぎ、か)

「お前昨日は何食べたんだよ？」

と、俺が尋ねると

「昨日は……皆と外に出たついでに弁当を買ったな。あー、今日はどうしよっかなー。何かあったかな？」

朔夜はそう言って鞆をあさり始めた。

そして

「あ、これこれ。今マグのパツピーセットのおまけ、カエル將軍のマスコットだよな。1週間あれば全部集められるかな？」

とか言いつつファーストフード店のクーポンらしきものを取り出して

「うん、これ持って買ってこいよ英輔。ドリンクはコーラな」

俺に差し出した。

「はあ！？ おいお前、俺にそんなガキくさいもんを買って来いつてか！？」

「なんだよ失礼な奴だな。だって面倒なんだもんよ、坂下りてまた上げるの」

と、口をとがらせて彼女はクーポンを俺に押し付けた。

「そんなの俺だって同じだ!!」

俺がそう叫ぶと

「~~~~じゃあ英輔は晩飯どうするんだよ？ 食べないのか？」

朔夜が痛いところを突いてきた。

(くっそ、確かに昨日は何も食べなかつたけど結構きついんだよな

.....。ああもう！)

結局、俺はしぶしぶクーポンと財布を片手に坂を下っていた。

第3話・そして妙な生活が始まる（後書き）

宿直室で泊り込みとか1回やってみたいですねー。やけにとろとろ
進んでいるのはなぜかというところ一応これ青春モノですから（笑）。
次回はもうちょっとヒロインについて語れるかと思えます。ここま
で読んでくださった方々、ありがとうございました！

第4話：お父さんと電話

俺が街に降りて夕飯を買って戻った頃には、職員室の明かりは消えていて、宿直室に明かりが灯っていた。

「コーラの氷が溶けて味が薄くなってる。ポテトもへにやっってるし…… 朔夜はそう言っただけをひそめつつ、ハンバーガーの包みを解いた。

「人をパシリに使っという文句言っなよな」

俺はちよつとばかり正論を言っただけだ。

しかしこいつには通用しなかった。

「英輔、お前坂ゆっくり上ってきただろ」

「あの坂を走って上って来いとも言うのかお前は！」

「ああ。男だろー、それくらいトレニングしろよ」

とか理不尽なことを言いつつ、彼女は傍らに置かれた2つの銀色の小さな袋に目をやる。例のセットのおまけだ。

「2つ？ 英輔もパツピーセット？ ガキくさいって言っただじゃん」

「別にそれが欲しくて買ったわけじゃないからお前にやる」

そう言っただけ俺はチーズバーガーにかぶりついた。しかし流石にお子様用のセットじゃポテトもSだしドリンクもSなので物足りない。

……ので俺はてりやきバーガーも1個追加していた。

「何が出るかなー？」

ハンバーガーも食べかけのまま、朔夜はぴりつと銀色の袋を開けた。

（マジでお子様だな、こいつ）

俺が呆れていると

「お！ 早速カエル將軍か。やっぱいいよな、このなんとも言え

ない緊張感のない顔！」

彼女は緑色の、どう見てもあんまり可愛くない……というかブサイク可愛い系……のマスコットを見て満足しているようだった。そしてもうひとつのほうの袋も開封しようだが

「む、いきなりダブったな。まあ全5種類だもんなあ……」

と、やはり本気で少し残念そうに彼女は言った。

(ダブったか。これじゃ2個買った意味があんまりなかったかな……)

と俺も内心少しがっかりしていると

「……っておい！ 何勝手に人の鞆にマスコット付けてんだよ！」

朔夜が壁際に置いていた俺の鞆にカエルのマスコットをくくりつけていた。

「ん？ ダブったから英輔にやるよ。お前の鞆寂しすぎ。何かワンポイントあったほうが可愛いぞ？」

そう言っただけで朔夜はまたハンバーガーをかぶり始めた。

「男の鞆に可愛さなんていらねえよ！」

「そんなことないと思うけどな。そんなだから英輔はもてないんだよ」

「んな！？ 余計なお世話だ！ つーかなんでお前にそんなこと言われなきゃなんないんだよ！ 俺だってな……」

俺がむきになって叫ぶと、朔夜は目をぱちくりさせて

「英輔、女子と付き合ったこととかあんの？ 絶対ないと思ってた」と言ってきた。

「っ！」

俺は朔夜の『絶対ないと思ってた』という言葉にショックを受けたのではなく、凶星すぎることにショックを受けていた。

俺の表情で全てを読み取ったのか、朔夜は

「ははは！ 凶星だ！ 分かりやすっ！」

と、腹を抱えて笑いやがった。

(……こんのマセガキ！)

なぜか俺は同年齢の彼女に対してそんな罵倒が浮かんでいた。

食事もひと段落し、朔夜はどこかぼけつと窓の外を見ていた。

俺はそんな彼女の横顔を眺めながら、ふと思う。

(……そっぴやこいつ、結局何者なんだ?)

「なあ、朔夜。お前、どこから来たんだ？」

俺はそんな風に尋ねていた。我ながら回りくどい言い方だったように思う。

「は？ 鷹の方から来たに決まってるだろ。この制服見て分からないか？」

朔夜は当たり前のようにそう答えた。

「……ああ、そうだけどさ。何でお前、その……ケモノとかいうのを退治してるんだ？」

俺がそう言い直すと

「ああ、その辺言っただけだ。ふんふん、まだ夜更けも遠いし、ちよつとぐらいなら部外者に話しても怒られないかな」

彼女はそう一人で納得して、こちらに向き直った。

「私は『イーグル』から派遣されて来たんだよ」

「イーグル？ 鷲……？」

「そ、鷲。イーグルってのはケモノの生態を調査しつつ、排除するための組織なんだ。鷹の方学園の地下に基地があつてな、鷹の方の生徒の半分くらいがイーグルのメンバーなんだ」

……段々彼女の話がSFめいてきた。

「ちよつと待てよ、じゃあ何だ？ 鷹の方学園ってのは……」

「まあイーグル本部を隠す隠れ蓑って所かな。こんな物騒なもん貸し出す組織、表沙汰になつたら大変だろ？」

そう言っただけで朔夜は壁に立てかけてある刀を指で指す。

「……確かに、ありゃ銃刀法違反だ」

俺は昨夜微妙に切られた前髪を撫でる。

「……それにしても赤い刀のほうは何だ？ ただの刀じゃなさそうだったけど……」

と、俺が言うと

「ああ、こいつは妖刀の類だからな。『火光』^{かきろい}って銘で、^{なまえ}なんでも地獄に堕ちた刀鍛冶が煉獄の炎から生まれた赤鬼の牙から鍛えた刀らしい。だからこの世に実体のないものも斬ることが出来るんだ。でもその鬼の力っていうか呪いっていうか、そういうのが強すぎてそれを抑えるために3人ほど火に寄り付く妖^{あやかし}を入れててだな……刃を抜いたら柄まで熱くなるから特殊なグローブをはめないと持てない曲者だ。英輔も火傷したくなけりゃ迂闊に触るなよ」

彼女はすらすらと説明をしてくれた。

が、なんだか話の内容がとても物騒な気がするのには気のせいではないだろう。

煉獄とか。呪いとか。妖とか。

「話せるのはこんなもんかな。一応言っとくがこれは他言無用だぞ。もしお前がマスコミにでも垂れ込んだらイーグルにマジで暗殺されかねないぞ、はっはっは」

と、朔夜は笑って言った。

(……いや、冗談に聞こえない。マジで。俺、聞いてよかったんだろうか……)

と、俺はうなだれるが

「……なあ、お前が派遣されたってことはこの学校で何かまずいことがあったのか？ あのクラゲのせいだ」

そのことに気が付いて俺はまた尋ねていた。

「大きな事件はなかっただろ？ でも保健室にあった資料見ると、ここ数年でこの学校の生徒の平均視力がぐくつと下がってるのは多分あいつと関係あるな」

朔夜はそう言った。

(……そういえば高校に入ってから眼鏡とかコンタクトにする奴が

増えたような気もするが……)

まあ高校生だし、自然なことかと俺は思っていた気がする。しかしこれが化け物のせいだとすると少し嫌な気がしたし、視力を取られた生徒達が不憫に思えた。

「なあ、そのクラゲを倒したら取られた視力は皆に戻るん……だよな？」

「ああ、視力を完全に取られない限りは戻ってくるはずだ」

朔夜は意味深なことを言った。

「？　じゃあ完全に取られると戻らないのか？」

俺が訊くと

「ああ。何にしたって能力^{ちから}っていうのは完全に身体から離れると元の場所へ還れなくなる。少しでも残っているのなら、まだそれが呼応して呼び戻せるんだけどな」

窓の外の、どこか遠くを見ながら、彼女はそう言った。

その横顔がいつもの彼女らしくなくて、俺は少し気になった。

「……訊きたいのはそれくらいか？　私はそろそろシャワーでも浴びて寝るぞ」

そう言った彼女はまたいつもの彼女で、軽快にシャワー室のほうへ向かっていった。

またしても1人熟睡する朔夜を傍目に、俺は考えていた。

(……：そーいや、イーグルとかそーいう組織のことは分かったけど、結局あいつがなんでそんな組織に入ってるのかとか、そんな話は聞けなかったな……)

どこかで俺はそう残念がりつつも

(いや、そこまで聞く必要もないか……。あんまり踏み込んだって仕方がないしな……)

と、そうも思う。

どうせこんな妙な生活も今週中には終わるだろう。
そうすれば朔夜だってまたすぐ鷹の方に帰るんだろうし。

(……って)
そこで俺は気付く。

(これ、一応女子と同じ屋根の下で過ごしてるんだよな？ しかも
1日中……)

『同居』とかいうワードがうっかり思い浮かんでしまって、
1人でなぜか俺は赤面していた。

(ああ、姉貴にこんなこと知られたらマジ死ぬまで冷やかされるだ
ろうな……)

とか勝手に思っていると、

「ん……」

そんな、どこか艶めかしい声が聞こえた。

(!?)

あまりにもタイミングが良すぎるので俺の心臓が無駄に跳ねた。
(ええい落ち着け馬鹿！ 何上がってんだよ俺！ あんな男みたい
な女になんか興味はな……)

とか、言い聞かせていると

「……く……っ」

昨日と同じように、やはり何かにつなされるかのように彼女は苦
しそうな息を漏らし始めた。

(……またか?)

俺は気になってそろりと彼女に近づいていく。

まずいかなーと思いつつ覗きこむと、やはり額に妙な汗を浮かべ
て朔夜は唸っていた。

俺はそのまま時計を見て

(……まだ11時前か……。起こすのは早すぎる……。よな……)
と考えていると。

突然、彼女の腕が伸びてきて

俺の左腕をがしりと掴んだ。

(へ?)

しかし彼女は目を開けない。

寝ぼけているのだろっが、しかしその割に手に籠った力は相当なものだった。

(外れねー!)

俺は内心焦りつつ慎重に腕をひっぱるが、彼女の手は離れなかった。

(まずいぞ、これはまずい。このまま目覚まされたらどんな誤解を受けるか!)

と、俺が慌てる一方で、なぜか彼女の方は

「……………」

穏やかな寝息を取り戻していた。

(……………)

俺はそれを見て少しだけほっとしつつ

(いや、ほっとしてる場合じゃねえ! 外さない! 今すぐ!)
また慌てだす。

結局、15分ほど足掻いてみたが朔夜の手は外れなかった。

(………… もう、駄目だ…………)

俺は無駄に疲れてそのまま朔夜の布団の隣に倒れこむ。

(はーあ、何やってんだろ俺。もうこのまま寝ちまおうかな…………。昨日のこいつの言い草だと毎晩あの化け物が出てくるってわけでもなさそうだし?)

と、俺は目を瞑った。

するとその直後に、携帯のバイブが鳴る激しい音がした。

「!?!?」

あまりにも突然だったので俺は驚いて身をよじる。

すると知恵の輪が外れたときみたいにあっけなく朔夜の手が離れて

「……………んー?」

と、眠そうな彼女の声がした。

俺はとっさに畳を転がって転がって転がって

「いだ！」

壁に衝突した。

「……何やってんだ？ 英輔」

少し呆れ気味の朔夜の声がした。

「べ、別に！」

俺はぶつけた後頭部を手で押さえつつ、何もなかったかのように言い張った。

朔夜はそれ以上詮索せず、折りたたみ式の携帯をぱかっと開けた。暗い部屋に、そこだけ明るく光が灯る。

「……メールか。しかも高志たかしからかよ。まったくあのくそヤジ、こちがこの時間寝てるってこと何度言ったら分かったよ。いつもとはサイクル違うっての」

と、朔夜は悪態づいた。

（高志？ くそヤジ……？）

俺はそのワードを聞いて、何かあまり良い気がしなかった。

「おい、朔夜。誰だよその高志って……」

（まさか援助交際の相手とかじゃないだろうな！？ あいつ一応都会っ子だし！ 一応、可愛いし……）

都会⇨危険、という安直な公式を頭の中で描いていた俺は、真っ先にそう思っていた。

しかし

「ん？ 高志は私の保護者だよ。養父って言えば1番近いかな」

朔夜はけるっとそう言った。

「……あ、そう。保護者、ね」

俺は安心しつつも自分のアホさに呆れて、少し顔が火照ってしまった。

そうしている間に朔夜は面倒くさげにメールの内容をチェックしていた。

「その、お父さん、なんて？」

俺はそんなことを訊いていた。というよりその保護者というのはこいつがこんなことをしていると知っているのだからとか、少し疑問に思ったからだ。

「応援を呼ぶか？ とか、支給品足そうか？ とか、ちゃんとご飯食べてるのか？ とか。あーもーなんでいちいち訊いてくるかなー！ 昨日ちゃんとメールしたつてのに！」

朔夜はそう言って乱暴に携帯のボタンを押し始めた。直接会話するつもりらしい。

俺は静かにその様子を見守った。

「おい高志！？ せつかく人が寝てるときにメールなんか送ってくるなよ！ 何度言ったら分かんた！ ……は！？ ちょ、おい、何言つてんだよ！ 英輔はそんなんじゃ……」

彼女は色々賑やかに喋っていた。しかし

（ちょ、何で俺の名前まで出てくるんだ！？）

俺は内心焦った。

「は！？ 替われつて？ 何言つてんだよ、もー！ ……分かったよ、ったく」

彼女はそう言って俺のほうに携帯を差し出した。

「高志がお前と話したいんだつて」

「は！？」

俺はさらに焦る。

（ちよつと待てよー！ なんでそうなるんだ！？）

「英輔、出るなら出る、出ないなら出ないではつきりしろよー！」

朔夜も機嫌が悪いのか、どこかぴりぴりしている。

俺は仕方なくその電話を取った。

「……もし、もし？」

俺が力チカチの状態で声を出すと、

『もしもし、こんばんは。東条英輔君、だね？ 私は鷹の方……いや、イーグル本部長の朔夜高志という』

意外と落ち着いた男性の声が向こうから聞こえてきた。声だけ聞

けばとてもダンディなイメージを受ける。

「ど、どうも……」

(ちよ、待て!?! イーグル本部局長だ!?! それって1番偉い人なんじゃ……)

俺の頭は半分真っ白になってきていた。

だって、刀とか呪いとか云々を扱っている組織の筆頭だ。ヤクザのボスより性質たちが悪い。

『憐が世話になっていると思うのだが……何か変わったことはないかね?』

「え、と? 変わったこととは……?」

会話がちゃんと成り立っているのかすら分からないくらいだ。

『ふむ、例えばだよ。あの子に悪い虫が付いていないかとか。……君を含めて』

(……ちよッ!)

「付いてません! 付いてませんよ!?! 僕を含めて!」

俺はなぜか狼に追われる羊のような気分になっていた。

『……ふむ。では少しクイズをしたいのだが、東条君』

「はい?」

俺は半分泣き声だ。

(……といかなぜクイズ?)

俺の疑問をよそに朔夜のお父さんは早速問題を出した。

『今日の憐の下着は何色でしょう』

……。

……。

……。

「は?」

『10秒以内に答えたまえ。さもなければ……分かっているね? 1

0、9、……』

と、勝手にカウントダウンを始めるイーグル局長。

(ちよっと待て!?! なんだよそのクイズ!?! 俺を試してんのか

！？ 見てないって言えばいいのか！？ でもそれじゃ質問だ！

『クイズ』の意図が分からねえ！』

俺は妙なところにこだわりながら頭をフル回転させる。まるで数学の授業で、ぼんやりして聞いていなかったところを急に当てられた時のようだった。

『6、5、…………』

カウントダウンは続いている。

(まずい、何か、何か答えないとっ！)

俺は昨日のことを思い出す。

それしかなかった。

だって今日は知らないんだ。

「きよ、今日は知りませんが昨日はブルマでしたッ！！」

……………俺はそう、叫んでいた。

受話器の向こうはカウントをやめた。

朔夜も何も言わずにぼかんとしていて、世界中が沈黙したように、俺は思った。

(……………死にたい。今、死にたい)

『……………』

向こうはまだ喋らない。

俺は羞恥で耳まで焼けそうなくらい熱かった。

(もう、いい……………帰る。俺、帰る……………)

そう思った、その時。

『正解！ よく言った少年！ 君は正直者だ！！』

受話器の向こうで晴れやかな声が聞こえた。

「……………は？」

俺は思わず携帯を取り落としそうになった。

『うむ、あの子には私からスカートの下にはいつもブルマをはくように言っているのだよ、見えても大丈夫なように。だって短いだろ

う？ うちの学園のスカート。あのスカートのせいで憐に余計な悪い虫が付いたらもう私は……。ああ、そうそう、ここで君が適当なことを言ったら私の君への認識が『ろくでもない馬の骨』になるところだったよ、はっはっは」

先ほどまでの重苦しい声とは一転、とても明朗に喋るイーグル局長。

「そ、そうですか……。して、今の僕の評価は……？」

『まずまず正直な馬の骨』といったところだね。はっはっは……』
(どっちにしる馬の骨かよ)

俺が心の中で悪態づくくと、朔夜が俺の手から携帯を奪った。

「おい高志！ 何さつきから喋ってんだよ、切るぞ！」

そう言っただけはぶちつと電話を切った。

「……………」

俺は少し胸をなでおろすが。

「おい、英輔……………」

まだ問題は残っているじゃないか！

「なーにが『昨日はブルマでした』だ？ あ？ 言ってみろコラ！」

それはもう恐ろしい形相で、朔夜が俺に迫る。

「うわぁ！？ 俺は見えてない！ 何も見てない！」

その日は本当に長い日で、俺の受難はまだまだ続くのだ。

第4話：お父さんと電話（後書き）

私にしては珍しい更新スピードです。9月中はこんな感じですよ。さて、少しばかり明らかになったヒロインの素性。

ちなみに「鷹の方」はタカノホウではなくタカノカタと読みます。でもどうしてイーグル（ワシ）……？ ホークよりイーグルのほうが語呂がいいからです（笑）。

今回の話は私にしてはちょっと破廉恥な（笑）話ですねー。でもあくシオンものにスカートとなるとこれは仕方のないことだろうと（笑）。

今回は新キャラも登場して変な展開へと変わっていきます。ここまですんでくださった方々、ありがとございました。どうぞこれからもよろしくお願いします。

第5話：金髪男色男、召喚される

朔夜のお父さんからの意味不明な電話のせいで、俺はこっぴり朔夜から説教を受けた。

というより愚痴を色々聞かされた。

それで驚いたのだが

「え！？ お前のお父さん、鷹の方学園の理事長もやってるのか！？」

「ああ。まあ名前だけっぽいけど。鷹の方とイーグルは表裏一体だからな」

らしい。

しかし、そういえば

（あのお父さんは養父って言ってたけど、本当のお父さんとかはどっしたんだろ。離婚？ 亡くなった？ ……どっちにしろ訊かない方がいいか）

と俺は心の中で納得して、ただただ朔夜がああセクハラまがいのお父さんへの愚痴をこぼすのを聞いていた。

が

「なあ朔夜。そろそろ零時なんだけど……」

俺は時計を見て切り出した。このままだとずっとこいつの愚痴を聞かされる羽目になりそうだったからだ。

「ん？ でも今日は全然ケモノの気配感じないんだよな！。昼間も全然だったし」

と朔夜が言う。

「昼間も気配を感じるときとかあるのか？」

俺は少し驚く。

「ああ。ケモノが攻撃的になって活発に動くのは夜だけど、でも学校に人がいるのは昼間だろ？ あいつも視力を取ろうとするなら昼間に動かざるを得ないんだろ」

俺は朔夜の言うことに納得しつつ

「って、じゃあ今もあいつは生徒の視力をこっそり取ってるのか！？」

ということに気が付いた。

「ああ、そういうことだな。まあ私が切って分裂させちまったから1体1体が人から取れる量は少なくなってるはずだ」

と朔夜は笑うが

「……なあ、ケモノってのは人のものを取ってどうするつもりなんだ？」

と、俺は疑問を呟いた。

朔夜は肩をすくめる。

「……さあ。自分の力の蓄えにする奴もいるだろうし、もっと別の理由で取ってる奴もいるかもしれない。昨日も言っただろ？ 奴らがなんで創られたのかとか、そんなことは分からないんだって」

それを聞いて、俺はさらに疑問を深めた。

そんなわけの分からないものを、どうして彼女は倒しに行くのだろう、とか。

（お父さんがイーグルの局長だからか？ いや、でもあの過保護っぽいお父さんならわざわざ娘をこんな危ないことに誘わないよな……）

俺がそのことを尋ねようとした矢先に、彼女はおもむろに立ち上がってこう言った。

「このままじゃ埒が明かないな。一応校内回ってみるか？ 気配隠して隠れてるかもしれないし」

夜の学校は、やはり不気味だ。

新しい建物といってもやはりこの静かな感じが気味悪い。

夜の学校を舞台にしたホラー映画なんてよくある話だが、どれも

結構怖い造りになっていると俺は思う。前に見たやつなんて血生臭すぎてトラウマになってしまったほどだ。

(とりあえずトイレとか職員室には入りたくないな)

そんなことを思いつつ、結局1階、2階、3階、4階と、各階のフロアを俺たちは歩き回った。

が、特にこれといって何もなかった。

「んー。やっぱり駄目だー。気配なし。英輔、なんか見えた？」

朔夜は疲れたのかその場にしゃがみ込んだ。

(そういうリアクションをするからスカートの中が見えるんだよこの馬鹿。気を遣え、周りに)

「いたら叫んでるよ」

俺が呆れ気味にそう返すと

「女々しいなー、英輔は」

と朔夜は笑う。

「う、うるさいな。でもどうするんだよ、相手がどこにいるのかも分からないんじゃない手が出しようがないだろ。ていうかほんとにこの校舎の中にいるのか？ 外に逃げてたらどうするんだよ」

俺は腕組をして反撃する。

「んー？ ケモノは一旦根城にしたところからはそうそう離れないはずだ。今回の奴はここで随分と甘い蜜を吸ってるから特にな。…

…でもま、昨日は校庭にいたわけだからそれも考えないと駄目か」

そう言っつて朔夜は立ち上がり、赤いほうの刀を抜いた。

「……それでどうするつもりだ？」

彼女の行動の意図が全く読めずに俺は困惑する。

「疲れるからあんまり呼びたくなかったんだけど……もういいや」

彼女はそうぼやきながら、刀を使って宙に文字を書いた。暗闇に赤い光が跡をひく。

浮かんだ文字は、『三』。

「三炎の三、来い！」

彼女がそう呼ぶと、浮かんだ三の文字が膨張して、空間に穴のよ

うなものが開いた。

「は？」

俺が呆気にとられていると、その穴から何かが出てきた。

「なーによ、憐？　せつかく人が夜のティータイムを愉しんでたつて時に〜」

そんな気だるげな声と共に現れたのは、すらりと背の高い男だった。

「……！？」

俺は目を見張る。

それは、長い金糸の髪、赤い眼をした顔立ちの端正な青年だった。さらには纏っている衣服も色鮮やかな赤色の南米系の民族衣装で、あまりにもこの場にそぐわない、派手な印象を受ける。

というより、どうも人間っぽくなかった。

「むー。憐、アナタまた胸でかくなつた？　アナタが女っぽくなるにつれてワタシの士気も下がるわ〜」

と、何か矛盾しているような発言をその男がすると

「……そんなことで下げんな士気。ちなみに前呼んだ時とそう変わってないぞ」

朔夜はどこか悔しげにそう言った。

(……っーかそんな話を俺の前でするな)

俺が心の中でそう呟いていると

「あら？　そこにいる可愛い子はだぁーれ？」

と、その、なんとというか、美青年なのに口調がどうもオカマくさいその男は俺のほうに気が付いたようで、その妖艶な赤い瞳をこちらに向ける。

(……なんか、関わりたくない……)

俺の本能がそう告げていたが、

「ああ、そいつは今回特別に協力してもらってるクラスメイトの英

輔だ。私の目の代わり」

と、朔夜がさらっと俺の紹介をしてしまった。

「英輔……なかなか硬派な感じの素敵な名前ね！　ワタシ火砕かさいって
いうの。呼び捨てでいいわよ」

と、その男は俺にウインクをして近づいてきた。

(……!?)

俺が何かよからぬ悪寒を感じて間もなく、その火砕という男はものすごい至近距離まで近づいてきて

「うんうん、近くで見るとさらにかーわいーわ　　シャイっぽい

顔つきとかすごいワタシ好み。啼かせてみたいわ」

とか言つて俺の頬をその白い手で撫でた。

「……っ!?!」

俺は無意識のうちに飛び退いて朔夜の後ろに隠れていた。

「なんだよあれ!」

またしても俺は無意識に浮かびそうになった涙をこらえつつ叫び
気味に朔夜に問うと

「刀の中にいる妖の1人だよ。火砕は蛾がの化身なんだ」

と、彼女は言った。

「　　蛾!?!」

俺はそれにも驚いてまた叫んでいた。

(いや、だつて蛾って言ったら元は毛虫で……ていうか今日俺がテ
イッシュで掴んで外に出したのも蛾で……)

「火砕、英輔からかうのもそれくらいにしといてさっさと仕事して
くれよ。私の体力使つて出てきてるんだからさー」

と朔夜はあの青年に言った。

「んもう、憐つてば人使い荒すぎー！　いいじゃない、ワタシがア
ナタにかける負担なんて他の2人に比べたらものっすごい微量じゃ
ない!」

「う、る、さ、い、なあ！　微量でもかかっているもんはかかっている
んだからとつとケモノ捜してこい!」

朔夜がそう叫ぶと

「ちえく。またね、英輔くん」

語尾にハートマークをつけるようにそう言って、金髪オカマ男は姿を消した。

否、消したのではなく変化したのだ。

蝶と見間違うほどの、赤と金色の羽根を持った美しい蛾へ。

小さな蛾は赤く光る鱗粉をこぼしながらぱたぱたと暗闇に飛んでいった。

(……………ほんとに蛾なんだ……………)

と俺が呆けていると

「おい英輔、火砕の鱗粉には毒があるから気をつけるよ。私も1度ひどい目に遭ったことがある」

と朔夜が後ろで言った。

「ど、毒!? 先に言えっ!」

俺は服についていないか入念に確認する羽目になった。

結局その夜、その火砕という男は帰ってこなかった。

一応宿直室で待っていたのだが

「あーあ、もう4時かあ。朝だな、こりゃ」

眠そうに朔夜は外を見てぼやいた。

しかしぼやきたいのは俺も同じだ。

(結局ここで一泊かよ。寝られなかったし)

「俺一旦帰るぞ。今日の授業の準備とかしてないし」

そう言って俺は立ち上がる。

「ああ。そーいや今更なただけどき、お前夜中に家空けてて大丈夫なの? 家の人とか……………」

と朔夜が訊いてくる。本当に今更で俺は苦笑した。

「そういうことは先に心配してくれ。……今週は家に誰もいないんだよ。お袋が海外旅行に行つててだな……」

と俺が言つと

「え!?! そうなのか!?!」

と、なぜか朔夜は目を輝かせてそう言った。

(…………?)

俺がその意味を理解できないでいると

「だったら朝ごはんご馳走しろよ!」

と、彼女は言い出した。

「…………は? なんでそうなるんだ」

俺が率直にそう尋ねると

「だーからー英輔ん家に行くんだよ、今から」

彼女はけるつとそう言った。

俺はこの重大さにようやく気が付いて焦る。

「は!?! なんで!?!」

「だから朝ごはん……」

「朝飯くらいどっかで食べるよ! 朝マグとか!」

「えー、昨日の晩もマグだったのにー?」

「牛丼でも食つとけ!」

「えー。この制服で牛丼屋に入ると変な目で見られるんだよー」

(…………入ったことあるんだな)

と俺が呆れていると

「つておい! 何鞆持つて準備してんだよ!」

彼女は自分の鞆と俺の鞆を持って出口のほうへ歩いていった。

「ほら出るぞー、鍵閉めるぞー」

彼女のその様子から、もう逆らえないと俺は理解した。

まだ日も差していない朝の街。人通りはほとんどないが、夜の学校よりかは雰囲気はいい。

俺の家は学校前の坂道を下って、駅前を素通りして、線路沿いに歩いていったところにあるちよつとした住宅街の中にある。

この時間だとまだご近所さんも外に出てきていないから助かるといえは助かる。

親の留守中に女の子を家に連れ込んでたなんて噂が立つたらそれこそ終わりだ。

「ここだ」

俺は後ろをてこてこ付いてきた朔夜にそれとなく言つて、門を開ける。

「ふーん。このあたりは結構いいとこだな。悪い気配が全くない」と朔夜は意味深なことを言う。

俺はコメントに窮しつつ家の鍵を開けて、中に入った。

まずはリビングに直行して、荷物を置いた。

「俺風呂入ってくるから適当に食べとけよ。冷蔵庫の中のものとか勝手に使つていいから」

と俺が半ば投げやりにそう言つと

「えー！？ つまんないのー。じゃあ待ってるからさっさと入ってこいよ。覗いたりしないから」

と朔夜は妙なことを言う。

「……覗くつておい。もういいや……。家の中あんまりちよろちよろすんなよ」

俺はそう念を押して、さっさと風呂場に向かった。

本当に数分で俺がリビングに戻ると、朔夜はダイニングテーブルの上に突っ伏して寝ていた。ちよつどその席が普段俺が使っている席だというのは偶然だろうか。

「……………」

（人の家でよく堂々と寝られるなー……）

俺は半ば感心しつつ、冷蔵庫を開ける。

（朝飯ごちそうしろって言われてもなー。何にもないっていうか……。こいつもしかして家じゃ朝からリッチなもん食ってんのか？

一応鷹の方理事長の娘だし）

俺は少々困惑気味にとりあえず卵とベーコンを取り出す。

俺がベーコンエッグを焼いていると、朔夜がむくりと体を起こした。

「んー？ あ、いい匂いがするなーと思えば……。英輔ー、胡椒はたっぷり目でよろしくー」

伸びをしつつちゃっかり注文をつけるアイツ。

「はいはい」

卵を焼き終え、後ろのオーブントースターで焼いておいたトーストを取り出して皿に盛る。飲み物はもう面倒なのでいつもどおり牛乳でいいだろう。

少し不安もあったが、朔夜は文句を言わずにもくもくとその朝食を食べてくれていた。

牛乳を飲み干して、彼女は喋りだす。

「ん。これでデザートがあれば文句はない」

「あ、そ。残念ながらそんなもんはうちにはないぞ。後でコンビニでも買っとけよ」

俺もそう言いつつ牛乳を飲み干す。

「そうする。ところでさー、思ったんだけど、この家って案外普通だな」

と彼女は言った。

「は？ 当たり前だろ。普通の家なんだから」

と俺は一昨日から何回目かの『は？』を使っていた。

「いやいや、そうなんだけどー。ほら、もつと護符とかいっぱい貼ってるのかと思ってた」

「護符？　なんで？」

朔夜は両手で頬杖をつきつつ

「いや、だって英輔さ、あんまりその霊視力のこと良く思ってたなさそうだったからさ。なんか嫌なことがあったのかなーって。普通はそういう奴の家に限ってそりゃあもう結界のオンパレードなんだぜ？」

なんてことを言ってきた。

俺は溜め息をつきつつ

「……この辺は悪い気配がしないって言ったのはお前だろ？　ここに越してきてからはほんと、何にもないんだよ。すっごい平和だった。お前が来るまではな」

最後のあたりは少し皮肉を込めて付け加えておいた。

が、しかし朔夜は特段気にも留める風ではなく

「あ、そっか。そうだよなー。……ってことはお前昔からここにいたわけじゃないんだ？」

と聞き返してきた。

「ああ。小5のときにこっちに越してきた。前にいたところはもうちよつと都会だったんだけどな、とりあえず色んなもんが見えて嫌だったよ」

そう言いつつ、俺は極力その頃を思い出さないようにした。

良い思い出はあまりないのだ。

「ふーん。ま、最近じゃ都会のほうが厄介なもんが多いからな。鷹の方学園にもすっごい結界が張ってあるんだぞ。力を持った生徒が多いからな、よく惹かれて集まって来るんだよ、そういう輩が」

と朔夜はどうも気味の悪い話をする。

「あーもう、朝からそんな話するなよ。朝飯食っただろ？　ならさっさと学校へなりコンビニへなり行け」

俺はそう突っぱねて、食器を抱えて立ち上がる。

「むー、なんだよー、まだ早すぎるしー。あ、英輔の部屋どこ？
ちよつとたんけーん」

と朔夜は席を立ててふらーっとどこかに行ってしまうそうだった。

「あ！ おい馬鹿！ 勝手に人の家の中探検するな！ ていうか俺
の部屋入るなよ！？」

俺は慌てて彼女を追いかける。

あ
（…………朝から何やってんだよ俺。仮眠を取りたいんだよ仮眠を。あ
あ）

第5話：金髪男、召喚される（後書き）

火光に宿る3人の妖『三炎刀守』さんえんとうしゅの1人目が登場しました。オカマ
だけど（汗）。1番よわつちいんだけど（汗）。

そういえば『トイレとか職員室』で惨劇が起こった学校を舞台にし
たホラー映画とか「あれかな？」と勘付かれた方いらっしゃいます
か（笑）？ あれは怖かった・・・。

ここまで読んでくださった方々ありがとうございました！
次回も何とぞよろしく願います・・・

第6話：手紙

朝7時。普通の登校にしては早すぎるが、俺は朔夜と共に学校へ向かっていた。

あのまま家にいたら身が持たなかったのだ。

「ちえー、つまんないな」。英輔の部屋、グラビア雑誌の1つもないだもん」

いつの間にか昼間の口調になっている彼女はそんなことを朝っぱらからさらりと言いやがる。

「あんな、この世の男全ての部屋にそういうもんがあると思うなよ。すごい偏見だ」

俺は言った。自分と、世の中の健全(?)な青少年のために。

「そうなの？ 高志の部屋にもあったもんだからそういうものなんだと思ってた」
ぶっ。

「だから、そういうことは言うもんじゃないの！ もうちょっとお父さんのこと大事にしてやれ、色々！」

俺は少しばかりあの変態オヤジに同情した。

「これでも親孝行はしてるほうだもん。ご飯だって食べられるときは一緒に食べてるし、肩叩きだってたまにはしてあげてるもん」

と彼女は拗ねたように言った。

どうも、そんな表情とかは特に女の子らしくて。

(…………調子狂うなあ…………)

夜とのギャップに、俺はまだ慣れていなかった。

…………とか考えていると、いつの間にか朔夜の足が止まっていた。

「どうした？ なんか忘れもんか？」

俺はそう声を掛けたが、彼女は後ろを振り返って、まだ人通りの少ない通学路を少しばかり眺めてから

「…………ううん、なんでもない」

そう言って、また歩き出した。

「？」

よく分からないが、特段気にすることもなく、俺もまた歩き出した。

とりあえず教室には誰もいなくて、俺はほっとしつつ席に着いた後、そのまま机に突っ伏した。

結局、昨日もほとんど寝ていないし、今朝も仮眠を取ろうとしたのに朔夜が家の中をちよろちよろするもんだからおちおち出来なかったのだ。

「あれ？ 英輔寝ちゃうの？」

隣で朔夜がそんなことを言う。

(まったくこいつは……)

俺はがばっと身を起こしてから

「昨日全然眠れてないんだから今くらい寝かせてくれ！」

そう言って、また机に倒れこんだ。
すると

「まだ誰も来てないしつまんないなー。いや、私も眠気覚ましにコーヒーでも買って来よう」と

と彼女は言っ、教室を出たようだった。

(……俺の分も買ってきてほしい……)

そんな言葉を発する前に、俺の身体は眠りに入ったようだった。

しばらくすると、足音がして、あいつが帰ってきたことが分かった。が、あえて俺は身を起こさなかったのだが……

首筋に冷たいものを置かれて俺は跳ね起きた。

「ッ！ 何すんだお前！」

驚き半分迷惑半分で俺は少々怒り気味に叫んだが

「あ、怒った怒った！。英輔って結構怖がり？ すっごいビクッてなつてたよ」

と朔夜は無邪気に笑いながら俺の机に缶コーヒーを1つ置いた。

「？」

(……これは、俺にくれるってことなのか？)

俺は判断に困っていたが、あいつはあいつで缶コーヒーを持ってるので恐らくそうなのだろう。

というより、俺はあることに気が付いた。

「なあ、何だよそれ」

彼女は左手に缶コーヒ、右手に白い封筒を持っていったのだ。

「ん？ これ？ さっき私が自販機の前でどれ買おうか悩んでる間に後ろに置かれてたんだ」

と言って彼女は封を開けようとしていた。

「……それって……ら、ラブレター……とかか？」

自分で言っていてむずむずした。

案の定期夜は可笑しそうに笑って

「はははっ、まさかこの時代にラブレターはないよ！ メールのほうが手っ取り早いもん！ 英輔頭古っ！」

と言う。あまりに小馬鹿にされたような言い草だったので

「なんだよ！ お前のメルアド知らない奴もいるだろ！ つーか普通は知らねえだろ！」

と俺は反論した。

「まあそうだけどね。でもこれは……果たし状かな」

と、彼女は手紙を開いてそう言った。

「は？ 果たし状？」

彼女が妙なことを言うので俺はその手紙を覗き込んだ。

そこには

『大事なものを返して欲しくば19時に体育館裏に来られたし』

という手書きの文字が書いてあった。

「……おい、これって……」

俺は息を呑む。朔夜もいつの間にかどこか緊張感を帯びた顔になっ
つていて

「……火砕の奴、へマしたな。帰ってこないからまさかとは思って
たんだが……」

口調も夜のものになっていた。

「ちよつと待てよ、あのオカマ男、捕まったのか？ 誰に？」

俺はそこに疑問を持つ。

だって、敵はあの化け物みたいな生物だ。人質を取るような器用
さとか、頭とかがあるのだろうか。そもそもこの手紙だって誰が書
いたのか。

「たまにいるんだよ。人間そのものを操るケモノっていうのが。今
回のはどうも厄介だと思ったらまさかその手で来るとはなー」

と朔夜はくしゃりと手紙を丸めた。

「え、ちよ、人間を操る？ 誰かが操られてるってことか？」

俺は話に付いていけなくて頭が混乱してきた。

「ああ、稀なケースだけど。それもあんまり完璧じゃない暗示なん
だけどな。多分操られてるのはこの学校の生徒だろうけど、今頃は
また普通に普通の生活をしてるはずだ。操られてるなんて微塵も感
じないで」

と朔夜は言う。

「な……ていうか危なすぎるだろあのクラゲ！ 何だっつてんだよ！」

俺が少々取り乱すと、朔夜はどこか冷ややかにこう尋ねてきた。

「英輔、何のために私が刀2本持つてると思ってたんだ？」

「……え？」

俺はその質問の意図がよく分からなくて聞き返す。

「ケモノ切るだけなら火光だけで十分ってことだよ」

と、朔夜は机の横に掛けているまるで楽器入れのような縦長の鞆をぼん、と叩く。あの中にはあの日本刀が入っているのだろう。

「あ……」
それで俺は気付く。

確かに、言ってみれば霊体みたいな存在のケモノを相手にするなら物理的なものを切るための刀のほうは必要ないはずだ。

それでも彼女はそれを持っている。
ということは。

「ケモノ以外のものを切らなきゃいけない時もあるってこと」
と、コーヒーの栓を開けながら彼女は言った。

「……………」
それは、どういうことなのか。
俺は怖くて訊けなかった。

だから、怖くなったのかもしれない。

俺は6時半頃部活を終えても、朔夜がいるはずの宿直室に行こうという気がなかなか起こらなかった。

あいつが人間に刃物を向けるところとか、見たら色々トラウマになりそうだったからだ。

(……………どうするかな……………)
そうこう悩んでいるうちに、ヒロに付き合っただらだと部屋に居座っていた。

他にもいつも部活終了後、ここで特段意味もなく喋り続ける賑やかな部員が何人かいたし、時間は潰せた。

「あ、そーいえばこれ、部室前に落ちてたんだよ」
と同じ1年の男子が、部員が持ち込んだ漫画や雑誌などで散乱している大机の上に鍵を置いた。

「あ、それ俺のだ」

俺は手を伸ばして鍵を取る。

2日前、あの化け物に出くわしたとき落とした部室の合鍵だ。

「東条のだったのか。駄目だぞ、そういうもん堂々と部室の前に落としてたら」

と、そいつは笑う。

するとなぜか話の話題が俺関係のことになってきて

「東条ってしつかりしてそうでたまにぼーっとしてるもんな」

とある先輩が言った。

「いやいや、それでもこいつ結構やり手なんスよ？」

と、今度は隣に座っていたヒロが俺の肩をぽんぽん叩いた。

「は？」

俺は全く何が『やり手』なのか分からなかったのだが

「なんだなんだ、とぼけるつもりか？ 聞いたんだけどさ、お前今朝教室で憐ちゃんと2人きりだったんだろ？ しかもお揃いの缶コーヒー持ってたって？ 羨ましいなあ！」

と、ヒロはからかうように、それでも本当に羨ましそうに言った。

(……………む、誰から聞いたんだよそんなこと)

結局ここでもあいつの話が出るのかと俺は頭を抱えなくなった。

「憐ちゃんって……………もしかして鷹の方から来たっていう転校生のことか？ 同じクラスなのか、2人とも」

と、先輩まで話に乗ってくる。

(他学年にまであいつのことは知れ渡っていたのか。ある意味恐ろしいな……………)

俺がそう思っていると

「ええ、そうなんスよ。こいつなんか席も隣で……………お前結構色んなところで羨ましがられてるんだぞ、肝に銘じとけよ！」

とヒロは言う。

(……………羨ましがられる……………?)

それで俺はふと、思い至った。

今朝朔夜に届いたあの手紙、あの文字はやはり男子のものだと思う。

文面にあったのは『大事なものを返して欲しくば』。

それって、俺達はすぐにあのオカマ男のことだと思ったけど、実は違うってこともあるんじゃないだろうか。

例えば、あいつをおびき出すための出まかせとか。

『大事なもの』って書けば、なんか気になるし。

俺は時計を見る。

時刻は7時過ぎ。もう、朔夜は体育館裏に行っている頃だろう。

「……………」

俺は一瞬迷ったが

「……………俺、そろそろ帰ります。じゃあな、ヒロ」

そう言っただけ席を立ち、急いで暗い外に出た。

「え？　なんだ？　いきなり」

後ろでヒロがそんなひょうきんな声を出していたが、俺は振り返らなかつた。

自分でもよく分からない。

もし俺の予想が当たったとしても、俺が行ったらややこしいことになるかもしれない。

俺の予想が外れてたら、俺は見たくないものを見るかもしれない。どっちにしろ、俺が行っても仕方ないんじゃないかと、頭では分かっているんだけど。

やっぱり行かなきゃいけないという気になってしまふ。

『お前は今から私の『目』だ。目なんだから私から離れるな、逃げるな、勝手に動くな。これは命令だ』

あの言葉は一種の呪いか何かだったんだろうか。

なんていうか、もう既に、あいつからは離れられないようになってしまっているというか。

(　　) ああ、もう！ 今朝のコーヒー代、返せばよかった！

俺はあいつに作ってしまった借りを後悔しながら、体育館裏へと走っていた。

第6話・手紙（後書き）

明日で9月も終わりですね……。10月に入ると更新が少し遅くなると思うのですが出来るだけ週1更新は心がけたいと思います。それではここまで読んでくださった方々、ありがとうございます。次回もお付き合いいただければ幸いです。

第7話：危機

背の高い木が植えられているせいか、体育館裏はどこか陰鬱で、増して今は日も暮れているので真っ暗だった。

俺が駆けつけたとき、手前に朔夜の後姿が見えた。

刀を抜いている。

……とうことはやっぱりケモノ関係だったんだろうか。

「朔夜！」

俺が声を掛けると、彼女はちらつとこつちを見て

「……遅いぞ英輔！ 何やってたんだよ馬鹿！」

と、罵倒した。

俺は半分むつとしつつ半分仕方ないかな、とも思いながら彼女の傍らに構える。

すると、前方にいたのは眼鏡をかけた男子生徒だった。

彼は虫かごのようなものを右手に持っていて、その中にあの赤い蛾の姿があった。そして目を凝らすと、彼の後ろにはあの化け物のオーラのようなものが立ち昇っているのが見えた。

（……あれ？ えーと、どこかで見たような……）

その生徒の顔に見覚えがあった俺は必死に記憶を辿る。

それを遮るように、彼は声を発した。

「……やっぱり来ちゃったんだ、東条君……」

それはとても自然な発音で、しかも俺は自分の名前を呼ばれたことに驚く。

「な、なあ、操られてる人間って喋れるもんなのか？」

傍らの朔夜に尋ねると

「……暗示が弱いと見た。あいつは多分、半分くらいは自分の意思で動いてる」

と、彼女は妙なことを言った。

（自分の意思で……？ ってことはやっぱり……）

俺の予感はずれてなかったってことだろうか。

「……この蛾を返して欲しかったら、僕の言うことを聞いたほうがいいよ。この蛾を握りつぶされるのも、僕を傷つけるのも本望じゃないだろう?」

と、眼鏡の男子生徒は言う。

「イヤー！ こんな趣味じゃない男に握りつぶされて圧死なんてしたくないわ！！ たーすーけーてー！ー！！」

と、虫かごからピーピー喚く声が聞こえる。

どうもその虫かごはただの虫かごではないようで、あの蛾は男の姿に戻れないらしい。

「……火砕、お前……」

朔夜は呆れた顔で溜め息をつく。

その気持ちは俺も分からないでもない。

「……うるさい虫だ。さあ、とりあえず刀を置けよ。それから君はゆっくり10歩後ろに下がれ」

そう言われて、朔夜はしぶしぶ刀を地面に置いた。

それから言われたとおりに10歩下がろうとしたので、俺も後ろに下がろうとすると

「ちよつと待って！ 東条君はそのまま」

と、なぜか慌てたように眼鏡の生徒は言った。

「……は？ なんで……?」

俺は戸惑う。

朔夜は

「英輔、任せたぞ」

と、軽く言っただけで後ろに下がっていく。

「え、おい、ちょ!?!」

そうしている間に、眼鏡の男子はこちらに近づいてきた。

(えー!? なんだよ一体!? ていうか誰だっけあいつ！ 絶対
どっかで……)

俺が必死に考えていると、

「こつやって話をするのは2度目だよ、東条君……」
そいつは親しげに話しかけてきた。

「……？」

俺が返答に困っていると

「……もしかして覚えてない？ 僕だよ、ほら、オリエンテーション合宿のときに保健室で会った佐伯さへきだよ」

と、彼は言ってきた。

そう言われて俺はやっと思い出す。いや、実際名前なんて覚えてもいなかったのだが、会ったことは覚えている。

「あ、ああ！」

オリエンテーション合宿 それは高校入学したての頃にあった1泊2日の合宿で、クラスの親睦を深めることや高校生活のなんたるかを教わることを目的とした行事だった。

その時確かくじ引きで、俺は保健係になってしまったのだが、保健室のベッドを整えたりしているときに、確かこいつと会った気がする。

「そう、あの時はありがとう。君がくれた絆創膏ばんそうこうはまだ大事に持ってるよ」

と、彼は胸に手を当てて、しんみりとそう言った。

(……………?)

俺は、なんだか、嫌な予感がした。

「あれ以来、僕はずっと君のを見てきたのに、東条君って全然僕に気が付かないんだもの。でもま、そういう鈍いところがまた可愛いんだけどね……」

佐伯は心なしか頬を染めつつそんなことを言った。

(ちよつと待てー！ー！ー！ なんだそれは！？ こいつ、朔夜が目当てじゃなかったのかー！ー！ー！?)

俺の顔はかなり引きつっているだろうに、構わず佐伯は続ける。

「でも、ここ数日、君の行動がどうも変だなって思ってたら、今朝は朔夜さんが君の家から一緒に出てくるし……一体どういうこと！

「？」

と、すぐそこまで迫ってきた。

「えー!? どういうことって言われても!？」

俺は自然と後ずさっていた。

(つーか俺の家まで知ってるのかよ! しかも見張ってたのかこいつ!?)

「……まさか、付き合ってたなんかない、よね……?」

佐伯は上目遣いにそんなことを言ってくる。

(ていうか男にそんな顔されても嬉しくねえ!!)

俺は正直なところを心の中で叫んでいた。
すると

「おい、佐伯とやらー。別に私はそいつとどうってこともない関係だから気にする必要はないぞー。迫るなら迫れー」

と、野次のように後ろから朔夜の声が飛んできた。

「ちょ!?! お前なんつーことを!！」

俺が朔夜のほうを振り返ろうとすると、佐伯の手が俺の腕を掴んで阻んだ。

(ひい!?)

「……東条君は、朔夜さんのことが好きなの……?」

佐伯がそんなことを尋ねてきた。俺は何も考えず反射的にぶんぶんと言った。

すると佐伯は満足そうに頷いて

「ねえ、じゃあ僕とキスしてくれる? そしたらこの蛾は返してあげてもいいよ」

と言った。

(……は、い!?)

俺は固まった。

「んなツ!? 卑っ怯すぎるわよその眼鏡!! 英輔くんはワタ

シの獲物なのにいー！！」

と、かごの中からオカマ男の音がする。

ていうか慰めにもなってる。

「うるさいな、ほんと。ちよつと黙っててよ」

佐伯は少々乱暴に虫かごを地面に叩きつけた。

「ぎゃん！」

哀れなオカマ男の叫びが聞こえる。

でもそれに構っている余裕は俺にはなかった。

「おい朔夜っ！ こいつほんとにあの化け物に暗示掛けられてるのかっ！？ 自分の欲望のままに動いてるようにしか見えないぞ！」

俺は泣きかけの声で叫んだ。

「んー、だから暗示が弱いんだってー。今は多分佐伯の意思90パーセントってところかなー」

と、あいつは暢気に返答した。

「あ！ ということはお前がそいつとキスしてやったら火砕を返してくれる確率も90パーセントだぞ！ いいじゃん英輔、やっちゃえよ！ 減るもんじゃないんだしさ！」

と、元気に彼女は付け加えた。

(そーいう問題じゃねえだろー！？)

「イヤー！ 減るって！ 何かが減るのよ馬鹿！ 憐、早く止めに来なさいよー！ツッ！！」

足元でオカマ男の音が聞こえる。今回の言葉は少し胸にしみた。

しかし、もうすぐそこに佐伯の魔の手は迫っていた。

佐伯の手が俺の頬に触れる。

(ひいっ！)

……俺は、もう駄目かと思った。

すると

「英輔！ 足元に漢字の二を書け！！」

後ろから、そんな朔夜の声がした。

俺は何がなんだか分からないまま、がむしゃらに足を動かして指示に従った。

そして彼女は叫んだ。

「三炎の二、来い！！」

途端、足元から熱風が吹き上げた。

「！？」

同時に、赤い光が足元から発せられる。

よくよく見ると足元に置かれていたあの妖刀が光っていた。

それから目の前に『何か』が跳ねるように現れて

「うわっ！？」

結果的に俺は尻餅を、佐伯も反対側に尻餅をついていた。

「…………ムサっ！！」

(…………は?)

俺はその言葉の意味が一瞬分からなかった。

俺の目の前に現れたのは、女だった。

白いセミロングの髪、肩にかかる白いファー。

目立つのは側頭部から生えている白い耳だ。形からしてどうも、鼠のそれらしい。

しかしそれ以上に目立つのは、大人の艶やかさを持つその長い肢体だ。それこそ、見ているのが恥ずかしくて思わず目を逸らしたくなるものだった。

が。

「ちよつと憐ちゃん！？ 何でよりもよってこんなムサイ男共の狭間に私を呼ぶのよー！？ うわあん」

と、半泣きの声でその女は朔夜のほうに駆けて行く。

(…………ムサイ…………?)
少なからず俺はショックを受けていた。

「だって仕方なかったんだよー。火碎は捕まってるし刀は英輔の足元にあつたから…………っと」

律儀に説明していた朔夜にその白い女は抱きついていった。

「くーっ、久しぶりだわ、この感触……。最近憐ちゃんってばなかなか呼んでくれなかったから寂しかったのよーう」

と、犬か何かにするみたいに頬ずりまではじめる始末。

(…………今度はなんだよあれ…………)

俺が呆れていると、前で倒れていた佐伯がむくりと起き上がる。

「……！」

俺はとっさに虫かごを持って後ろに下がる。

「やーん、英輔クンやっさしー　ワタシを助けてくれるのねん！」

虫かごから変な声がするが俺は無視する。

明らかに、佐伯の様子がさっきまでとは違っていたのだ。

「……………」

さっきまであれほど饒舌だった佐伯は喋らない。

心なしか後ろのオーラも強いものになっていた。

「……………」

俺が及び腰になっていると、朔夜が足元にあつた刀を手にとって前に出た。

「ちょ、待て！　あいつを切るのか!？」

俺はずっと心配だったことを尋ねていた。

「馬鹿。私だってこれでも一応まっとうな人間だぞ？　人殺しなんてしない」

と、朔夜は本当に機嫌が悪そうに言った。

それでも俺はその事実に対し安心した。

「でも、じゃあどうするんだ?」

俺が尋ねると、朔夜は

「こつ、するんだよ！」

思い切り、刀の柄で佐伯の腹を突いた。
というより、殴った、に近かった。

「うー！」

佐伯はうめき声を上げてその場に崩れる。

すると、佐伯の口から白い気体が漏れ始めた。

「下がれ、英輔！」

朔夜がそう指示するので俺は言われた通りに下がった。

すると、白い気体が形を成していき、倒れた佐伯の前に白い骸骨が現れた。

その眼窩がんかの奥には不気味な赤い光が宿っている。

「……よくもまあここまで形を変えるもんだな」

と、朔夜は感心したように言った。

すると間髪いれずにその骸骨は朔夜のほうに飛び掛ってきた。

「！」

朔夜はバックステップでなんとかかわしたが、あの骸骨の動きは、
一昨日の巨人の鈍さとは比べ物にならないほど速かった。

さらに、かわされても即座に身を立て直してそいつは朔夜に襲い掛かる。

骸骨の指先は奇妙なほどに鋭利で、あんな爪に引っ掛けられたら
ひとたまりもないだろう。

そんな危ないものが、彼女に迫っていた。

「危ないー！」

俺は身を乗り出して叫んでいた。

第7話：危機（後書き）

……色々すみませんでしたー（泣）

あ、いえ、別にそういうのが特段好きってわけでもないんですよ？

ただちよつと前の連載がかなり型にはまったラブストーリーだったものですから今回はちよつと外れてみてもいいかなーと思ったわけ……。

新キャラ登場でしたが、ちなみに三炎の三とか二とかの番号は点呼するときの番号みたいなもので（笑）、古株順に1〜3となっています。つまり火砕が一番下っ端ですね。

さて、なんだか変なキャラいっぱい読者様のひきとかかなり気になりますけど、この作品は変な話だと割り切って生温かく見ていただければ幸いです。

どうぞ次回もよろしくお願いします（切に）。

ここまで読んでくださった方々、ありがとうございました！

第8話：ファーストキス

だが彼女はひるむことなく赤い刀で骸骨の爪を受け止めた。直後に体勢を低くして骸骨を思い切り薙ぐ。

骸骨は声は上げないが骨を何本かばら撒きながら後ろへ飛ばされる。しかしその赤い不気味な眼光はさらに鋭く光り、

「！！！」

骸骨が口を開いたかと思うと、そこから針のような小骨が幾つも飛び出した。

それらは一直線に朔夜に向かう。

俺の身体は無意識に飛び出そうとしていたが

(駄目だ！ 間に合わない！)

頭はそれを理解していた。

しかし

「緋衣！」

彼女がそう叫ぶと、それに呼応するかのように彼女の後ろに控えていたあの白い髪の女が即座に前に出る。

すると女の首や腕に絡みつくように巻かれていた白い毛皮が蛇のように動いて小骨を払いのけた。

そして女は不敵な笑みをたたえて

「燃えな」

そう呟いたかと思うと、2人と骸骨の周りが紅蓮の炎に包まれた。

(火！？ 朔夜は平気なのか！？)

俺が慌てて近づこうとしたら

「駄目だ英輔、君が行ったら焼死するぞ」

と、下のほうから冷静に警告する男の声がした。

「え？」

俺は驚いて手の中にある虫かごを見る。中には変わらず赤い蛾が浮いている。

(……さっきの、こいつが喋ったのか?)

俺がオカマ男の口調に違和感を覚えている間に、赤い炎は段々と小さくなって、消えていった。

そこに残っていたのは、焼けて黒く焦げた地面と、どうやら無傷らしい朔夜。そして彼女を守るように直っている、巨大な白い鼠だった。

「うあ……」

俺の身長の2倍はあるかと思われるほどの大鼠に呆気を取られて、俺はつい変な声を出していた。

「緋衣は火鼠の化身なのよ。図体でかくて怖いでしょ?」

と、元の口調でからかうように虫かごの中のオカマ男は言った。

どうやら緋衣とはあの白い女の名前らしい。

「……逃げられたか。どうも逃げ足が速いな」

朔夜はそう苦々しく言って刀を鞘に納めた。

「私の炎から逃げるなんて……」

どこか悔しげに、巨大鼠はそう呟きつつ紺色の空を見上げてから「でも憐ちゃんは私が守るからね!」

そう言う頃には元の女の姿に戻っていて、また朔夜に抱きついていた。

「あつ! ちよ、緋衣! まだ熱いんだからあんまりくつつくなよ!」

と朔夜はもがいているが

「いやー! 1秒たりとも放さないー! 今回だって火砕のアホを先に呼んでるし、それにあのほけつとしてる男は誰なのー!? 憐ちゃんは私のものなんだからー!」

と、白い女は朔夜にしがみつきなからそんなことを叫んでいた。

「……………」

俺がその様子をじっと見ていると

「緋衣はあれだけ女臭いのに男嫌いだね。……ていうかワタシがアホだなんて失礼しちゃうわ！ それに英輔くんはぼけっとなんかしてないわよ！」

と、虫かごの中のオカマ男が説明とかを入れてくれた。

ただ、俺は思った。

(……あいつの連れてる妖怪、普通なのはいないのか……?)

朔夜と緋衣という女が賑やかに戯れている間に、俺は地に倒れたままの佐伯が気になって駆け寄った。

(……こいつ、ほんとに大丈夫なのか?)

少し心配になって彼の顔を覗き込むと、確かに顔は蒼白だが、息はちゃんとしているようだし、本当に気を失っているだけのようだ。俺はほっとしつつ

(……しかし朔夜のやつ、女のくせにどんだけ力強いんだよ……男子を1発でKOさせるなんて……)

と呆れていると

「……………ん」

佐伯の手がぴくりと動いた。

「あ……………」

俺はどうしようか迷って、朔夜を呼ぼうとしたのだが

「……………東条……………くん？」

その前に佐伯が俺を認識してしまったようだ。

「あ、え、と……………」

俺が慌てていると、佐伯はぼうつとしながらも

「……………これは夢かな……………なんだかとても素敵な夢だ……………」
と、夢見心地のように呟いて、

「……………」

そのまま、俺の唇に吸い付いた。

……その時間はさして長くなかった。
顔を離れた佐伯は、寝ぼけて起きた後のように再びぱたりと地に伏した。

……ただその後の沈黙と視線が、死ぬほど長く、痛く感じられた。
そして

「……ぎ、ギヤアアアアアアアアアア！ ふ、不潔！ フケ
ツーーーー！！！」

下のほうでオカマ男が叫ぶ声が聞こえた。

「……何、さっきの。ビジュアル的に許せない」
後ろであの鼠女の声がする。

「……おい、英輔。……大丈夫か？」

そして朔夜の、どこか遠慮がちな声がする。

俺は、

「……………」

応答できないくらいに硬直していた。

死後硬直かもしれないと、本気で思った。

俺は膝を抱えて部屋の隅にうずくまっていた。
とりあえず今は宿直室にいる。

あの後佐伯をどうするかということ、朔夜が
「火砕、お前こいつを駅前の交番まで運んでやれよ」
とオカマ男に言ったのだが

「いやーよ！ ワタシ機嫌悪いんだからっ！ なんでワタシがそんな男を運ばなきゃいけないわけ？ 緋衣に頼めばいいじゃない！」
と突っぱねた。それに対して

「はあ！？ 誰に向かってそんなこと言ってるのよこの火取虫ひとりむし！」

役にも立たないであっさり捕まったくせに！ ていうか私が男背負って歩くと思ってるの！？ ばーか！」

と鼠女は子供みたいに思い切り舌を出して抗議した。

どうも、2人は仲が悪いらしい。

「……じゃあどうすんだよ。……英輔に頼むしかなくなるじゃん」

と朔夜が言ったのだが、俺が口を出す前に

「ちよつと待ちなさい！ 英輔クンにそんな危険なことはさせられないわ！ ていうかさせない！ ワタシが行くわ！」

と、オカマ男が率先して佐伯を負った。

すると彼の金髪は徐々に黒く染まり、服も派手な赤い民族衣装から、黒を基調としたカジユアルなものに変化した。あれなら街を歩いてもおかしく見られないだろう。

「お。じゃあ頼んだぞ」

「せいぜいへばんないようにね、アンタ体力ないんだから」

と、女2人は手を振って彼を送り出した。

俺も少しばかりあのオカマ男に感謝したが……。

アレのシヨックは全く抜けなかった。

「おーい英輔え、いつまでそんな隅っこでいじいじしてんだよー。

ほら、火砕の奴が晩飯も買ってきてくれたんだぞー」

と後ろから朔夜の声がする。

独特の油の匂いからしてまたマグのハンバーガーだろう。

しかしそれを嗅いでも食欲は全く起こらなかった。

「英輔クーン、こっち来て一緒に食べましょうよ」

とオカマ男の声がする。

「ていうか火砕、アンタさっさと刀ん中に戻りなさいよ！ 役目は済んだでしょー！？」

鼠女がそんなことを言った。

「な！？ それはアナタだって同じでしょ！？ いつまでも憐にひつついて、暑苦しいわね！」

「……いや、どっちももう戻っていいんだけど……。明日しんどくなるじゃん、私が」

と、朔夜がそう漏らしているが、2人は聞かぬ振りをしているらしい。

「でもほんと、ずっとそんなところでいじいじされてても鬱陶しいのよねー。いいじゃない、相手が男なら数に入らないでしょ？ そういう趣味じゃない限り」

と、最後のあたりはどうやらオカマ男を意識したように鼠女がそんなことを言った。

「む、アナタだって人のこと言えないでしょ！ でもそうよ、あんなの気にすることないわよー、何だったらワタシが本当のキッスを教えてあ・げ・る」

オカマ男のその発言を聞いて、俺の肩が無意識にビクツと震えた。「火砕、それ逆効果みたいだぞ」

朔夜が俺の気持ちを代弁する。「いやん、英輔くんってば照れてるだけよう」

オカマ男は全く分かっていない。

「どこがよ、アホ。アンタの目は節穴どころか蜂の巣なわけ？」
そう言う鼠女は目はいいらしい。

「んつまー！！ またアホって言ったわね！？ アホって言うほうがアホなのよ、このアホ鼠！！」

「んなつ！？ 仮にも先輩に向かってアホとは何よアホとは！！
身分わきまえな、このモス男お！」

なんだか小学生のような喧嘩が始まった。

ていうか今日はどうしてこんなに賑やかでやかましいんだ。

本当なら、今週は家で1人、のんびりしてるはずだったのに。

あいつに付き合わされるようになって、変な化け物とは関わることに
なるし、拳句の果てには男にファーストキスを奪われるし。

……そう、あれは、俺にとってのファーストキスだった。

(……くっそー)

不甲斐無いが、実際、涙が出そうなほど悔しかった。

だって、やっぱり最初くらいはもっと普通の、なんていうか、好きな女の子としたかったっていうか。

……実際、自分がここまで純情だとは思っていなかった。

「おい英輔」

朔夜が背後に近づいてきたのが分かった。

「もういいだろ？ キスなんて減るもんじゃないんだからさー」

と、彼女は外でも言っていたことを口にした。

俺はどうもそれが気に入らなくて振り返った。

「あいな！ 減るとか減らないとかさういうもんじゃないっつってんだろ！？ お前には分からねえよ！ ああ、もう嫌だ！ なんだって俺がこんな目に遭わなきゃいけないんだ！ 初めてのがあんなのとかもう最悪だ！ もうこんなとは関わりたくない！！ 俺は帰るぞ！！」

自分でも何を言ってるのかよく分からないまま、とりあえず八つ当たりみたいな不満を朔夜に投げつけて、俺は立ち上がった。

そのまま鞆を抱えて出口に向かう。

「おい英輔……」

朔夜が後ろから追ってきたようだが、俺は振り向かない。今日はかりは流石に機嫌が悪かった。

が、

「……英輔！」

朔夜の手が俺の左肩を掴む。

それが予想以上の力強さで、俺の身体は斜めを向かざるを得なかった。

そして

「！」

唇に、何か当たる。

それは、本当に『当てただけ』という感触しかなかったが、紛れもなく、彼女の唇だった。

わけが分からなさ過ぎて、一瞬意識が飛びそうになったが
「っ!?!?」

我に帰って、俺は慌てて顔を離す。

その時、一瞬だけ見えた彼女の表情は、『減るもんじやない』とか言っていたとは思えないほど、頬を染めながら目を伏せる、『女の子』のものだった。

そして、俺の腕にしがみついていた彼女の手もぱつと離れた。

「ギイヤアアアアアア!?!?!」

後ろのほうでまた賑やかな叫びが聞こえる。

今度は2人分だ。

「ちよつとオオオ!? 憐ちゃん何やってんのー!?!?!? そこ
の馬鹿男! 私の憐ちゃんから早く離れなさいよ!?!」

「そりゃあこつちの台詞よ!!! 憐!!! アナタまで英輔クンに何
するのー!?!?!」

と血相を変えて2人とも飛び出して来る。

「うわぁ!?!?」

俺は鼠女のあまりの恐ろしい形相に後ずさろうとしたがすぐ後ろ
はドアで、背中がぶつかるだけだった。

「あーもう、2人とも戻れ! 頼むから!」

朔夜がそう言って右手をかざすと、2人の動きがぴたりと止まる。
そして周りが赤い光に包まれて

「うわーん、強制送還なんてひどいー!?!?!」

2人してそんな風に喚きながら、赤い刀のほうへと吸収されてい
った。

静まり返る宿直室。

あの2人がいないだけで、随分と違うものだ。

俺は放心状態で、動けないまま

「……な、んだよ、今の」

と、かろうじて彼女に尋ねていた。

彼女は俺に背中を向けたまま

「……さっきの、私のファーストキス。だから、これでおあいこだ」

そう言っつて、マッグの袋があるところへ彼女は駆けていった。

そして座って

「ほら、早く食べようぜ。冷めたら不味いだろ？」

何事もなかったかのように、彼女は俺にそう言った。

「……………」

本当に、彼女は何事もなかったように振舞うので俺は毒気を抜かれたような気分になり

「……………ああ」

結局、彼女と一緒に晩飯を食べた。

第8話：ファーストキス（後書き）

今回のテーマ。

『ええー！？ それはないよ！』

ここで巻き返しを図れるかそれともひかれるかはさておきここまで読んでくださっている方々、ありがとうございます（泣）！そして応援痛み入りました（涙）。私も頑張って本作品を盛り上げていこうと思いますのでよろしければどうぞ次回もよろしくお願いします。

第9話：白昼デート

いつもより若干会話が少な目の食事を終えてから、朔夜はいつも通りシャワー室に入っていた。

止めどなく落ちる水の音。

昨日まではそんな音、意識もしなかったのに、今日はやけに大きく聞こえる。

(……いかんいかん)

俺は出来るだけシャワー室とは反対側の部屋の隅に寄った。何か別のことを考えようと思っただけで英語の教科書を開くが、やはり意識は上の空だった。

(……にしても、あいつ、キスするの初めてだったんだ……。意外だな……)

しかし

(あ、いや……こんなことしてたら男と付き合う暇もないのか……?)

と、思い直す。

一応は鷹の方学園に腰を据えているのだろうが、恐らくケモノ退治で頻繁に色んなところへ転校したりしているのだろう。

(……俺が思うのもなんだけど、あいつ、そんなに楽しいのかな？　ここで友達ができて、すぐまた離れるわけだし……)

と、俺は柄にもなく人の心配をしていた。

(いや、俺もその内の1人に入るんだよな……)

なんて物思いに耽っていると、朔夜がシャワー室から出てきた。

なんだかいつもの元気よさがなく、目もどこかとりりとしていた。

「……どうした？」

俺が声を掛けると彼女は

「……眠い。から寝る」

と言つて、押入れから布団を取り出そうとしたのだが、

「お、おい!？」

完全に布団を敷ききる前に、折りたたんだままの状態の布団の上につんのめって動かなくなってしまうた。

「こら!？　せめてちゃんと敷いて寝るよ!」

俺は慌てて駆け寄るが

「……………」

それはもう、聞く耳持たない爆睡状態で、肩を叩いても起きそうになかった。

(まったく、なんでそんなに疲れてんだ…………?)

呆れながら、俺は今日の彼女を思い出す。

昨夜は確か、こいつもあまり寝ていないはずだったが、感心するくらい授業中はしつかり前を見て授業を聞いていた。

加えて、あの刀の妖を呼ぶと体力を使うとか言っていたから、その疲れもあるんだろうか。

しかし

(このまま寝たら風邪ひくぞ？　最近夜は結構冷えるし)

と、俺は自分の上着を朔夜に被せた。

合服なので冬のものより薄手だが、ないよりマシだろう。

結局その夜も、朔夜が起きなかったので、ケモノを退治できないまま朝を迎えた。

「おい朔夜。そろそろ起きろよ、もう6時だぞ」

俺は彼女に声を掛ける。

すると

「んん…………もうちょっとー……………」

と彼女は身をよじる。

「俺一旦家に帰るからな、ちゃんと学校始まる前に起きるんだぞ」

俺がそう言つて立ち上がるうとすると、

「待つて、私も行く」

と、朔夜は俺のズボンの裾を引っ張った。

俺はまたしてもずり落ちそうになるズボンを引っ張り返して

「あーもう！ だからズボン引っ張るなよ……って」

そう抗議しようとしたのだが

「お前、手、熱くないか？」

ズボン越しにも分かるくらい、彼女の手は妙な熱を持っていた。

「ん？」

朔夜のほうは全く気に留めていないらしい。

でもその熱さはやはり異常だ。

俺はしゃがみこんで彼女の額に手をやった。

「んあ！ ちょ、何すんだよ英輔！」

まるで反抗期の子供みたいに朔夜はその手を払いのけた。

しかしその手も額も、やはり熱かった。

「お前、もしかして熱ある？ 風邪か？」

(昨日やっぱ無理にでも布団に入れてやるべきだったかな……)

俺がそう後悔しつつ尋ねると

「ん？ 熱い？ ああ、いや、これは風邪じゃないから大丈夫」

と彼女は言う。

「え、でも……」

「これ副作用だよ。妖を呼ぶと大体こうなるんだ。昨日は特に、火
砕は出しっぱだったしその上緋衣まで出したからな」

と彼女はぎこちなく笑う。風邪ではなくてもだるいことはだるい
んじゃないだろうか。

「この上着、英輔の？ さんきゅ」

彼女はどこか力ない笑顔で俺に上着を手渡してきた。

「さ、行こうぜ。朝ごはん、作ってくれよ」

彼女は立ち上がって、鞆を持つ。

「……あ、ああ……」

俺は多少不安を覚えつつ、結局またこいつを家に招く羽目になっ

た。

朝飯を作ってくれと言ったわりに、どうも彼女は食欲もないらしく
「私パンはいいや」

と言つてスクランブルエッグだけ食べていた。

俺が食器を片付けている間も机に頬杖をついてぼーっとしている
から、昨日のあのやんちゃぶりが嘘のようで、気持ち悪いくらいだ
つた。

「……なあ、お前ほんとに大丈夫か？」

食器洗いを終えて俺は声を掛けるが、返事がない。

「おい、朔夜」

俺が流し台から回ってテーブルのほうへ行くと、なんと彼女は頬
杖をついたまま寝ていた。

(………全然大丈夫じゃないだろ、こいつ………)

「おい朔夜、寝るんだっいたらせめてソファー使えよ」

俺が呆れながら彼女の肩を叩くと、彼女の身体はぐらりとこちら
に倒れてきた。

「な、ちよっ!？」

俺はとっさに抱きとめたが、彼女はぐったりとしていて、全く反
応しなかった。

それで感じたのだが、彼女の身体はまたさらに熱を上げていて、
呼吸も少し乱れていた。

(あーもう! 何だつてんだ!?)

俺はパニックに陥りかけたが

(いや、ここは冷静に、冷静に………)

と自分に言い聞かせて、すべきことを考える。

(と、とりあえず、ベッド。せめてベッドに移動させないと………)
と思いついたのだが

(ちょっと待て！ どうやって移動させるんだ俺！)
また新たな壁にぶちあたる。

「朔夜、朔夜！ 頼むから起きてくれ」

俺は必死に声を掛けるが、彼女は全く起きない。

(あーちくしょー！)

一人で喋っている感じが虚しくなってきた、俺は奮起する。

「あ、あとで文句言うなよ！ 無理するお前が悪いんだからな！」

俺は一応そう言って、というか半分は「仕方ないんだ」と自分に言い聞かせて、彼女を抱き上げた。

俗に言うお姫様抱っこ。

まさか、人生のうちですることがあるうとは。

というより、予想以上の彼女の身体の軽さに俺は驚く。

華奢だなーとは思ってたけど、実際こうしてみるとなんとというか、すっぽりと腕の中に収まってしまふという感じで、その……か

(……ってああもう！ 何考えてんだ俺！)

俺は思考を止めて歩き出す。

こうしている間にも朔夜の身体の熱さが腕に伝わってきて、そこから汗ばんでくるほどだ。

俺は少し急ぎ足で自室に向かった。

幸いベッドの準備は整っていたのでそのまま彼女をそつと寝かせる。

自分のベッドに女子が寝てるなんて、なんだか悪い夢みたいだ。

それから冷蔵庫から氷枕を取り出して、それを巻くタオルを取り洗面所に行ったついでに洗面器に水を入れて濡れタオルも作った。

部屋に戻って濡れタオルを彼女の額に載せると

「……………？」

彼女がうつすら目を開けた。

「おいお前、どこが大丈夫なんだよ。いきなり倒れやがって」

俺は安心しながらも少し刺々しい言い方をしてしまった。

「……………ん？ ああ、ここ、英輔の部屋だ」

と彼女はどこか焦点の合わない目でそう言った。

「もういいから寝てるよ。学校休めよな」

俺はそう言っただけで立ち上がる。すると

「……………英輔は？」

と、消え入りそうな声で彼女が尋ねてきた。

「え？ 俺？」

尋ねられて気付いた。

こいつをここで休ませるんだったら俺も学校を休むということになる。さすがに今の状態の彼女を1人には出来ないだろう。

「……………俺も家にいるから。適当に嘘ついて休んでやる」

俺がそう言っただけで部屋を出ようとする、彼女は何か呟いたようだったが、うまく聞こえなかった。

その後ちらほらとあいつの様子を見に行っただが、ずっと眠っているようで、本当にこのままで大丈夫なのか少し心配になった。

いつそあいつの携帯であのお父さんに電話したほうがいいんじゃないかと思いついた午前11時頃。

「……………英輔、お腹減った」

氷枕を取替えに来た俺に朔夜はそう言った。

「……………やっとなら起きたか」

彼女の顔色は随分良くなっていて、俺は胸をなでおろす。食欲も出てきたのならもう大丈夫だろう。

「んー、よく寝た。大分熱も取れたかな」

と彼女は寝転んだまま伸びをする。

「そりゃ良かったな。何食べる？ ろくなもんねえけど」

「カップ麺でも別にいいよ？」

あいつはそんなことを言う。

「や、それは流石に俺が嫌だ。適当に作ってくるから待ってるよ」と俺が部屋を出ようとすると

「おかゆは嫌だからねー」

と、あいつは注文をつけた。

本当にもう、大丈夫だろう。

「ここまでダウンするのは久々かなー。でも何でだろ。火砕からかかる負担は微量なはずだし緋衣だって長時間出してたわけでもないのになあ……」

と呟きながら、彼女は膝の上のお盆に載った卵雑炊を掬う。

ちようど雑炊のレシピが冷蔵庫に貼ってあったので適当に作ってみた。

「ん、結構いける。英輔は将来専業主夫にでもなるの？ だったら家で雇ってあげなくもないよ」

と彼女は上機嫌に言った。しかし結構真顔で、どうも本気らしい。「ば、馬鹿言え！ 誰がそんなもんになるって言ったよ！？ そんなアブノーマルなこと俺はしないからな！」

俺は地べたに座り込みつつそう返すと

「アブノーマル？ そんなに珍しい？ 要は執事だよ、執事」と朔夜は不思議そうに言ってくる。

「……そんな職種がお前んちにはあるのかよ。悪いが俺は昔から普通に普通のサラリーマンになるって決めてるんだ」

「普通、ねえ……。普通ってどんなの？」

「……とりあえずお前は普通じゃないよ、俺にとってはな」

「何それ、褒めてる？」

「……どっちかっていうとけなしてる」

我ながら素直に返しつつ俺は膝の上に置いた雑炊に息を吹きかける。すると朔夜が

「英輔猫舌？」

とからかうように言ってくる。

「うるさいな」

俺がふてくされたように返すと朔夜は可笑しそうに笑った。

ようやく、いつも通りになってきた。

結局朔夜は雑炊をぺろりと食べきって、ベッドからも出てきた。

猫舌なせいで雑炊を食べるのに時間がかかっている俺の前にちよこんと座って、俺の様子をじっと見てくる。

ていうかこの位置だとあいつの緩めてるネクタイとかその辺が生々しく見えるので早く気付いて直して欲しい。

俺は極力そのあたりは見ないように、彼女に言った。

「……見られてると食べにくいんだけど、なんだよ」

「別に」

「……なら見るな」

「えー。見てたほうが面白いんだもん」

「……あのなあ……」

俺は頭を抱えてスプーンを置いた。少し量を入れすぎたから、もうこれくらいで腹もいっぱいだった。

「もういいの？ じゃあどこか出掛けようよ」

と朔夜は待っていたかのようにそんなことを言った。

「はあ？ 一応今俺たち学校休んでるんだぞ？ そういう時は家で大人しくしてるもんなの」

俺がそう言つと

「むー。つまんないー」

朔夜は子供のように口を尖らせる。

「あーもう、つまんないんだっいたら今から学校行けばいいだろ？」
俺がそう言つと

「ん。あ、そっか。まだお昼からの授業は間に合うね。じゃあ行くよ英輔」

と彼女は立ち上がった。

「おい！ 俺は行かないぞ！ 休むって言っちまっただから今さら行けるかよ！」

俺は慌ててそう言った。

「えー。じゃあ別のところ出掛けようよ」

「だから！ なんでそうなるんだよ！ 家で大人しくしとけよ！」

「つまんないー！」

……なんだか小さな子供を持つ日曜の父親みたいな気分になってきた……。

で、なんでか、俺は電車に揺られている。

隣にはご機嫌そうな朔夜が座っている。

時刻は13時。この時間に電車に乗っているのは主婦とか仕事中のサラリーマンくらいで、人はあまりいなかった。

(……にしてもこいつと同時に休んでたらまたヒロあたりになんか言われそうだな……)

確か、先ほど朔夜は学校に電話を入れていた。

それはもう丁寧に、

『朝から急に熱が出てしまって、その時家に誰もいなかったものだから……はい、今は大分良くなったんですけど、午後も大事を取って休もうと思います。連絡が遅れて申し訳ありませんでした。はい、ありがとうございます。ご心配お掛けしました』

……だそうだ。

「あ、ちょっと都会っぽくなってきた」

と、窓の外のビル街を見て朔夜ははしゃぐ。

どこかに出掛けるといっても、地元じゃほんと、何も無いし、万が一クラスメイトに出くわしたら不審に思われるだろうということ

で、俺たちは電車に乗って少し街のほうへ出てきたというわけだ。
「降りるぞ」

俺はやれやれと立ち上がる。

この駅の付近は最近建てられたショッピングモールやら、その他
娯楽施設が整っているので遊びには1番向いている。

俺も何度か部活の連中と来たことがあったが、男同士なのでどう
してもゲーセンとかカラオケとかになっっていたが

(……どこ行くよ)

俺は朔夜のほうを見て頭を悩ませる。

そんな今の朔夜は、いつもの制服姿ではない。

昼間から街で制服を、しかも鷹の方のそれを着ているとそれこそ
変な目で見られるので、着替えさせたのだ。幸い家にはまだ姉貴の
服が残っていたから、適当に選ばせた。後でちゃんと洗濯して元の
場所にきちんと戻しておかなくてはならないが……。

「あの辺見てみたいなー」

俺の心配は不要だったらしく、早速彼女は目標を見つけたようで、
少し小走りに先に行く。

秋らしい、からつとした日差しの中で、くるりところらを振り返
る彼女を見ると

(……可愛い……)

と、不覚ながらも俺は思ってしまった。

多分、服のせいだとも思う。

鷹の方の制服だって、うちの色気の無いセーラー服よりかはずっ
とマシだと思うが、私服となるとやはり制服にはない魔力がある。

上は秋らしい色のカットソー。下はデニムのミニスカート。

姉貴があんな短いスカートを持っていたことに俺は驚いたのだが、
やはり活発な朔夜にはあれくらいのスカートがよく似合っていた。

……目のやり場に困るのが難点だが。

とか色々考えてぼーとしていると

「英輔、早くー」

と、知らない間にかなり朔夜との距離が開いてしまっていた。

「おい待てよ！ 迷子になるなよ」

俺は保護者の気分であいつを追いかけていた。

結局俺はぶらぶらと何件もブティックに付き合わされた。

途中ランジェリーショップなんぞの前であいつが立ち止まるから俺はどうしようかと焦ったものだ。

するとあいつはけらけらと笑って店に入ろうとしたので俺は必死に止めた。

その後本屋に立ち寄ったのだが、あいつが何を見るのかと思いきや、コミックのほうではなく文庫のほうに行ったのに俺は少しばかり感心した。

(そっぴやこの前もなんか本読んでたな……)

「お前、本好きなの？」

と俺が尋ねると

「ん？ まあ。漫画も好きだけどすぐ読めちゃうでしょ？ その点文庫のほうがお暇つぶしには向いてるかなーって」

と彼女は平積みになされた文庫を物色し始めた。

すると

「あ、これ前に緋衣に貸したら続編読みたいって言ってた本だ。買ったってあげようかな」

と彼女はとある本を手に取った。

その本のタイトルは

(……『観音様がみてる』……?)

タイトルもさることながら、どうも怪しげな雰囲気のもの2人が表紙を飾っていた。

「……面白いのか、それ」

俺が尋ねると

「英輔も読む？」

と朔夜はその1巻にあたる分を手にとって差し出してきたが

「……いや、いい」

俺は断っておいた。

すると朔夜はまた文庫を物色し始め、はたまた怪しげなコーナーへと入っていった。

「あー、これは火砕が欲しがってたっけ。せつかくだし買っというあげよーっ」と

と彼女が手に取ったのは……

(……『淫らな夜に紳士は堕ちる』……)

どう見ても男同士が絡んでいる表紙だ。

「おい！ お前もつと普通の小説買えよ！！」

俺は昨日の悲劇を思い出してつい叫んでいた。

「んー？ 普通のじゃ刺激が足りないんだもん」

と、ある意味すごいことを言っただけで彼女はどんどん怪しげなコーナーに入っていく。

「おい馬鹿！ そっち成人向け！ お前入れねーだろアホ！！ て

いうか入るなー！」

俺は必死に彼女を止めに入った。

(……俺、何やってんだろ……)

第9話・白昼デート（後書き）

今回は普通の路線に戻りつつ（？）憐ちゃんデレデレの回でした。私は基本ツンデレが好きなんですけど（）、憐ちゃんはどうもツンデレではないですね。でも彼女が甘えるのは英輔君と三炎あたりくらいなものなんだと思われませう、はい。

マツハ低空飛行中の本作品、めげないで読んでくださっている方々、いつもありがとうございます（涙）。次回もお付き合いいただければ幸いです。

第10話：水の記憶

なぜか妙に本屋で体力を使った俺は、少し休憩がしたくて本屋の前にあつた喫茶店に入った。

俺はホットコーヒー、朔夜はフルーツパフェを頼んでいた。

「んー、おいしー」

と、彼女はとても幸せそうにパフェをつつく。

「……お前なんでそんな元気なんだよ。一応病み上がりなんだろ？」
俺が呆れてそう尋ねると

「うん。でもなんか今はやけに元気いいんだよねー。身体が軽いつていうか、魂が軽いつていうか？」

と朔夜は変なことを言った。

俺はコーヒーがぬるくなるのを待っていた。その間、あまりに手持ち無沙汰だったので彼女の様子を眺めていたのだが、彼女はこちらの視線に気付いたようで

「ん？ 英輔も食べたい？」

とアイスをすくって差し出してくる。

「馬鹿！ いらねーよ！」

俺は少々顔を赤くして叫んでいた。

「ふーん？ 緋衣なら喜んで食べるんだけどなあ……」

と彼女はさも不思議そうに言った。

(……こいつは……)

俺は呆れつつ、妖のことで引っかかっていたことを思い出した。

「なあ、聞きたかったんだけどさ。お前の連れてる妖って、もちろん霊視力あるんだよね？」

「そりゃあそうだよ。同類は同類を見るんだから」

と彼女はさも当たり前のように言った。

「……じゃあさ、俺って必要あつたのか？」

と、俺は根本的なところを突いた。

すると朔夜は

「あ、なるほど。三炎がいたら自分は要らないんじゃないかって？
英輔妬いてるんだ？」

と意地悪気にあいつは笑った。

「んな！？ ちがつ！ なんてお前はそういう変な解釈するんだよ
！！」

と俺は思わずテーブルを叩きそうになった。

「もー、冗談だってば。英輔が言いたいのは、『別に俺に頼まなくても火砕たちが私の目の代わりになるじゃないか』ってことでしょ？」

と朔夜はまた笑う。俺は不機嫌気味にこくりと頷いた。

「それが駄目なんだって。三炎は火光に宿ってる妖だけど、一応皆私と契約して取り込んでるから、つまり私と一心同体に近いわけ。

私の力が弱まると、三炎の力も弱まるし、私の霊視力が下がったら三炎の霊視力も下がってるの」

と彼女は言った。

「……ふーん……」

俺は納得した。

しかし不思議なことにはがっかりはしていなかった。

俺が御役御免なら、こんな変な生活とはすぐサヨナラできるとい
うのに。

「……なあ、刀には3人の妖がいるんだよな？ もう1人ってど
んやつなんだ？」

俺は特段意味もなく尋ねていた。

「なに、英輔、妖に興味出てきた？ まあ分からないでもないよ。

火砕はあんなだけ一応美形だし、緋衣も男嫌いだけど美人だもん
ね」

「いや！ だから！ 別にそういう意味じゃ……」

俺が必死に弁明しようとしているのにあいつは全くもって無視し
て続ける。

「もう1人はね、焔ほむっていうんだけど、可愛いよ」

「……可愛い？ ……女？」

俺がそう言っていると朔夜はどこかにやりと笑う。

「ぶつぶー、残念だったね。焔は男の子だよ」

「あ、そ。男の子って……」

「外見はほんと、子供なんだけど、すっごい強いんだから。なんたって神の使いとも言われる鹿の化身だからね」

と、彼女はどこか自慢げにその妖のことを語った。

「……でもその分私の体力消耗が激しいから呼び出しても数分しかもたないんだよねー。そこが玉たまに瑕きずかな……ってまあ私が悪いんだけどねー」

そう言って、彼女は苦笑いをする。

「ふーん……」

彼女がそんなにリスクを伴う奴まで飼っているのかと思うと、少しばかり尊敬する。

でも、なんだってそこまでするんだろう。

「……なあ、お前さ、なんでケモノ退治なんかしてるんだ？」

俺は訊かないでおこうと思っていてことを訊いていた。

他人の事情に首を突っ込むなんて、自分にしては珍しいと思うし、おかしいとも思う。

でも、妙に気になったのだ。

「……………」

案の定、彼女はスプーンを銜くわえたまましばらく沈黙した。

(……やっぱりまずかったかな)

俺は思い直して

「いや、言いたくないんだったら別に言わなくていい。悪かったな俺はそう言って、慌てて生ぬるいコーヒーを飲み干す。

「……うん」

彼女はそう呟いて、またパフェを食べ始めた。

日も暮れた頃、俺達は地元の駅に戻ってきた。

俺は特に何も買わなかったから、結局ずつとあいつに付き合わされた感じだ。

まあ、退屈はしなかったが。

「よし、じゃあ気合入れていくぞ英輔！ 今日こそケモノを仕留めるぞ！」

と、口調が変化した彼女が腕を振って歩き出した。

「ん。まだ1匹しか倒せてないもんな」

と俺が言うと

「うるさいな！ 昨日は惜しかったんだぞ！」

と彼女は口を尖らせて言う。

「へいへい」

確かに昨日のは惜しかったと思う。

というより完全に仕留めたと俺も思ってたくらいだ。

「でもあのすばしっこさ、なんとかしないと。作戦立てよう、

作戦。私が隊長で、英輔は参謀つてとこかな。三炎は精鋭部隊だ」

彼女はどこか楽しそうにそう言った。

(……全く、今から化け物と戦いに行くのに……)

そう呆れながらも、俺も心のどこかで、こんな『非日常』な会話を楽しんでいたのかもしれない。

自然と頬が緩んでいた。

場所は宿直室。

朔夜は部屋の真ん中に風呂敷を開いていた。

「なんだよそれ」

俺が尋ねると

「イーグルからの支給品。色々役立つアイテムが入ってるはずだ」と彼女は木の箱を開ける。

「なら最初から使えよ」

と俺が言うと

「こついう小賢しいの使うの面倒なんだもん」

とあいつはさらっと言った。

そして彼女がまず取り出したのは

「……属性護符か」

5色の札だった。

「護符って……結界張るやつだろ？」

「ああ。でもこれはイーグル特製の護符で、ケモノを縛るための札だ。あいつの属性と反対に位置する札が有効だから……いやちよつと待てよ」

と朔夜はひとりでに突っ込む。

「なんだよ」

「……あいつの属性分らないじゃん。クラゲの形してたわりに水の中にいたわけでもないし、どんどん形変えるし」

と朔夜は苛立ち気味に札を放り投げた。

「ケモノに属性なんてあるのか？」

あいつが放り投げた札をせっせとかき集めながら俺は尋ねる。

「ケモノに限らずこの世のものには少なからず属性がついてるもんだぞ。水の中に棲む奴は水属性、火に近寄るのは火属性……ってな感じに」

と彼女は言って、また箱をあさりだした。

(ふーん。じゃあ人間にもあるのかな、属性とか)

と俺が考えていると

「ん、これはなんとなく使えそうだな」

と彼女は平たい円形の金属の塊を取り出した。

「なんだそれ」

俺が尋ねると

「フリスビー。これ、ただの金属じゃないんだぞ。国の最先端技術をもってして創られた特殊合金で、1960年にイギリスで発見さ

れた……」

と話が長くなりそうだったので

「何に使うんだよ」

と俺が尋ね直すと

「投げるんだよ。このフリスビーならケモノが霊体になってもダメー
ジを与えられる。英輔に渡しとくな」

と朔夜は俺にその物体を手渡してきた。

しかし

「重っ!？」

俺はその予想以上の重さに驚いた。

なんていうか、体育の砲丸投げに使う砲丸くらいの重さがある。

「こんなのフリスビーじゃねえよ!」

俺がそう言うと

「むー、でもあと役に立ちそうなのないんだもん」

と朔夜は箱の中を見て言った。

俺もその箱を覗き込むと、中には不気味な日本人形やら変な形の
ラジコンカーみたいなものしか入っていなかった。

「……イーグルって……」

俺はうなだれた。

しばらくして、あいつはシャワーを浴びに行った。その後いつも
ならずぐ寝に入るのだが、今夜の朔夜は布団にもぐっても眠る気配
を見せなかった。

「……どうしたんだよ」

どうも調子が狂って俺が尋ねると

「今日はいっぱい寝たからあんまり眠くないんだよー。どうしよっ
かなあ……」

とあいつは寝返りを打った。

頭だけ出してこっちを眺めてくるあいつを見ていると、どうもく

すぐつたい気分になる。

俺は気恥ずかしくなつて視線を外した。すると

「なあ英輔、何か面白い話しろよ」

と朔夜は言つてきた。

「……は？ 俺は絵本を読んで子供を寝かしつける母親じゃないんだぞ」

と俺は呆れ気味に答えた。

「なんだよ、誰もおとぎ話を聞かせろなんて言つてないだろー」

とあいつは拗ねた声で言った。

「……じゃあ何の話しろつて言つんだよ。俺が面白い話出来るような男に見えるのか？ お前は」

と俺も少しひねた言い方をする。

「んー、見えない」

そしてあいつはすっぱりとそう答える。

「あつそ」

それに対して特段怒りも感じずに俺は溜め息をついた。

(どうせ俺は面白くない男だよ)

そんなことは随分前から分かっているつもりなんだから。

「じゃあ私が質問するぞ」

と、彼女は手法を変えてきた。

「は？」

俺が口ごたえする前に

「英輔つて昔から水泳やつてたの？」

とあいつは質問を始めた。

「……習い始めたのは小3のときかな……中学のときも一応水泳部だった」

と、俺は素直に答えていた。

「ふーん。でもなんで水泳？ 男子ならサッカーとか野球とかバスケットか、他にも色々あるだろ？」

とあいつは興味深々の様子で尋ねてくる。

確かに水泳部はあまり人気がなく、部員も少なめだ。

着替えも面倒だし、疲れるし、冬の練習は室内プールを使うといつてもやはり寒い。

それでも俺が水泳にこだわったのは……

「……前に住んでたとこの近所にな、大きめの池があったんだよ」俺は昔話をしていた。

今じゃあまり思い出したくない頃の話だ。

勿論誰にも話したことがない。付き合いの一番長いヒロにだって話したことはない。

けれど朔夜相手になら自然と喋っていた。

あいつが『そっち側』の人間だからかもしれない。

「で？」

「そこでさ、事件があったんだ。女の子が溺れたらしくって、助けに入ったその子の両親が亡くなっちゃったって」

それは、悲しい事件だった。

『事件』。そう、あれは事故じゃなく事件だ。

前からあの池には嫌な気配があったから、俺は極力近寄らないようにしてたんだ。

するとあの事件が起こった。

周りは事故として処理したけど、俺には分かる。

あれは何か良くないものが絡んだ事件だったと。

「……で？ それと何か関係あるの？」

と朔夜は尋ねてくる。

「あ、ああ……。その女の子は奇跡的に助かったらしいんだけどな。俺、その話お袋から聞いて思ったんだよ。『俺が泳げたら、助けに行けたかも』って」

そこまで言って、俺は後悔した。

これは、暗い話だ。

いい話でもなんでもない。

あの池は良くないって知ってたのに、そのことを伝えられなかった自分が嫌で、だから俺はそう思った。

……結局これは単なるエゴ。

自分が許せなかったから、泳げるようになることが、せめてもの慰めだったのかもしれない。

そう思うと、つい涙腺が高まって、

(やば)

俺は慌てて後ろを向いた。

朔夜は黙っている。

俺が泣きそうになったことに、気付いたのかもしれない。

「悪いな、暗い話で。やっぱり俺は駄目だな」

俺は後ろを向いたまま、そう謝罪した。
すると

「……………うん」

朔夜はくぐもった声で言った。

「英輔のそういう地味に優しいとこ、私は嫌いじゃない」

そのまま宿直室は沈黙に飲まれて、いつの間にかあいつの穏やかな寝息が響いていた。

そして深夜零時。

俺は妙な耳鳴りを覚えた。

神経が研ぎ澄まされるかのような、奇音。

まるで何かの警告音のようだった。

すると珍しく、朔夜はひとりでに目を覚ました。

「……いる。2階……だな」

と彼女が言う。

(……この耳鳴り、そのせいか……?)

そう思ったが、それもおかしな話だ。俺はケモノの姿は見えても気配までは察知できなかったはずなのに。

「……しかし妙だな。気配が強すぎる。今まで隠れてた奴が、一体どういうつもりだ？」

朔夜はそうひとりごちながらも、グローブをはめて、刀を手にする。

俺も一応あの重いフリスビーを手にした。

「行くぞ英輔。やつの姿を見たら核の位置をすぐに私に教える。今回は先手必勝だ」

「分かった」

そうして俺達は、戦場へと向かった。

第10話：水の記憶（後書き）

ちよっぴりシリアスも混じってきたミッドナイトブレイカーもついに10話までやってきました。そろそろ執筆活動も詰めに入っております。しかしこういうときに限ってまとめてゆっくり書く暇がないっていうジレンマがあります・・・。

ともかくにもここまで読んでくださった方々、ありがとうございました。次回もお付き合いいただければ幸いです。

第11話：煉獄

真夜中の校内を俺達は走り、階段を登る。

耳鳴りは段々と大きくなってきていた。

「すぐ近くだな」

俺がそう呟くと

「ああ……って英輔、いつからケモノの気配が分かるようになったん……」

と朔夜が尋ねきる前に、それは姿を現した。

「……！」

職員室の前に、それは立ちはだかっていた。

不気味に光る赤い8つの眼。

太く、毛羽立ったような6対の脚。

ガチガチと鳴る、いかにも強靱そうな顎。

そして黒い巨体。

それは、巨大な蜘蛛だった。

「うア……」

あまりのグロテスクさに俺は吐き気すら催したが

「……いつ、い」

傍らで明らかに羅列がまわっていない声がして、不審に思ってそちらを向くと

「いいやー……！！！！ くくくクモっ！！ キライ……！！」

朔夜が顔を真っ青にして叫びながら俺の後ろに隠れた。

「いだだだ！ ちょ、朔夜！ 掴むな！ 手、背中に食い込んでる……！」

あまりの強さで背中を掴まれたため俺は苦痛の声を上げる。が
「えええ英輔っ！ あれ殺して！ お願い……！」

俺の言葉は全く耳に入っていないようで、朔夜はすっかり逃げ腰モードだ。

さっきまであんなに戦闘やぶるきまんまん体勢だったのに。

「おい！ 俺にどうしろっていうんだよ！ あれケモノだろ！？」

そうこうしている間に巨大蜘蛛はこちらにザカザカと駆けてくる。予想以上の速さで。

「いいいいやあああああああ！！！」

「く、くるなああああああ！！！」

それぞれ絶叫しながら俺達は来た道を全力で逆走する。

先に行く朔夜の足は速い。

男の俺でも追いつけないくらい、有り得ないスピードだ。

あれくらい走れるんだったら陸上のエースにでもすぐになれそうだ……とか暢気に考えていると

「うごあ！！！」

俺の背中に何かが当たって、俺はそのままうつぶせに転倒した。まだうつぶせで何も見えないから良かったのかもしれない。

背中に重みを感じる。恐らく、蜘蛛の脚に押さえつけられているんだろつ。

「え、英輔っ！？」

朔夜は階段にさしかかる前で俺の奇声に気付いたのか、立ち止まつてこちらを見る。

すると巨大蜘蛛が朔夜に向かって糸を吐いた。

「っ！？」

流石に糸は避けられなかったのか、彼女は階段横の非常扉はりつけに磔はりつけにされる形になった。

「さ、朔夜！！」

蜘蛛はそろりと俺から脚を離して、ゆっくりと朔夜のほうへ近づいていく。

俺はすぐに立ち上がって、手に持っていた例のフリスビーを精一杯蜘蛛に向かって投げつけた。

するとフリスビーは蜘蛛の胴体を少し掠ったものの、深手を負わせた様子もなく廊下の窓ガラスを派手にぶち割り、そのまま夜の空へと飛び立った。

「っ、使えねー!!」

すると蜘蛛が鬱陶しそうにこちらに向き直って糸を吐いた。

「うっ」

予想以上に強力な蜘蛛の糸が俺の身体にまとわりついて、動けなくなってしまうた。

「英輔の馬鹿っ！ 間抜けえっ！」

半泣きの朔夜の声が聞こえる。

「悪かったな間抜けで!!!」

俺も不甲斐無さから泣きたい気分だ。

蜘蛛はそんな俺の醜態をあざ笑うかのように一瞥してから、また朔夜のほうへ近づいていく。

「あいつ、朔夜を狙ってるのか……?」

「く、来るな来るな来るな!!!」

朔夜はヒステリックに叫んでいる。が、蜘蛛が言うことを聞くはずもなく、それは彼女のほんの鼻先まで近づいたようだった。

ガチ、ガチ、ガチ。

蜘蛛の顎の音だろうか。

奇怪な音が廊下に響く。

ガチ、ガチ、ガチ。

その音はどこかリズムを持っていて。

『 火……否、炎か』

結果、俺の頭の中で言葉に変換された。

(な……?)

蜘蛛は再び顎を鳴らす。

『視力をあれだけ奪われてなお私が見えるか、娘。流石は古より交

わりを嫌い血を濃くした血族よな』

次は確かにそう聞こえた。

(……あの蜘蛛が、喋ってるのか?)

そうとしか思えなかった。

『良い。お前の血肉を奪えば私は独立することが出来るやも知れぬ』
それを聞いて、背筋に悪寒が走った。

「朔夜!! 逃げろ!!」

俺は精一杯声を張り上げて叫んでいた。

刹那、またしてもガラスが割れるような派手な音がした。

先ほど投げたフリスビーが、空中散歩の末戻ってきたのだ。

全く回転の衰えないそれは、今度こそ、蜘蛛の胴体に深々と刺さった。

『ぐ!?!?』

蜘蛛は苦痛の声を漏らした。

俺が呆気にと取られている間に、朔夜は手に持っていた刀を手先だけでくるりと持ち直して腕に絡まっていた蜘蛛の糸を切ったようだった。

そうして糸の枷かせから抜け出した朔夜はすかさず刀を蜘蛛に振り下ろす。が、蜘蛛は跳びはねてそれをかわした。

朔夜はそれを追うように間合いを詰める。その身のこなしは本当にしなやかで、まるで獲物を追う獣のようだった。

いや、それだけじゃない。

「散れ」

そう呟いて刀を振り下ろす朔夜の目は、情け容赦ない獣そのものだった。

蜘蛛は真つ二つに割られる。

しかし

「駄目だ朔夜! 核の位置を外してる!」

俺の目が捉えたあのケモノの核は、身体の真ん中にはなく、前足にあったのだ。

蜘蛛は分裂した。分かれた蜘蛛はサイズこそ小さくはなったものの、それぞれ核を持っていて、しかも位置がどちらも違っていた。

(厄介だなおい……！)

俺は知らず唇を噛み締めていた。

2匹の蜘蛛は一斉に朔夜に飛びかかる。

「朔夜！！」

1匹の蜘蛛が脚で朔夜を壁際に押さえ込んだ。

獲物を愛でるように、その脚が彼女の頬を撫でる。

「ちっ……」

朔夜は憎悪の籠った目で蜘蛛を睨んでいる。

「そいつを放せ！！！」

緩みかけていた糸を引きちぎって俺が駆け寄ろうとすると、もう1匹の蜘蛛が目の前に現れて、俺を跳ね飛ばした。

「あっ……！！」

ガードする暇もなかった身体は簡単に投げ飛ばされて、廊下を滑る。頭を打ちつけた痛みより、床を走った身体の摩擦のほうが痛かった。

「朔夜……！！」

脳震盪を起こしかけの霞んだ目で、俺は今にも蜘蛛に捕食されそうなのを見た。

「……その魂、全て引き受けるのは骨が折れそうだが……」

蜘蛛は愉しそうに言った。

しかし

「……？ ……お前、『それ』はどうした」

何かに気付いたかのように蜘蛛はそう言って、それから嗤った。

「くくく……どうやら既に食われたようだな、娘。力が強すぎるのも難儀あわということか。憐あわれな……」

俺には蜘蛛あいつが何のことを言っているのか分からなかった。

けれどその言葉が、彼女にとっては『良くない』ものだということとは、なんとなく理解できた。

「……黙れ」

空気が震撼する。

それは、恨みを孕んだ声だった。

「ぐあ！？」

蜘蛛が突然苦悶の声を上げる。

俺にも何が起こったのかよく分からなかった。

ただ、蜘蛛が燃え上がったのだ。

紅蓮の炎をあげて。

蜘蛛はたまらず朔夜を放して火車になりながら逃げようとする。

が

「……どいつもこいつも奪^とることばかり……！」

朔夜はその蜘蛛を、容赦なく刀で突き刺す。

身動きの取れなくなった蜘蛛は、ただただ燃えて灰になった。

「な……」

それを見たもう1匹の蜘蛛は慄く。

分からないでもない。

朔夜の眼は爛々と、その炎のように燃えていた。

そこにはいつもの華やかさはなく、ただ敵意と憎悪しか宿ってい

なかった。

ゆらりと彼女の身体が揺れたかと思うと、次の瞬間、彼女はもう

1匹の蜘蛛に間合いを詰めていた。

彼女が刀をその蜘蛛に振り下ろすと同時に、蜘蛛は大量の子蜘蛛

に分裂した。

それこそ風に散るように、蜘蛛はわらわらとこちらに逃げてくる。

「……逃がすか」

朔夜はそれこそ幽鬼のようにそう呟いて、赤い刀を振りかざした。

「三炎の二、装炎^{そうえん}！」

彼女がそう叫ぶと、赤い刀が炎を纏った。

瞬間、殺気のような空気の張り詰めを俺は感じた。

(やばい)

頭でそう思っても、身体が動く時間は残っていなかった。

「燃え尽きる！」

怨みの籠った朔夜の声が廊下に響くと、辺り一帯が紅蓮の炎に包まれた。

「っ!？」

俺はあまりの熱気に顔を腕で覆った。

覆わなければ一瞬で火傷しそうな熱量だった。

急な温度差で窓ガラスが割れる音すら聞こえる。

辺りの酸素を奪いながら炎は紅く燃える。

それこそまるで焼却炉の中にいるようだった。

肺は酸素を求めるが叶わず、皮膚も悲鳴を上げていた。

(駄目だ……死ぬ……!)

霞んでいく俺の目が捉えたのは、壁に貼ってあった校訓の貼り紙。全部で3項が記してあるその『二』の文字が、赤く光ったのが見えた。

瞬間、世界は白いもので遮られた。

視界も、熱も、五感が停止したかのような錯覚すら覚えた。

ただ聞こえたのは

「ぼけっとしてると死ぬわよ」

そんな女の声だった。

次に俺が目を開けたときは、世界は変わってしまった。地獄のそれとも思えたくらいだ。

床のタイルは焦げる以上に溶けていて、波打つように変形していた。

窓ガラスは全て割れており、破片は溶けてしまったのが見当たらない。

壁は黒こげで、目も当てられないような惨状だった。

「……………」
俺は真っ直ぐ前を見る。

朔夜は俯いて床にしゃがみこんでいた。

傍らを見ると、あの鼠女が腕組をして不機嫌そうに立っていた。

(……………こいつが助けてくれたのか……………)

俺は感謝の意を込めて軽く会釈をしたが、鼠女は昨日のことをまだ根に持っているのか、つんとそっぽを向いただけだった。

俺はやれやれと朔夜のほうに近づく。

朔夜はどこか抜け殻のようで、全く身動きしなかった。

見ると刀も抜き身のまま投げっぱなしだ。

俺は彼女の前にしゃがみこんで

「おい朔夜、大丈夫か……………」

と声をかけようとしたのだが

ギィ……………」

と、金属の軋む音がして俺はとっさに上を見た。

すると熱のせいで激しくへこんだロッカーが、今にもこちらに倒

れてきそうだった。

(あ……………)

俺はとっさに朔夜の頭を抱え込んで横に倒れこんだ。

次の瞬間派手な音を立ててロッカーは崩れ落ちる。

「……………つぶなかつた……………」

あれを頭にくらつたら打撲だけじゃ済まなかっただろう。

が

「……………英輔」

俺の腕の中で声がする。驚きの籠った、少し困惑気味のか細い声だった。

というか、胸に何か柔らかいものが当たっている。

(うあ!?)

俺はとっさに離れようとしたのだが、時既に遅く。

「このガキヤア！　うちの子に何さらっしょんじゃ！！！！」
無駄に凄みのある鼠女の声が降ってきて、結局何かで頭を殴打された。

そして再び目を開けると、世界は元に戻っていた。

「……………え？」

俺はむくりと身体を起こす。床も壁も元通り、むしろ前より少し綺麗になった感じで、割れていたはずの窓ガラスも元通りぴしゃりと閉まっている。ついでに傍らのロッカーも直っていた。

「あ、起きた？」

そんな声と共に、朔夜が後ろからやってきた。

「どうしたんだ、これ……………」

俺がまだどこか呆けた気分で訊くと

「ワタシが直したのよう。もうヘトヘトよう。英輔くん、ワタシを褒めて〜」

と、いつもの妖艶さはあるのだが言葉通りどこか疲弊した様子のオカマ男もやって来た。

俺は反射的に立ち上がってオカマ男と距離をとりつつ

「直した？　あれをか？」

と尋ねると

「火砕の鱗粉、人間には毒なんだけど、物体に対しては薬になるんだ」

と、朔夜が説明を入れた。

「へ……………」

俺が少しばかり本気で感心していると

「あ！　今ワタシのことすごいって思った？　わーい！　これで一歩前進ね！」

と、何が一歩前進したのかは知らないがオカマ男は無邪気に喜んで

でいた。が

「それにしても派手にやりすぎよ、憐。完全に壊したら流石にワタシでも直せないんだからね」

と、嗜めるように朔夜に言った。

「……分かってるよ。……緋衣にもありがとって、言っというて」

朔夜が叱られた子供そのものようにそう言つと

「向こうでアレと話したらね」

オカマ男はぼん、と朔夜の頭に軽く手を置いてから、刀の中に戻っていった。

夜の廊下に、2人きりになる。

オカマ男が抜けただけで、周りの空気は一変した。

沈黙したまま、朔夜はじっと俺を見つめてくる。

「……なんだよ」

沈黙に耐え切れなくなつて俺はそう口を開いた。

朔夜は少しばかり目を伏せてから、顔を上げてこう言った。

「……英輔、ありがとう。明日からは、付き合ってくれなくていいよ」

「よ」

「……へ？」

俺は、思わず聞き返していた。

「……だから、放課後宿直室に来なくてもいいって言ってるの」

朔夜は含ませるようにそう言つて、くるりと背中を向けて歩き出した。

「もう来なくていいって……だつてまだ残ってるんだろ？ 昨日の奴とか……」

「奴とか……」

俺は慌てて彼女を追いかける。

すると朔夜は歩くスピードを上げた。

「いいの。さつき気付いちゃったから。英輔に核の位置見てもらわなくたって炎で燃やしちゃえば一発だつて」

「な……燃やすつてまたあんな風に燃やす気か？ いくらオカマ男が直せるからつてそれは流石に倫理的にだな……」

俺はどうでもいいことを言いながら食い下がっていた。

「そんなの今更、どうでもいい」

朔夜は正論を述べながらつかつかと離れていく。

俺は急に彼女に突き放されたようで、思わず彼女の手首を掴んでいた。

「待てよ！　ここまで付き合わせといてそっちこそ今更だ！　俺が役立たずだって思ってるならはつきりそう言えば……」

「違う！！」

俺が言い切る前に、彼女がそう叫んだ。

振り返った彼女は、瞳に涙を溜めていた。

(え……)

俺は予想外のことには驚いて、思わず手を離していた。

「緋衣が出てきてくれなかったら英輔今頃死んでたんだよ！？　なんでそんなに普通なの！？」

朔夜は苦々しくそう叫んでいた。

「え……なんでって……」

俺が返答に困っていると、朔夜はまたくるりと背中を向けてこう言った。

「……これ以上英輔には関わってほしくない。……英輔も最初からそう思ってたでしょ？」

俺は答えを返せない。

確かに、こんな厄介ごとには首を突っ込みたくなかった。

俺は普通に生きていくって決めてたんだ。

だから今まで、普通の人には見えないものが見えても、何も言わずにそれらをかわしてきた。

そうやって、地味でもうまく生きてきたんだ。

「……バイバイ、英輔。ごめんね」

朔夜はそう言って、逃げるように階段を降りていった。

第11話：煉獄（後書き）

今回はちよつとハード（？）に路線変更＆変な話と見せかけて意外と王道しちゅえーしょんでした。

以下、三炎による豆知識のコーナーです。どうぞ。

火碎「タツタカカタカタツタツタツ」　今回はワタシ達が宿る刀の構造についてよ〜ん」

英輔「……なんで俺がゲスト……。で？」

火碎「刀の中は異次元が広がっているのよ〜。3人それぞれの部屋が用意されてるの。はい、これ見取り図」

英輔「ふーん。……アンタの部屋、他の2人に比べて狭くないか？」

火碎「……下っ端だからねん（泣）」

英輔「……（ちよつと同情）」

（完）

……突然ですが、ストックが切れました。見事に。すっかり。

火碎＆英輔「はあア!？」

そろそろ佳境ですしまとめてどっさり書きたいと思っているので今後更新が少し不定期になるかもしれません。毎週アップしてすぐに見てくださっている方々には大変申し訳ないです（汗）。できるだけ早めに上げられるように頑張ります。

ここまで読んでくださった方々、ありがとうございました。次回もお付き合いいただければ幸いです（滝汗）。

第12話：決意

俺はぼんやりしたまま、家に戻った。

何も考えないままシャワーを浴びて、そのままベッドに倒れこむ。

(あ……)

そこで違和感を覚えて、ようやく意識が戻ったような感じがした。午前中あいつがずっとこのベッドを占領していたせいか、女物のシャンプールの匂いが枕に残っていたのだ。

それで、停止していた思考回路がまた動き出した。

するとどこか、怒りのような感情までこみ上げてきた。

(……なんだよあいつ、勝手に人を巻き込んでいて、ちよっと何かあったらバイバイかよ……)

しかしあの、涙を溜めた彼女の顔を思い出すと、恨み言も言えなくなってしまうた。

『緋衣が出てきてくれなかったら英輔今頃死んでたんだよ！？ なんでそんなに普通なの！？』

(……確かにな。あいつのせいで本気で死ぬかと思ったのに、なんで俺、怒ってなかったんだろ。『ちよっと何かあったら』ってどこの話じゃないないよな)

そう思い返して、俺は自嘲していた。

……それは、もう俺が『普通』じゃなくなってるってことなんじゃないだろうか。

(……でもなんであいつ、急にあんなにキレたんだ？ あの蜘蛛、何のこと言ってたんだろ……)

無限に思考を巡らせながら、俺は寝返りを打った。

(『既に食われた』って……何を食われたんだ？ あいつ、もしかして他にも何か取られたのか？)

問いが止まらない。問う相手は今ここにいないのに。

もともと俺は他人のことを深く考える性質ではない。

自分は自分で、他人は他人。

だから、あいつのことを必要以上に心配している今の俺は、普通じゃない。

……知りすぎたのかもしれない。

今までだつて1人でこういうことをしてきているはずなのに、無駄に俺に甘えてくるのは、やっぱり寂しいからで。

夜になると口調が変わるのは、強がってるだけなんじゃないかって。

(……てな、こんなことが分かったつて、俺にはどうしようもないんだ)

でも、そんな自分がどこか歯がゆい。

自己矛盾からか、さっきからいらつきにも似た感情が頭をめぐる。

「……ああもう！」

(これがあるからあいつのことを思い出すんだ！)

俺はあいつの匂いがする枕を少し乱暴に床に落とす。

眠るのに集中するために、俺はがばつと布団をかぶった。

……が、ものの数秒で俺は頭を出した。

「っ！」

布団全体に、匂いが染み付いているのだ。

(くっそ、洗濯機回せばよかった！)

俺はなぜか赤面しながらベッドを出た。

今日は床で寝ようと決意する。

座布団と、タオルケットをクローゼットから引きずり出して、俺はようやく慣れた匂いの中で眠りにつこうとしていた。

……ただ、あの匂いに名残惜しさを微塵も感じなかったかと言えば、嘘、になるかもしれない。

翌朝の目覚めは最悪だった。

「……」

床で寝たせいもあるだろうが、主に昨日派手に転んで擦りむいた背中とかが妙に痛くて、瞼も重かった。

時計を見るとまだ5時だ。

しかし二度寝をすると確実に遅刻しそうな気がしたので俺はしぶしぶ起きることにした。

身支度を整えてからは特にすることも見当たらなかったため、俺はまたしても早めの登校をすることとなった。

校舎に入る前、俺は何気なく宿直室のほうを見た。

(……あいつ、もうあそこにはいないのかな……)

昨日の様子からして、もしかするとねぐらを変えているかもしれないという気がした。

「……」

どこか鬱々とした気分のまま、俺は教室の扉を開ける。

まだこんな時間なので、勿論誰もいないだろうと踏んでいたのだが……

「……!」

後ろの、窓際の席。

そこに彼女はいた。

「……て」

朔夜は机に突っ伏していて、身動きひとつとらない。

眠りこけているのだろうか。

というか突っ伏し方が異常だ。腕を使わず、顔面からもろに突っ

伏している。あれでは顔を傷めるのではなからうか。ていうか痛くないのか。

俺は恐る恐る近づきつつ、

「お、おい朔夜……」

声をかけてみるがやはり起きる気配はない。

一昨日の夜と全く同じだった。

(……寝るんだったら宿直室にいればいいのに)

なんていうか、クラスのアイドルがこんな状態で寝てたら皆リアクションに困るはずだ。

「おい、起きろ。そんな寝方してたら鼻折れるぞ」

俺は仕方なく朔夜の肩を叩く。が

「!」

また、彼女の身体は発熱していた。

(ちよ、大丈夫かこいつ……!)

俺が少し狼狽していると、彼女はゆっくりと、ぼうつとしたまま顔を上げた。

「……………」

それからゆっくりと、こちらを向く。

それで

「!」

朔夜は驚いたように目を見開いた。

「えい……………東条、君…………」

彼女の口からそんな、聞きなれない言葉が漏れる。

「おいお前、具合悪いんだったら宿直室に戻るか保健室に行け。あと顔から突っ伏すな。おでこ赤いぞ」

俺が呆れ気味に、かつ呼び方をわざとよそよそしくされたことに不満を抱きつつそう言つと、彼女は慌てて額に手をやって、元から微妙に朱に染まっていた頬をさらに赤くした。

「……………分かった」

彼女はどこか恨めしげに俺を一瞥してから立ち上がる。背中であ

ついてくるな』と語っている割にどこかおぼつかない足取りで扉のほうへと歩いていく彼女を俺は内心はらはらしながら見守っていたのだが

ガン！

「な！？」

最後の最後にふらいついて、あいつは扉に激突した。

「~~~~~」

小さく悶えながら朔夜はその場にしゃがみこむ。

「だーもう！ アホかお前！」

俺は慌てて駆け寄る。

「ったく！ 昨日のあれ、ほんとに相当キツいんじゃないのか！？ 何無理してんだよお前は！！」

そう怒りつつ俺が彼女の肩に触れようとすると、彼女は熱い手でそれを払いのけた。

「！」

俺がひるむと

「……もういいのにつ。自分で何とかできるんだから……！！」

彼女は苦しげにそう言っつて、床についた手を支えに立ち上がるうとする。

けれどその手は、力が入らないのかおぼつかなく震えていた。

それを見て、俺の中で何かが吹っ切れた。

そうになると、次の行動は速かった。

俺は体勢を低くして、

「ひゃあ！？」

下から朔夜を抱え上げた。肩に乗っける感じで。

「ちよ！？ 英輔っ、降ろしてっ」

朔夜はじたばたともがいているが脚を押さえてしまえばそう易々と逃れられまい。

「知らん」

俺は抗議を無視して廊下へと出た。

まだ早い時間なので生徒の影はない。それありがたいといえ
ありがたい。

(にしてもこいつ軽いな……)

俺はそんなことを思いつつ少々足早に歩を進める。先生に見られ
ても厄介だと思つので、出来れば速やかに移動したいのだ。

「ば、馬鹿英輔っ！ 見えるっ！ 見えるって!!」

すると朔夜はそんなことを言い出した。

「？ 見えるって何が」

「す、スカートっ!!」

「スカートって……どうせブルマだろ？」

俺が呆れ気味にそう言うと、

「だからッ！ 穿はいてないんだってば!! 今日!!」

廊下に響き渡るような声で、彼女はそう叫んだ。

「……………な!？」

俺が無意識のうちに首を回転させ……る前に朔夜の腕が俺の頭を

挟んだ。

「だからッ!! 見るなつてのッ!!」

視界が暗くなった途端、俺は頭に肘鉄らしきものを食らわされて
よろけた。

その隙に朔夜は俺の手から逃れて、目の前に降り立った。

「英輔の馬鹿っ！ 変態!! むっつりスケベ!!」

朔夜は顔を真っ赤にして罵倒してくる。

「むっ!？ な、何で今日穿はいてないんだよ馬鹿!!」

俺も顔を火照らせつつささやかに反抗する。

「だって暑かつたんだもん!!」

「……あのな!! 熱あるんだつたら最初から休んでりゃ良かった
んだ!!」

俺がそう言うと、朔夜は戸惑ったように眉をひそめる。

「……お節介……。もういって言ったのに……」
そう呟く彼女の目は、俺を離そうとしていた。
しかしそんなのは、俺にはもうどうでもいい。
だって

「……今更、だ」

「……え？」

「今更そんなこと言われても困るんだよ馬鹿！ このままじゃ胸クソ悪いんだ！ 俺はお前が宿直室あそこを出て行くまで見届けるからな！」

俺はなぜかむきになってそう叫んでいた。

朔夜は目を丸くしている。

「……なんで……」

「なんでも何も無い！ これは俺が決めたんだからお前に命令権はない！！」

俺はぴしゃりと言い切った。

すると朔夜はばつが悪そうに俯いて、こう言った。

「……でも、また昨日みたいなことになったらどうするの？ 私、ああなると自分でも自分が止められなくなるから……もうないって言い切れない」

そう言う彼女の手は微かに震えていた。

彼女は顔を上げて、俺を見る。

「……英輔は怖くないの？ 私のこと」

いつも真っ直ぐな彼女の眼は、このときだけは、何かに縋るような、怯えた眼だった。

ほんとに、分からない奴だ。

化け物相手にはひるみもしないくせに、どうしてこんなことで、そんな顔をするんだらうか、こいつは。

俺は胸の疼きを呑み込んで、

「お前が言ったんだぞ、『私から離れるな、逃げるな』って」
そう答えた。

すると彼女は少しばかり呆けたように沈黙したが、次の瞬間には目を細めて

「……そうだった」

こくりと頷いた。

俺はそれを見て一安心する。

「分かったらとつと寝に行け。先生には俺から言っといてやるから」

そう言うつと朔夜は心底不思議そうな顔をして、

「いい。もう大丈夫だから」

けるりとそう言った。

「は？ 大丈夫って……」

(そんなわけ……)

しかし言われてみると今の今まで熱っぽかった彼女の顔はすっかりさっぱりとしていた。

「……どうなってんだ」

「さあ。英輔が変なことするから熱がどっか飛んでっちゃったのかな」

朔夜は楽しそうにそう言った。

「変なつて……人聞きの悪い……。言つとくけど見てないからな、あのお父さんに変なこと言うんじゃないぞ」

俺は念を押しておいた。

「えー、どうしよっかなー？」

意地悪げに笑う朔夜。

信じられないが、本当にもう大丈夫らしい。

そうこうしていると

「あれ？ おはよー」

後ろから、聞きなれた声でした。

「!?!」

俺が慌てて振り返ると、そこにはクラスメイトの森下がいた。

「さくやんも東条君も、どうしたの？ こんなところで」

無邪気な笑顔で痛いところを突いてくる森下。

ていうか『さくやん』て……朔夜のことだよな。

「おはよう、もりー。そっちこそ早いね」

流石と言っべきか、何事もなかったかのように朔夜は爽やかに挨拶する。

ていうか『もりー』って……森下のことだよな。

「俺学園祭の実行委員だからさ、朝から会議なんだー。2人は？ 昨日休んでたけど大丈夫？」

「あ、ああ。俺、昨日は別に病気とかじゃなくてだな、親戚の小さい子が急に遊びに来てさ、お守りしてたんだよ。ほんと、大変だったよ、昨日は」

と、俺は昨日先生にも使った言い訳を述べておいた。

『親戚の小さい子』というのは嘘になるが、内容はあながち嘘ではないだろう……と内心自画自賛していると

「へーえ、大変だったんだねー。私は熱出して寝込んでただけだねー」

と、とげとげしく朔夜が言った。

「はー、2人とも大変だったんだねー。あ、そろそろ行かないと。じゃあまた後で！」

そう言っつて森下は会議室の方向へと走っていった。

のだが

「……………！」

俺の目はとらえた。

森下の後頭部に、憑いているものを。

「朔夜！ あれ……………！」

俺は思わず指差した。

「な！？」

朔夜も気付いたらしい。

森下の頭に憑いているもの。
それはあの、小さなクラゲだった。

第12話：決意（後書き）

やはり少しばかり遅くなりました12話です（汗）

ほんとは火曜に更新できる予定だったんですがどうも気に入らなくて書き直してたらこんなことに（汗）。しかも書き直して入った追加シーンが例のブルマがうんたらかんたら・・・（笑）。

さて、後の細かい構成もやっと固まったのであとはガンガン書くだけです。出来ればまとめどかっとなんと書いてどかっとなんと出してしまうのでまた更新が不定期になるかもしれないかもしれませんがここまで読んでくださっている方々には出来れば最後までお付き合い願えたらと思います（切に）。今回も読んでくださってありがとうございます！

第13話：ラストデイ

頭にクラゲを付けたまま、森下は階段へと消えていく。

「あのクラゲ……！ 喧嘩売ってんのか！」

そんな言葉を吐き捨てて朔夜は駆け出す。

「ちょ、おい！？」

俺も慌てて追隨した。

「どうする気だよ！？ 森下のこともあるし、お前今丸腰だろ！？」

「最悪燃やす！！」

朔夜はそんな物騒なことを言った。

「なんだとー！？」

そうしているうちに階段を登っていた森下が振り返った。

「え、え、何！？」

こちらの只ならぬ様子を読み取ったのか森下はかなり怯えた様子を見せる。そんなことはお構いなしに朔夜は森下に突撃……する前に彼の頭に付いていたクラゲが離れて逃げ出した。

「待て！！」

朔夜は森下の脇を素通りしてクラゲを追いかけだす。

「森下っ、会議頑張れよ！」

俺は啞然とした様子で朔夜の背中を見送る森下に愛想笑いを浮かべそう告げて、彼女を追う。

クラゲを追う彼女を追うこと約10分。

結局1階から4階まで登ってくるはめになった。

が

「ちっ！ 逃がした！！」

朔夜がそう地団駄を踏んで、その追跡劇は終わりを告げた。

俺はその場にへたり込む。

持久力には自信があったつもりなのだが、全力疾走10分は流石

にきつい。

「あーもう……あれを倒したら視力戻ったのに……」

朔夜はとても悔しげにそうぼやいて、廊下の壁にもたれかかった。

「……ん？ あれを、倒せば、戻るのか？」

俺は疑問に思っただけ息を切らしつつそう尋ねる。

「うん。あれが分裂する前のケモノの中心だった奴だから。英輔もあいつに襲われてたでしょ？」

「……ああ」

忘れもしない月曜の夜。それでこいつが現れたんだ。

「あいつが口を開けて光ると視力取られるから気をつけ……」

そう言いかけて、朔夜は妙に黙り込んだ。

「？ なんだよ」

不審に思っただけ尋ねると、朔夜は神妙な面持ちでこちらを見て

「……英輔、視力取られてないんだよね……？」

そんな、当たり前のことを訊いてきた。

「は？ 取られてたら今頃こんなことしてねえよ」

俺は呆れ気味にそう答えた。

「……だよねえ……」

そう言いつつ、朔夜はまだ何か考えているようだった。

朝のその事件を皮切りに、その日は妙にややこしい日となった。

1 限目は隣クラスと合同の体育だったのだが、マットと跳び箱を倉庫から出す作業中、

「東条君東条君、朝のあれ、何だったの？」

森下がそんなことを訊いてきた。

俺は森下の様子を窺う。クラゲを頭に付けていたわりに、特に何も変わりなく、元気そうだった。

それに少し安心していると、隣にいたヒロがすかさず

「なんだなんだ？ 森下、朝っぱらから何してたんだこいつ」

興味津々の様子でそう突っ込んできた。

(まずい)

俺はそう思ってた森下の口を塞ぎたい気分になったが、生憎両手が塞がっていて叶わなかった。

すると森下は無邪気に答える。

「なんかね、さくやんと追いかけてこみたいな。楽しそうだったな

あ

ぶっ。

俺とヒロは同時に吹き出していた。

恐らく違う意味合いだろうが。

「はははは！？ 追いかけてこ！？ 何やってんだお前ら！ ははは！」

ヒロは派手に笑う。それで周りにいた他の男子達がこちらに注目しだした。

「ば！ 違う！ あれは！」

(クラゲを追ってた朔夜を追ってたんだ！)
しかし

(……いや、結局朔夜を追ってたのか、俺は)
と思いついて、反論し損ねた。

「ちよー、お前らマジで出来てんじゃねえだろうな？ 昨日も同時に休むしよー」

と、ヒロがとても嫌らしい目でにじり寄る。

「ちが！」

そう俺が反論する前に、もう周りからは妙な視線が注がれていた。
(ああもう！)

しかし、トドメはこの後だったのだ。

今日は体育館の半分を男子が、もう半分を女子が使っていて、少し離れたところで女子がバスケのパスの練習をしていた。

「あ、朔夜さんだ」

跳び箱の順番待ちをしていると、他クラスの男子の会話が自然と耳に入ってくる。

「いやー、ジャージも似合うなあ、あの子」

「ジャージもいいがやっぱあの制服の絶対領域がたまらんな」

「うわ、どこ見てたんだよお前！」

「何をー！ お前も見てたくせに！」

ふざけあいつつつ楽しそうに談笑する男子達。

（……絶対領域……ってなんだ？）

俺がぼけつとそんなことを考えていると、足元に何かが当たった。

「？」

見下ろすと、それはバスケットボールだった。恐らく女子のほうから転がってきたんだろう。

振り返ると、少し離れたところで大きく手を振っている奴がいた。

（げ）

1人だけどうやら市販のものらしい赤いジャージを着込んだ女子生徒。

……間違いなく朔夜だった。

あいつは無邪気に手を振りながら大声で叫ぶ。

「英輔ー、ボールとってー」

その瞬間、賑やかだった体育館は妙な静寂に包まれた。

（……あのアホ……）

俺はボールを蹴飛ばしてやりたくなつた。

次の瞬間には波のようにどよめきが走る。

「おい、さっき呼び捨てだったか！？」

「え、嘘！？なんで!？」

「あいつ確か今朝隣ちゃんと言いかけっこしてたっていう……」

「東条のやつ、昨日同時に休んでたけど、もしかして……」

（待て待て待てー！何かやばいぞこれー!?!）

俺はボールを適当に投げ返してささっと隅に寄った。

するとヒロがにやにやと笑いながら

「おうおう英輔、お前いつ憐ちゃんから呼び捨てにされるような仲になったんだ？ え？ 大人しく白状しろ！！」
と飛びついてくる。

「だからちが！ 違うんだってば！！」
……朝からとんだ災難だ。

それ以降、教室で自分の席にいても隣の席にたむろっている女子達の好奇の視線に耐えられなくて、俺は休み時間の度に教室の隅に寄る羽目になった。

が、寄った先では今度は男子から色々冷やかしやら追及を受けたりと、全く心が安らがない。

そろそろ本気で堪えてきた、そんな昼休み

「東条ー、お客さんだぞー」

と、廊下側の男子に呼ばれた。

他クラスに俺を訪ねてくるような奴はいなかったはずだが、と思つて後ろの戸に視線を投げると、そこには。

(……う)

あの佐伯が、2日前俺のファーストキスを奪ったあの男が、妙に切迫した瞳で俺を見つめて立っていた。

で、なぜだか俺は佐伯と向かい合つて、人目のつかない屋上へと続く階段の踊り場に立っている。

「……何」

俺は出来るだけ視線を合わせないように、少しぶっきらぼうに尋ねていた。すると

「東条君……僕のこと覚えてるよね？」

佐伯は2日前と同じようなことを尋ねてきた。

(……そうか。こいつ、あのときは夢だったと思ってるんだ

っけ……)

俺はどうしようかと悩んだ。

『お前なんか知らない』と一蹴してしまえばいいのだが、それも少し躊躇われる。が、あまり関わりたくないのは事実だった。

「……佐伯、だろ」

とりあえず俺はそう答えた。すると佐伯は顔を輝かせた。

「覚えててくれたんだ！ 嬉しいなあ！！」

……そんなに喜ばれても困る。

やはり俺は判断を誤ったのだろうか。

「……あのね、東条君に訊きたいことがあるんだ」

佐伯はそう言って、半歩俺に近づいた。

俺は反射的に半歩引いていた。が、さして佐伯は気にする様子もなく続けた。

「今朝からやけに君と朔夜さんが付き合ってるんじゃないかって噂が流れてるんだけど、どうなのかなって……」

佐伯は小動物のような瞳で俺を見つめてくる。

(いや、だから、男にそんな顔されても嬉しくないって！)

と心の中で叫びつつ、もし佐伯が女の子だったら俺はどうするんだろうとふと思った。

が、

「それは単なる噂だ」

どっちにしる、俺は本当のことしか言えないと思ったから、そう答えていた。

すると佐伯はほっと一息ついて

「そっか、そっか。ならいいんだ」

そう言って佐伯は踵を返そうとした。本当に確認するためだけに俺を呼び出したらしい。

しかし後々のことを考えると、出来ればこいつとはここですっぱりと決着を着けておきたい。

そこで、俺は頭を使うことにした。

「なあ、なんでそんなこと訊くんだ？」

恐らくこういうシチュエーションで最もよく使われるであろう問
いだ。

「えー!？」

予想通り、佐伯はぎくりと足を止めた。

「もしかして、朔夜のことが好きなのか？」

そうそう、ドラマじゃこういう台詞が次に来るんだ。

「え、え……」

佐伯は戸惑っている。

そう、奴がそうして戸惑っている間に、俺は勘違いしたように振舞って、全くそっちには興味がないことを知らしめて、向こうから諦めさせるんだ!

「だよなー、朔夜可愛いもんな。分かるぞ、その気持ち。頑張れよ佐伯、陰ながら応援しとくからな」

俺は出来るだけ爽やかにそう言って、佐伯の脇を通り過ぎようとした。このまま教室まで逃げ帰れば俺の勝ちのはず。

……だったのだが。

「待って!!」

甘かった。

佐伯は俺の腕を掴んで引き止めたのだ。

(んな!?)

男子のわりには華奢で、少々なよつとしているイメージの彼だったが、想像以上に彼の握力は強かった。

「違うんだ! 僕が好きなのは朔夜さんじゃなくて! ……君なんだ!!」

……そして完全に告られてしまった。

(逃げ場がなくなったー!!)

正直パニックだ。こういう時どうやりすごしていいかわからない。

(いや、俺も男だ、ここはズバツと切って捨ててやるのもこいつのため……)

だ、とかなんとか決めかねている間に佐伯は壁際に俺を押し込んだ。

(ちょ!?)

佐伯の顔が近づいてくる。

(まずいまずいまずいまずいって!!!)

しかしなぜかやはり佐伯を振りほどけない。

……そこで俺はふと思いついた。

毎日目に入っていた、職員室のベランダから掛けられている横断幕の文字。

『祝・全国大会出場！ 柔道60級・佐伯亮選手(1年)』

(あー!?! こいつ超強いのか!?!)

もう駄目だ、と俺が目を瞑ったとき。

「うあ!?!」

左腕を強く引つ張られて、俺は体勢を崩した。

が、階段を踏み外して落ちることはなかった。

なぜかというと

「馬鹿英輔、何やってんの」

少々呆れ気味、かつ怒り気味の朔夜が、俺を支えていたからだ。

「え、あ、いや……」

突然この場に彼女が現れたのが意外だったのだが、それよりも何より。

(あの、完璧当たってるんですけど、腕が、胸に……)

「朔夜……さん」

佐伯は驚き半分、不満半分といった感じの顔で朔夜を見た。

「どうして邪魔するんだい?」

ゆっくりとかみ締めるように呟く佐伯はどこか恐ろしかった。

が、朔夜は全くひるまずに

「見て分かんない? 英輔かなり嫌がってるし。この間だって君に

キスされてこいつ泣いてたんだから」と、言った。

「馬鹿！ それは……」

色々な意味で俺が口を挟む前に

「え………あれ、夢じゃなかったんだ……？」

佐伯はそのことに驚いている様子だった。

「分かったらとっとと諦めなよ。英輔も英輔だよ、なんでもっとビシツと言わないの。相変わらず女々しいなあ」

そんなことを言われて俺は少しカチンと来たが、しかし事実なので反論出来なかった。

しかし佐伯は違ったようだ。

「あれが夢じゃないなら僕はもっと諦めない！！ 僕は本気なんだ！！ 君が言う通りなら、僕は彼を泣かせてしまったのかもしれない！ けど彼は僕を背負って交番まで届けてくれたじゃないか！！ 僕はあの背中に惚れ直したんだ！！」

(………え？)

どうやら、彼は何か勘違いしているようだ。

「違う、佐伯。それ、俺じゃない」

あえてそこだけは言っておいた。

「え？」

佐伯は毒気を抜かれたように黙った。

「違う違う。確かに違う。君を背負って交番まで届けたの、火砕だし」

と、朔夜も付け加えた。

「………火砕……？」

「そ、火砕。ま、縁があればまた会えるんじゃない？」

朔夜はそう言っ、俺を引っ張りながら階段を降り始めた。

「ちよ、ちよっと待ってよ！ その、火砕って人にはどこに行ったら会えるんだ!？」

佐伯は早速ターゲットを乗り換えたらしい。俺は内心ほっとして

いた。

しかし

「……来週になったら、もう会えないかも」

その朔夜の言葉で、俺はこの壊れた日常の終わりが近いことを知った。

第13話：ラストデイ（後書き）

あー・・・佐伯君が苦手な人はごめんなさい。と言っている私自身も若干彼が苦手なんです（オイ）とても動かしやすいんです。

さて、本作も残すところあとわずか（？）年内の完結を目指して頑張ろうと思います。・・・12月といえばイラストネットさんの開通（予定）ですよ。小説も趣味ですが絵の鑑賞とかも趣味な私は以前から楽しみにしておりました。管理人さん頑張ってください・・・

・！！！（ここで言うのか）

ここまで読んでくださった方々、ありがとうございました！ 次回もよろしければお付き合ってください。

第14話：ラストナイト

何事もなかったように、つかつかと歩いていく朔夜の背中を俺は見ている。

「それにしても英輔って同性にモテるタイプなのかねー」

「……余計なお世話だ。ていうか何でお前が……」

あの絶妙なタイミングでやって来たのか。
すると彼女は

「え、何、キスしたかったの？」

なんて訊いてくる。

「んなわけあるか!!」

俺は全力で否定した。

……こんな感じにうまくはぐらかされてしまったが、実際のところどうなんだろう。

俺が佐伯に呼び出されたのを見てわざわざ追いかけてきてくれたんだろうか。

(……うん……)

真意が分からないのでお礼も言いつらい。

なので、俺は行動で示すことにした。

夕方、部活を終えた俺はそのまま街に降りて、ハンバーガーを大量に買い込んで宿直室に行った。

「え、これ全部祭り？」

朔夜は目を丸くして目の前のパツピーセットの山を見た。

「ああ。これで多分揃うだろ、全部」

そう言っただけは両手いっぱいのおまけのブーツを朔夜に渡した。

「え、あ、うん……？」

朔夜は不思議そうに首を傾げつつ、それらを受け取った。

2人してハンバーガーを食べ始めると、部屋全体がケチャップとピクルスの匂いに包まれる。

(……身体に悪そうだけどな……)

そう思いつつこれも最後かと思って俺は精一杯ハンバーガーを頬張る。

一方でポテトを黙々とかじっていた朔夜が手を止めて

「ねえ英輔、ケモノがあと何匹残ってるか分かったりしない？ 正直分かんなくなってきたんだよねー。あのクラゲが生きてたってことは、最初に倒した巨人とはまた別物だったわけで、で、おととい逃がした骸骨に昨日の蜘蛛でしょ？ 最初に何分割したか覚えとけばよかつただけけど、視力取られた直後はそんな余裕なかったし」
そんなことを尋ねてきた。

「だからーそれ無理だつて前にも言っただろ？」

俺がそう返すと

「でもさ、昨日英輔ケモノの気配感じ取ってたじゃん」

と朔夜が言った。

(え……あ、そうか……)

しかしそんなことを言われてもどうすればいいか分からない。

「どうすりゃいいんだ？」

「集中してみよ。何か感じるかも。瞑想瞑想」

俺は言われるがままに目を閉じてみた。

するとまた、昨日と同じような耳鳴りが聞こえてきた。

高音と低音の2つの音が絶えず耳を、脳を劈つく。

目を開けると、音は止んだ。

「どっつ？」

朔夜は身を乗り出しつつ期待の籠った目で俺を見る。

「……2匹？ 耳鳴りが2種類聞こえたんだが……」

俺が自信なさ気にそう言つと

「なるほど。ということはあのクラゲとこの間逃がした骸骨だけだ

ね

と朔夜はすっかり信じきっている。

「ちょ、間違つても俺は責任とれないぞ」

俺は慌てて付け足した。

「いや、昨日の蜘蛛の様子からして相手は自力じゃ分裂出来ないよ
うだったし、分裂の性質からして残り2匹っていうのは妥当なところ
だよ。英輔ももうちょっと自信持ったら？」

と朔夜は言った。

(……………どんな自信だよ……………。そもそも俺、気配なんて最初は分から
なかったはずなのに……………)

自分まで何か妙な方向に走ってきたような気がして俺はうなだれ
た。そうしていると

「……………となるとやつぱ今日ぐらいが詰めかな」

朔夜はそう呟いた。

(……………)

するとどこか、場の空気がしんみりしてきた。

まるで卒業間近の教室の空気だ。

彼女はどんな顔をしているのだろうと視線をやると、カチリと視
線がぶつかってしまった。

俺は慌てて目を伏せる。

すると朔夜はくすりと笑った気がした。

そして

「英輔、昨日訊いてたよね？　なんで私がケモノ退治なんかしてる
のかって」

彼女はそう切り出した。

俺は顔を上げる。

「え……………いや、それは……………」

別に答えなくてもいい、と言いたかったのだが、そう言えない空
気の流れというものを感じた。

なんていうか、こういうしんみりした空気は苦手だ。

「……私さ、ケモノに取られたのは視力だけじゃないんだ」

朔夜は苦笑気味に横を向いてそう言った。

それは、昨日のことからなんとなく予想していたことだ。

「……何を取られたんだ？」

俺には想像がつかなかった。

夜は異様な彼女でも、昼間は他の高校生と変わらない生活を送っているからだ。

しかし彼女の口から漏れた言葉、

「命」

……それは、俺の想像を遥かに超えたものだった。

「命……って……」

あまりのその言葉の重さに、俺はただ呆然とした。

「あ、死んでるわけじゃないよ？ ただ寿命がね……今のままだと本来の2分の1なんだ」

寿命が、本来の2分の1。

俺は『2分の1』という数を、ここまで大きく感じたことはなかった。

数値で平均寿命なんて出しても、人間の寿命なんて計り知れない。

結局、人によつて違うんだから。

だから、誰もいつ死ぬかなんて分からないものだ。

だけど、こいつはもつといつ死ぬか分からないんだ。

だって、本来の2分の1しか、残ってないんだから。

「でさ、残念ながらそのケモノが行方をくらしちゃってさ、イーグルに追ってもらってるんだけど、まだ手がかりなしなわけ。もう大分経つんだけどな……」

と朔夜は脚を投げ出した。

「……それを、取り戻すために戦ってるのか」

俺は、震えそうになる声を絞り出した。

「ん。視力まで取られちゃったのはほんと、想定外だったんだけど、でも英輔のおかげでなんとかかなりそうだし。これでも結構感謝してるんだよ？ 英輔には」

そう言う彼女はいつもと変わらない、華やかな笑顔だった。

実直に言つと、俺はその笑顔が好きだった。

けれど今だけは、その笑顔が許せなかった。

「……なんで」

俺は声に出して、そう言っていた。

「なんで、笑ってられるんだよ。お前、ちゃんと分かってるのか？」

この先は、言っちゃいけない、のに。

「何が？」

彼女のその、無神経なくらい暢気な態度を見ると、頭に血が上ってしまった。

「馬鹿！ 寿命が半分しかないって言われたら普通こんなことしてねえよ！ どこに行ったかも分からないような化け物探すよりもっと他にやりたいことがあるだろ！？」

俺は声を張り上げて叫んでいた。

身内以外にここまで怒鳴ったのは、初めてかもしれない。

対する朔夜は、目を丸くして呆然としていた。

俺は身勝手にもひとりでに不機嫌になって、身体の向きを変えた。

「……………」

朔夜は黙っている。

その沈黙で、俺の頭は少しずつだが冷めていって、それから深く後悔しだした。

さっきの自分の言葉は、思っているても声に出して言っちゃいけないかったんだ。

だって、彼女の今までを、否定する言葉だったんだから。

そんな権利、俺にはない。

けれど言わずにはいられなかった。

多分俺なりに、あいつのことを気にかけてたんだと思う。
……でもこれで、完全に嫌われただろう。

「……英輔は優しいね」

けれど、彼女はそう言った。

「……な」

俺は思わず振り返っていた。

意外だったのだ。

俺の、『酷い』と言われても仕方のない言葉の裏側を、読んでくれたことが。

「なんでそうなるんだよ」

それでも俺が刺々しくそう問うと、彼女はその刺を受け止めるように、柔らかな笑みを浮かべる。

「なんでって……私のこと心配してくれたんでしょ？ 人事でそこまで怒る人、珍しいよ」

褒められているのは分かるのだが、なんと言うか、その言い方は癪に障る。

「俺は、別に……」

俺は何が言いたいのだろう。

自分でも分からなくなる。

『俺はもつと冷たい人間だ』とか？

ああ、そうだったはずなんだ。

だから、俺が怒ってるのは、相手が、彼女だから、で。

「……だから、なんでもつと普通の生活を送ろうとか、思わなかったんだよ。普通に学校行つてたら、お前だったらもつと色んなこと出来るだろ？ いや、残り時間が限られてるなら、やりたいことだけやってりゃいいんだ」

俺は頭の中の混乱を振り払おうとしながら、そう彼女にぶつけた。

すると朔夜は

「それは違うよ、英輔」

はつきりと、そう答えた。

「……………違う?」

俺はあまりにも迷いの無い彼女の言葉に少し慄いた。

彼女はこちらに向き直って

「確かに、そんな選択肢もあった。高志も最初、そう言ってたよ。けど……………」

真っ直ぐ、こちらを見据えて言う。

「この先、いつか死ぬときが来たら、私絶対後悔すると思う。『ほんただったら、もう半分生きれたのに』って。だから、その時後悔しないために、今出来ることをしておきたい」

朔夜は揺るぎもせず続ける。

「この手が伸ばせるうちは、私は諦めない」

零時前、校内を歩き回る朔夜の後ろを、つかず離れずの距離を保って俺は歩いていた。

『この手が伸ばせるうちは、私は諦めない』

どうして、彼女はそんなに強いんだろう。

人生、諦めが肝心だって言うじゃないか。

そんな格言なくなたって、俺は色んなものを諦めてきた気がする。将来の夢とか。彼女には偉そうに『昔からサラリーマンになるって決めてるんだ』なんて言ったけど、本当は、昔は違ったんだ。

この十数年、現実を知り、色んなものに挫折して、最終的に辿り着いた俺の持論が

『毎日を平凡に過ごすこと、それこそが幸福だ』。
それが間違いだとは思わない。
だけど。

だけどたまに、彼女みたいにまっすぐ走っている人を見ると、胸が苦しくなるんだ。

窓の外の風の音が奇妙に止んでいた。
そして、前に行く朔夜が足を止めた。
それから俺も異変を感じ取る。

(！)

激しい耳鳴りと共に、それは俺たちの目の前に降りてきた。
「英輔！ 下がれ！」

朔夜はそう叫びつつ刀を抜き、そのままそれに斬りかかる。
彼女の刃を受け止めたのは、今までに見たもののどれとも似つかないものだった。

「このっ！！！」

なんとか朔夜はそれを突き放す。
が、相手は体勢を全く崩さず、滑らかに引き下がる。

「……その形で来ると思ってたよ」

朔夜は目の前の敵に対してそんな言葉を掛けた。

しかし俺は全く予想だにしていなかった。

まさか、ケモノが、人間と全く同じ姿で現れるなんて。

(……しかもよりによって……)

そう、人間の姿をしたそれは、俺のよく知っている人物の姿を模していた。

クラスメイトの森下だ。

「……その動き、元骸骨君だな。あのクラゲから肉の付け方でも教わったか？」

朔夜がそう言うと、森下ケモノ版は不気味に口角を上げ

「左様。あれと我は分かれても繋がっている。貴様らの言語も肉声で喋られるようになったぞ」

そう、言った。

（げ！？ 声も森下そっくりだし！？ あのクラゲ、森下にくつついて何を吸い上げたんだ！？）

「その格好でこっちの同情でも引く気だったんならそれは無駄だぞ」
半分パニックに陥っている俺とは違い、朔夜はあくまで冷静にそう述べて、ケモノに再び斬りかかる。

すると彼の腕から剣のようなものが生えてきて、それで罅迫り合いを始めた。

（み、見てられん）

俺は思わず目を伏せた。

（なんでよりによって森下の格好をしてくるんだ！ しかも妙なもん生やすし！！）

しかし

「つつ」

朔夜の微かな呻き声が聞こえて、俺は慌てて場を直視した。

見ると、彼女は左腕をかばっていた。

（あ……）

彼女の足元にぼたりぼたりと落ちるものが見える。

「その程度か人間。もう少し愉しませてほしいんだが」

森下の形をしたソレは、愉快げにそう言った。

「……お前みたいに好戦的なケモノは初めてだ」

朔夜は苦々しくそう言いつつも、また、それに挑む。

「お前の視力ちからのお陰だよ、小娘。ここに来てから随分と多くの力を吸い取ったが、やはり並みのものではいくら取っても新たな力を得るにまでは至らなかつた……」

ケモノは流暢に、余裕げにそう語りながら朔夜の攻撃をかわす。

（……あしらわれてる……剣技だけじゃ朔夜は叶わない……！！）

素人の目から見ても、それは明らかだった。

ケモノの横薙ぎを避けようとした朔夜の体勢が崩れる。ここぞとばかりにケモノは踏み込み剣を振りかざした。

(あぶな……)

しかし朔夜はそれをも間一髪のところまで身をよじりかわす。が、それで限界だったのか、右手に持っていた妖刀を取り落とした。

「！」

彼女がそれを拾う前に、ケモノはその手を容赦なく踏みつけた。

「う！」

痛々しい声が漏れる。ケモノは嗤う。

「火より強き炎の力。貰うぞ、娘」

もうすでに、それは森下の声には聞こえなかった。

だから

「っこのッ！！」

俺はがむしゃらに走りこんで、そのままケモノに体当たりした。

「っ！？」

予想外だったのか、受身を取れずにケモノは衝撃に任せて後ろへのけぞって背中から床に倒れた。

その隙に朔夜は刀を手の内に戻したようだった。

「大丈夫か！？」

近くで見ると、朔夜の腕の傷はさらに痛々しかった。

ケモノの形に囚われて、動けなくなっていた自分が情けない。けれど朔夜はこくりと頷いて

「……実体化してるのか。なら話は早い」

そう呟くと、こんな状況なのに、どこか不敵に笑った。

第14話：ラストナイト（後書き）

実は！！ 世が3連休の間に最終話まで書き終わりました！！！！
もうちょっと推敲するので今日はこれだけです。今週中には全部出
しているかもしれませんが（年内って言うたのに・笑）。

それではつらつらあとがきを書くのは最終話まで置いておいて（笑）
、ここまでめげないで読んでくださっている方々、ありがとうございます
います！ EP入れてあと4話、最後までお付き合いいただければ
幸いです。

第15話：真名縛り

体勢を立て直すためか、ケモノは一旦後ろへ逃げようとする。すると朔夜は

「英輔、私の後ろから絶対離れるなよ！」

それだけ言つて、左手の刀で引つ掻くように廊下の窓ガラスを割りながら走り出した。

「は!？」

意味不明な行動を取る彼女に、俺は言われたとおり付いていくしかなかった。

数枚割つたところで、今度は右手の赤い刀で宙に文字を引く。示すのは二と三。

「三炎の二、三、来い!!」

その言葉に呼応して、まず銀糸の女が現れた。

「緋衣、困え!!」

朔夜がそう言つと、鼠女は『オーケー』と口の動きだけで応え、骨に還りな」

彼女がそう呟いた途端、周りは紅い炎に包まれた。

(うわ!?)

俺は反射的に腕で顔を覆つたが、朔夜のすぐ後ろにいるせいか、火傷はもちろん、全く熱さを感じない。

一方で周りはこの世の終わりのように燃えている。

前方のケモノもしくり、既に人語ならぬ叫びを上げて、その身は黒く焦げていく。

そして、鼠女の言つたとおり、人間もりしたの皮が剥がれたように、元の骸骨に戻つていった。

が、まだ動けたのか、骸骨は逃げるように窓際に跳んだ。奴にとつての最短の逃げ道は、朔夜が先ほど開けた窓の穴しかなかったのだ。

しかし朔夜はそれを見越していたのか

「火砕！！」

そう彼女が呼ぶと、どこからともなく赤と金の羽根を持つ蛾が現れて、羽ばたいた。赤く光る鱗粉が窓ガラスに吸い付くように付着する。

すると、割れていた窓ガラスが急速に自動修復され始め、

「悪いわね、標本にしちゃって」

オカマ男のそんな声があったときには、骸骨は修復途中のガラスに挟まれて、身動きが取れない形になっていた。

「英輔！ 核の位置！！」

朔夜が急に俺に振るので俺は慌てて骸骨を凝視する。

「こ、腰だ」

俺が位置を告げると朔夜は躊躇なく、骸骨の腰を刀で突き刺した。窓ガラスが再び割れる虚しい音と共に、骸骨の姿は消え、床に青い液体だけが残った。

「ふう。よし、あと一匹だ」

と朔夜は額の汗を拭おうと腕を上げた。すると

「その前に止血ぐらいしなさい」

オカマ男が、妙に紳士的に、彼女の腕を押さえてポケットから取り出した白い布で介抱し始めた。

なんていうか、少し意外なのだが、その手つきはとても手慣れている、ものの数秒でそれは綺麗に完了した。

「……………ありがとう、火砕」

朔夜も少し戸惑っているようだった。
すると

「むきー！ 私だって止血くらい出来るもん！！」

拗ねたのか妬んだのかいつものように鼠女が朔夜にしがみついて、オカマ男に反抗する。

「えーほんとー？ アナタ、すごい不器用に見えるんだけどー？」

オカマ男はいつになく余裕ぶっている。

「んなー!? 失礼ね! 私の趣味はこれでも裁縫なのよ!!」
鼠女がまたしても意外なことを言う。

「趣味とそれとはまた別物よねー、ね、英輔くん」

とか言つてオカマ男は俺に振ってくるし。

「あ、いや、緋衣の裁縫すごいよ、ほんと。私何枚か貰つたし」と、微妙に朔夜は鼠女の援護に回った。

「そーよそーよ、いつぺん見てみるがいいわ!! 男にやる気はないけどね!!」

「ふん! 頼まれたつて貰わないわよアナタが作ったものなんて! どーせ表は綺麗でも裏側は糸がピンピン飛び出てるかくつちゃぐちやに絡まつてんでしょー?」

「はあー!? 何よその見たことあるような言い草!? そりゃあアンタの頭の中でしようが、え!?!」

相変わらずガキくさい言い争いが始まった。

そんなやり取りを朔夜は苦笑しつつ眺めている。

そういえば、2人も同時に使役して疲れないんだろうか。

……それにしても。

(俺つてほんと、役立たずだな)

他の2人を見て切に思った。

そりゃあ、向こうは人間外生物だし、力量も違うけど。

なんていうか、やっぱり虚しい。

「ほら、もう行くよ」

朔夜はまだ言い争っている2人をなだめつつまた歩き始める。

暗闇に溶けない、白い背中。

あんなに華奢なのに、彼女は決して折れない。

その点俺はどうか。

心のうちじゃ自我を張っているつもりでも、実際はいつも周りに

合わせてる。

……こんな弱い自分は、彼女の目にすら相応しくない。

しかし朔夜は

「英輔、早く来いよ」

振り返って俺を呼ぶ。

「……あ、ああ……」

俺はどこか後ろめたい気分のまま、足を動かさそうとした。
その時。

『トウジヨウ、エイスケ』

何者かが、俺の名前を呼んだ。

それは肉声ではない。頭の中にだけ響く声。

(……!?)

途端、俺の身体は石のように動かなくなった。

(なん、だ……!?)

かろうじて思考と視界は、保っていられた。

が、首も手足も、関節という関節が全て固まったように動かない。

「英輔？」

朔夜は不審に思ったのか、こちらに近づいてくる。

(馬鹿！ こっちに来るな!!)

俺は必死に目で訴えた。

すると、俺の背後から、大量の水が波打つようにばら撒かれた。

「……」

朔夜は慌てて飛びずさる。

が、それ以上に過敏に反応したのは後続の2人だった。

特に鼠女のほうは明らかに顔色を青くした。

……そういえば聞いたことがある。

火鼠というのは、水をかぶると死んでしまう、と。

「緋衣、火砕、戻れ！！」

朔夜は慌てて2人を刀に戻した。彼女の連れている妖は全て『火』にまつわる者達だ。普通に考えて、弱点は『水』なのだろう。

朔夜は舌打ちして、

「水を纏ってくるとは考えたじゃないか、クラゲ」

俺の背後にいるそれに恨み言を言った。

『いつまでも無知ではられないのでな』

そんな声がしたかと思うと、また、大量の水が巻き起こった。

朔夜は必死の形相でそれをかわす。

『水は苦手か？』

それに表情があるならば、愉快げに嗤っていたのだろう。そう言つて、巨大な円盤のようなクラゲは俺の前に立ちふさがった。

「……うるさい」

朔夜は怒りを一片も隠さずに攻撃可能範囲へと馳せる。が、クラゲは図体の割りに素早く身を翻して、宙を泳ぐように移動した。

『何故炎を使わない？』

クラゲは言う。

『そのままの器では力が制御出来ないからか？ それともそこにいる小僧を焼き殺したくないからか？』

朔夜は齒噛みして

「うるさい！！」

左手に持っていた刀を投擲した。

が、クラゲの体を素通りして、天井に刺さっただけだった。

流星にそれは無茶な攻撃だった。

そんな無茶をするくらい、彼女は焦っているのだ。

……なんてことだろう。

もう俺は役立たずどころの話じゃない。

完全に、彼女の足手まといになっているのだ。

『遊びもここまでにしようか、小娘。どちらにせよその小僧が動

けない限りお前に勝機はないだろう?」

クラゲはそう嗤うように言って、一呼吸置く。

その一呼吸に、俺は絶望を感じた。

奴に名前を呼ばれると、身体が動かなくなるらしい。

恐らく奴が今朝山下に憑いていたのは、その情報を読み取るためだったんだ。

だから、奴は当然のように、彼女の名前を呼ぶ。

『サクヤ、レン』

目の前が真っ暗になったかのような錯覚を覚えた。

これで、終わってしまったのかと。

しかし。

「……真名縛りか。面白い技を使うケモノがいたもんだ」

朔夜はその身に何も起こらなかったように、そう呟いた。

『なんだと!?!』

これにはクラゲも驚いているようだった。

(そうか、あいつ確か……)

彼女は不敵に笑ってこう言った。

「残念だったな。私の本当の名前は『朔夜』でも『憐』でもない」

(………え?)

彼女は朔夜家に入った養子だ。元の姓が違うのは当たり前だ。

けれど、さっきの言い方だと、名前まで変えているように取れるのだが。

『……小賢しい真似を……! ならば……!』

(!)

身体全体に悪寒を感じる。

空気が張り詰める。

ケモノの標的が、まさしく俺に移ったのだ。

『その小僧を使い物に出来なくしてやるわ!』

クラゲはそう豪語して、こちらに真っ直ぐ飛び掛ってきた。

「な！」

朔夜の油断の音がする。

俺は、今度こそ終わりだと思った。

逃げたくても身体は全く動かない。

ただ、開かれたままのこの目だけが、最後の場面を焼き付ける。

クラゲは自ら大きく裂けて、巨大な口を開ける。

凶暴そうなその牙を剥き出しにし、そしてその口腔の奥から、強烈なストロボが発せられた。

途端、目の前は影に覆われる。

それは、視力を無くした先の暗黒ではなく。

「アアアッ」

すぐ傍で悲鳴が聞こえる。

朔夜が、俺の前に立っていた。

光は止まない。

秒ごとに彼女の力が剥がされていくのが分かる。

「やめ……」

石のように固まっていた口が、動いた。

やめてくれ

やめてくれ！

それ以上取ったら

彼女の視力がなくなってしまう

彼女の道が閉ざされる

俺のせいで

俺のせいで

俺のせいで！！

「っ焔ッ！！」
ヒヤッ

朔夜は悲鳴を押し殺してそう叫んだ。

すると彼女の手にあった刀から、弾丸のように紅いものが飛び出した。

高速、どころではない。

神速というものがあるのなら、それは確かにそれだった。

見えない速さで、それはクラゲをぶち抜いた。

途端、光は止んだ。

しかし

「く！」

真っ暗になった廊下に、どこかあどけなさを残す少年の怒りの声が響いた。

クラゲの姿は消えていた。

しかし例の液体が残っていないことから、取り逃がしたのは明らかだった。

「憐！」

見知らぬ少年が朔夜に駆け寄る。

白い装束に身を固め、被っている帽子から立派な鹿の角を覗かせるその少年は、ひと目でこの間朔夜が言っていた三炎の最後の1人だと分かった。

「憐、目は……」

その場にしゃがみこんでいた朔夜は少年の手を取りつつ

「大、丈夫……、まだ、なんとか、見えてる」

か細くそう言った。

声だけじゃない。彼女の気配、というか『気』そのものがとても衰弱ちよからしてしまっていた。

視力を奪われる、ということが、あそこまで残酷で、痛切なものだとは、馬鹿な俺は思っていなかったのだ。

なのに

「……英輔は？ 無事？」

彼女はこんな俺に気をかける。

俺は無様に転んだままで、何も言えずにいた。
縛りは解けていた。

が、この現状に打ちのめされて、動けないのだ。
その状況を汲んでか

「彼なら大丈夫そうだ」

鹿の少年は優しい声で朔夜に言った。

「そう。なら大丈夫、まだ勝機はあるね……追いかけないと」

朔夜はそう言ってふらりと立ち上がる。

「待て憐、今日は休め。三炎を1日で全て呼び出した後なんだぞ」

そう、言い聞かせるように少年は言う。

しかし朔夜は首を振った。

「あのケモノ、かなり凶暴化してる。明日部活で学校に人が来る前にケリをつけたほうがいい。……それに、焰を出した今でも私、まだ余裕あるんだ……」

「な、そんなわけ……」

と少年は言いかけて、やめた。

「……憐、手を貸して」

言われるままに朔夜は少年に右手を差し出す。

すると少年はその手を取りながら、目を瞑った。

しばらくして

「……馬鹿な」

少年は目を見開いて、そう漏らした。

「どうしたの？」

朔夜は首をかしげる。

「憐、君の欠けた器が、少しだけ修復されてるんだ。本当に微量だけど」

それを聞いて、朔夜も驚きの表情を見せる。

「……え、でも、なんで……」

「ここ最近で、炎の属性を持つ者と契約でもしたのか？」

少年は問うが

「そんなわけないよ。だって他の炎の属性を持つ家系は今所在不明でしょ？」

朔夜はそう言った。

「……確かに。じゃあ最近特に変わったことをしなかったか？ 普段はしないこととか……」

少年はなぜか少し言いにくそうにそんなことを尋ねていた。

「？ 普段はしないことって？」

朔夜にそう尋ねられると、少年は困ったような顔をして、それから彼女にしゃがむようジェスチャーし、耳元で何か呟いた。

それを聞いた朔夜は、少々顔を赤らめたかと思うと、俺のほうを指差して

「したよ。英輔と、キス」

そう言った。

すると鹿の少年はこちらに向き直って

「失礼」

そう断って、俺の額に手を触れた。

すると

「……これは……」

少年はまた、何かに驚嘆したようだ。

「何、どうしたの？」

朔夜が少年の顔と俺の顔を交互に見る。

「……彼は炎の属性を持ち合わせている」

少年はそう言った。

「え……？ そんなはずないよ、だって英輔は水泳部だもん。炎の属性を持つ人間は相克する水には馴染まないはずでしょ？」

朔夜がそう言う

「ああ。だから、彼の場合もって特殊なんだ」

少年は俺に向き直って、こう言った。

「君は透過性属性なんだ」

第16話：伸ばす、腕

廊下は、さつきまでとは違って、怖いほどに静かだった。傍らの朔夜は楽しそうに喋る。

「でも驚いたよ。まさか英輔がそんな貴重な人間だったなんて」
俺は答えない。けれど彼女は続ける。

「属性っていうのは前もちょっと話したでしょ？ 基本は全部で5種類あって、一般に五行って言われてるやつ。その上にまた5つあるんだけど、炎を含めてそれらはもうほとんどが退廃してるんだ。その他はイレギュラー。無属性っていうのは有名だけど、透過性っていうのは初めて聞いたよ。不思議だったんだよねー。この学校で霊視力を持つてる生徒、私は英輔しか知らないのに、ずっとここにいたケモノが並より強力なはずの英輔の視力を取らなかつたこと。英輔は並みの人間に溶け込んでたつてことだったんだ」

朔夜はどこか嬉しそうに話をしているが、俺にはとても喜べた話じゃない。

だって、皮肉じゃないか。

その能力は、周りに溶け込むしか能がない俺に、ぴったり過ぎるほどよくお似合いだ。

透過して一体何の役に立つのか。

そりゃあ、今まで霊視力があつたわりには厄介ごとに自分が巻き込まれることはなかった。

お陰で俺は見えるものから逃げる事が出来た。

そう、『逃げ』だ。

結局俺は、逃げることしか出来ない、駄目な奴なんだ。

俺はただ、相槌も打たずに黙々と歩くだけだった。
すると

「……英輔」

彼女は立ち止まって、俺の上着の裾を後ろから引っ張った。流石にそれでは立ち止まるしかなかったので

「……何だ？」

そう返すと

「……手、繋いで。暗くて足元おぼつかないんだ」

彼女はそう申し出た。

手を繋ぐ。

朔夜の手は熱かった。

さつきはあの鹿の少年に『大丈夫だ』と言っていたが、やはり少しの無理はあるのだろう。

そう、それは全て、俺のせいだ。

俺をかばったせいで、朔夜はまた視力を取られた。

今の視力じゃケモノの輪郭すらとらえるのは難しい、とあの少年は言っていた。

もし、あのまま、彼女の視力が全部取られていたら、俺は………

俯くと、ぱたりと、上着に水が滴り落ちた。

「……英輔？」

悔しいんだ。

思っていることが、うまく出来ない自分が。

本当は、守ってやりたい。

彼女に無理させたくない。

彼女が傷つくのは見たくない。

けど、俺はこんなに非力だ。

こんなに。

こんなに近くにいるのに、どうして手が届かないんだ。

「……泣いてるの？」
彼女の手が、確かめるように俺の頬を撫でた。
「……ごめん……ごめんな……」
俺はただ、謝り続けていた。
それは、彼女だけに向けられた謝罪ではなかったのかもしれない。
俺は、あの日を思い出していた。

春から夏へ、季節が移るおうとしていたその日。
友達の家から帰ってきた俺は、家の近所がやけに騒がしいことに
気がついていった。

見ると、向かい側の道路にパトカーと救急車が数台走っていった。
嫌な、予感がした。

家に帰ると、居間のほうから先に帰ったらしい姉と母が話をする
のが聞こえた。

「ねえ、外にいっぱいパトカー来てたけど、何かあったの？」

「ああ……あのね、ほら、あの池で女の子が溺れたらしいのよ」

「え……で、その子は？」

「その子は奇跡的に助かったらしいんだけどね、助けに入ったご両親が、亡くなっちゃって……」

「えー、可哀想……その女の子ってどこの子？」

「香奈枝は知らないんじゃないかなあ。ほら、この間越してきたばかりの……」

……その会話を聞いて、俺は『ただいま』も言わずに2階の自分の部屋に駆け上がった。

（あの池で……溺れた？）

俺はその事実が怖かった。

あの池からは嫌な気配がしていた。

そのことを姉に言っても全く信じてくれなかった。

母に言っても、父に言っても困った顔をされるだけだった。

……だから、知っているのは自分だけだったんだ。

『あの池には近づいちゃいけないよ』って、この近くで言ってるのは、自分だけだったんだ。

なのに、その子には伝えられなかった。

しばらくずっと、後悔していた。

後悔して、泣いていた。

けど、ある日、俺は思い至った。

『伝えられなかったんなら、助けに行ければよかったんだ』って、それが難しいことだっていうのは、幼いながらも分かっていたつもりだ。

だけどあの頃は、『いつか、出来る』と信じていた。
信じてたんだ。

手を伸ばせば、届くんだった。

色んなものがこみ上げて、なかなか嗚咽が止まらない俺の背中を、
朔夜はただ優しく撫でてくれていた。

そして

「……英輔のせいじゃない。私が、悪いんだから」

なぜか、彼女はそう言った。

完全に収まるのに、それからどれくらい時間を要しただろうか。

俺は朔夜に完璧に恥を晒したことに気恥ずかしさを覚えつつ、けれどどこかすつきりとした気分だった。

「……なあ。まだ、届くかな」

俺は彼女にそう尋ねていた。
すると

「……届くよ。諦めるのなんて、ホントの最期、それこそ身体が動かなくなる間際で、いいんだから」

朔夜はあの笑顔で、そう言った。

実に、彼女らしい言葉だ。

「そうか。そうだな」

俺はただ、頷いた。

次にそいつが現れたのは、2階だった。

朔夜の力の大半を奪って、奴の気配はさらに強大になっていた。

俺たちが駆けつけても、敵は余裕を見せている。

「……懲りもせず来たか。大人しく尻尾を巻いて逃げたらどうだ、人間。そんな目では十分に太刀を振るうことも出来まい？」

最もな意見だ。

朔夜は敵の姿を十分にとらえられていない。

「お喋りなクラゲだな。いい加減、反吐が出る」

そう彼女は悪態づいたので、声はなんとか聞こえているようだった。

「強がりを……」

クラゲはそう嗤うように言って、糸のような触手を伸ばす。

朔夜はその気配を読み取って、すかさず

「食らえ!!」

1枚の札を投げつけた。

属性護符、『土』の札だ。

札はクラゲの足に貼りついた。

途端、クラゲは動きを止める。

「止まった!」

俺は歓喜の声を上げる。が。

『……矮小な』

クラゲはそう呟くと、激しく身体を振り回した。言い知れぬ風圧に俺と朔夜は易々と飛ばされる。

「あつ……！」

背中を壁に打ち付ける。見ると朔夜も床に手を付いていた。

『そんな札1枚ではもはや我を止めることなど出来ぬ。貴様らの浅知恵には愛想も尽きるわ』

勝ち誇ったようにクラゲは佇む。

札は1枚しかない。

これ以上、奴の動きを止められる手段はなかった。

『喜べ人間。貴様らの力、その血肉ごと全て貰い受けてやる』

クラゲの足が空間中に広がる。

逃げ場はもう残されていない。

身体が、糸のような足に絡め取られる。

朔夜も同じ状況だった。

このまま、あのグロテスクな口に吞まれて、死ぬのか。

2人一緒に？

俺は彼女に、何も出来ないまま？

「……馬鹿、言え！」

俺は腕を振り上げる。

これでも8年水泳で鍛えた腕だ。こんなに細いクラゲの足など、振りほどけないことはない。

『！？』

クラゲは驚いたようだった。

俺が諦めかけているとでも思ったんだろう。

だが

「まだだ……！」

俺はそれこそ泳ぐようにクラゲの足を掻き分け、朔夜が付けた護

符に触れる。

「ゴールタツチだ。」

刹那、手に稲妻が走るような感覚を覚えた。

身体の奥から湧き上がる、生命力のような新鮮な力。

心臓が鼓動するたびに、その力は上へ上へと流れ、腕を通じ、手のひらを介し、クラゲへとなだれ込む。

クラゲは天井を貫きそんな苦悶の叫びを上げる。

動きは止まった。

「朔夜！！」

呼ぶと、彼女が傍らにやって来た。

刀を持つ手が震えている。限界が近いのだろう。

それでも、彼女の目はしっかりと前を向いている。

俺はその小さな手を、上から握って、導く。

「ここだ」

青色の丸い核。

その1点を、炎のように紅く光る刀が貫いた。

途端、クラゲの身体は爆発する。

「うわっ！？」

不意打ちの風圧で、俺はまた飛ばされてしまった。

ケモノの身体は跡形もなく崩壊し、その中から、巨大な白光が浮き上がった。

見ると、朔夜の身体に光が降り注いでいた。

視力が、戻ったのだろう。

俺はそれを確認して、ほっと一息つく。
が。

（！？）

上方に嫌な気配を感じて俺は顔を上げた。すると
「な」

天井に、小さな鬼がへばりついていた。

痩せた蒼の身体、こけた顔、そして涎を垂らす醜悪な口を持つそれは、唾うように目を細め、朔夜のほうを舐めるように見ている。

「朔夜っ」

俺は慌てて彼女の名を呼んだ。

が、既に遅かった。

「!?!」

鬼が天井から離れたかと思うと、それは水を纏いながら流星のような速さで飛び、彼女に直撃した。

そして、その勢いのあまり、

「あっ」

彼女の身体は、窓ガラスを破って、外に飛び出した。

「さ」

息が出来なかった。

俺はとっさに窓の外を見る。

真下はちょうどプールで、水柱が上がったのが見えた。

普通なら喜ぶべきところだ。

地面への墜落死は免れたのだから。

しかし

(あいつ、泳げないんだ……!!)

事態は全く良くなかった。

今から階段を使って降りていては、絶対に間に合わない。迷う暇などなかった。

8年前は出来なかったこと。

今度は絶対に、しなくちゃいけない。

今、俺が、出来ること。

それは

……

「朔夜!!」

俺は窓に足を掛け、夜の闇へと飛び込んだ。

水底

少し早い、蝉の音がする道を、私は一人で歩いていた。泣き声が聞こえる。

男の子の声だった。

その声を追って歩いていくと、私はその子に出逢った。

その子はしばらく泣きじゃくっていたけれど、私に気付くと、泣くのを止めた。

「なんで泣いてるの？」

私がそう尋ねると

「尚君が俺のキックボード取ってった」

彼はそう言っつて、またべそをかき始めた。

「男の子は泣いちゃいけないだつて、お父さんが言つてたよ」

私がそう言つと

「……なんで？」

彼がそう訊き返すので、私は困ってしまった。

だから

「知らない」

そう言つてやると、相手はふてくされたように泣くのを止めた。

「ねえ、一緒に遊ぼうよ」

私が彼に手を差し伸べると

「……なんで？」

彼はまたそう言つた。

私は少々むかついて

「つべこべ言うな！」

ちよつと乱暴にそう言つて、彼を強引に引つ張つた。

こんなところをお父さんに見られたら、『はしたない』と、怒られてしまうだろう。

少年の方はというつと、迷惑そうにしていたけど、私の手を振りほ

どこうとはしなかった。

結果、私たちは日が暮れるまで遊んでいた。

「そろそろ帰らなきゃ」

門限を決められていた私は、名残惜しくも立ち上がった。

すると彼は

「なあ……お前、名前なんて言うんだっけ？」

今更ながらに尋ねてきた。

遊ぶのに夢中で、教えるのを忘れていたのだ。

「可憐」

私が名前を教えると、彼は

「いいか、可憐。向こうにある池にはきつと良くないものが棲んでるんだ。絶対に、近づいちゃ駄目だぞ」

そう、真剣に言った。

私はこくりと頷いた。

「わかったよ、英輔」

その忠告を、守らなかったわけじゃない。

ただ、呼ばれた声に立ち止まってしまっただけ。

どうしてあるとき私は、足を止めてしまったのだろう。

息も出来ない水の中。

そこで私は、お父さんとお母さんの、最後の言い付けを聞いた。

『可憐。お前は、生きなさい』

水に落ちたのが分かった。

痛みなど忘れるほどに、その間に、恐れを感じた。

身体は沈んでいく。

浮力が湧かない。

見ると、手足に蛇のようなものが絡まっていた。

あの時もそうだった。

身体に何かが絡まって、全く動けなかった。

息が出来ない。

肺は酸素を求め、内側から壊れそうな痛みを感じる。

怖い。

水の中は嫌。

死ぬのは嫌。

だって、『生きなさい』と、言われたのに。

『生きる』と、決めたのに。

私は腕を伸ばしていた。

『まだ、届くかな』

そう尋ねた少年を、私は、信じた。

第17話：夜明け

重力に任せて、俺は足から水を突き破った。高さが高さだったので、飛び込むときの痛みは勿論、底に激突することも覚悟していた。

自然と目も瞑っていたようだ。

しかし意外なことに、俺の身体はスムーズに水に馴染んでいた。恐らく、水に入った時点で、俺の属性が水に透過されたのだろう。目を開く。

水の中は真つ暗で、昼間とは勝手が違う。

それでも必死に朔夜の姿を探すと、前方に、彼女の身体が沈んでいるのが見えた。

俺は水面で大きく息を吸ってから、再び潜水した。衣服を纏っているせいか、とても泳ぎづらかった。

なんとか朔夜の元に辿り着く。

彼女の身体には、ヘビのようにあの鬼が巻きついていて、あれのせいで、浮かび上がることが出来ないらしい。

彼女は気を失いかけているように見えた。

それでも、彼女の腕はこちらに向かって伸びていた。

俺はその手を取ろうと腕を伸ばす。

すると、鬼が威嚇するようにこちらに牙を剥く。

『邪魔をするな』と言いたいらしい。

……馬鹿な奴だ。

お前ごときに、渡せるわけないだろう。

『失せる』

俺は心からの憎悪を眼にそのまま投影して、鬼を睨んだ。

すると鬼は慌てて彼女の身体を放し、逃げていった。
俺はすかさず彼女の腕を掴み、身体を抱えて、水面に上がる。

俺はすぐにプールサイドに彼女を引きずり上げた。

「朔夜っ！！ 朔夜！！」

俺が彼女の名前を呼ぶと、気がついたのか、彼女は激しく咳き込んだ。
んだ。

どうやら息は止まっていならしい。

俺の胸にしがみついた手は、痛いほどに強く握り締められていた。

「……………すけっ……………英輔っ」

嗚咽交じりに彼女は何度も俺の名前を呼ぶ。

濡れているので分かりにくいだが、どうやら彼女は泣いているらしい。

そんなに、水が怖かったのだろうか。

すると、彼女はしゃくり上げながら言う。

「……………っく、し、死ぬかと思った、の……………っ」

それを聞いて、俺ははっとさせられた。

つくづく自分の馬鹿さには愛想が尽きる。

……………そんなの、当たり前のことだったのに。

どんなに彼女が強くて、死ぬのが怖くないわけないんだ。

彼女は絶えず震えている。

それを見て、胸が苦しくなった。

「まだっ死にたく、なかった……………からっ、こわか」

俺は彼女の言葉を最後まで聞き終える前に、彼女を抱きしめていた。
た。

「大丈夫だ。お前はまだ生きてる」

俺がそう言うと、耳元で、また新たな彼女の嗚咽が続いた。

身体全体に、彼女の温度を感じる。

向こうにも、俺の温度が伝わればいいんだが。そう思っって、一層腕に力を込めた。

8年前、届かなかった少女。

今度は、届いた。

空が、白けてきた。

朝の、穏やかな空気が流れ込む。

俺と朔夜は、大荷物と共に、校庭に佇んでいた。

「英輔もシャワー浴びればよかったのに。風邪ひくよ?」

そう言う彼女は濡れた服を着替えてさっぱりとしている。

「んなこと言われてもなあ、着替え持ってきてないし」

俺がそう言うと

「だから最初に準備しとけって言ったのにー」

彼女は呆れ顔でそう言った。

……そうか。あれからまだ、5日しか経ってないのか。それなのにどうしてこんなに、今が眩しいんだろう。

彼女は鷹の方へ戻る。

ここに迎えが来るらしい。

俺はそれを見送るんだ。

「お世話になりました。英輔のご飯、美味しかったよ」

朔夜は民宿から出て行くときのよような台詞を言う。

俺はついつい笑いながら、

「そりゃどうも。あれくらいならいつでも作ってやるよ」
そう答えた。

すると朔夜は満足げに笑って頷いた。

そうしていると、遠くから、へりの音が聞こえてきた。

「……ん？ こんな時間に？」

へりがこの辺りを飛ぶこと自体珍しい。

俺が不審に思っていると、その音はどんどんこちらに近づいてきていた。けたたましい音だ。

「あ、迎えが来た来た」

朔夜は声を張り上げつつそう言って空を見上げた。

「は」

俺も間拔けな声を出して空を見上げると、黒いへりがこの学校の校庭に着陸しようとしていた。

「な！？ 迎えって……車じゃなくてへりなのか！？」

俺は改めて彼女の家ののでたらめさに驚いた。

風と砂埃を巻き起こして、へりは無事着陸した。

そしてプロペラの回転が終わりきる前に、扉から黒いスーツの男性が出てきた。

「れーん！ー！！」

両手を広げてこちらに走ってくるその男性。

中年のようだったが体系はすらりとしていて、顔立ちもなかなかダンディだ。

声とその雰囲気、彼が朔夜高志なのだ俺は理解した。

案の定、彼は朔夜をすぐさま抱きしめて

「あれから連絡よこさないから心配してたんだぞ、憐！ 毎日1度は連絡するよう言っただろう？ こっちからかけても繋がらないし！」

そう言って彼女の頭をくしゃくしゃと撫で始めた。

「もー！ 高志ってば時間無視するんだもん！ 途中から電源切っ

てやったんだもんね!!」

朔夜が迷惑そうにそう言つと

「な!?!」

彼は相当にショックを受けているようだった。

(……まあ、アドレス消されるよりマシじゃないかなあ)

俺は秘かにそう思った。

すると彼は俺に目を合わせて

「やあ、実際に会うのは初めてだね、東条英輔君。ケモノ抹消に協力してくれてありがとう。また後日正式にお礼状を送らせてもらうからね」

やけに紳士的にそう言った。

いや、もともとは紳士なのだろう。

しかし

「……ん!? 君、なんだかびしょ濡れじゃないか? 塩素の臭いも……」

そう言つて鼻をくんくんさせて、それからこの世の終わりのような声で叫んだ。

「あー!? まさか君たち、夜のプールで何か破廉恥なことしなかつただろうね!? ねエ!?!」

と、俺に掴みかかつて、朔夜と俺の顔を交互に見つめる。どうも、^{むすめ}朔夜のこととなるとひどく親馬鹿になるらしい。

「高志、それ、海外映画の見すぎ。しかも発想がやらしいんだけど」

朔夜が呆れ顔でそう言つと、彼は娘の言葉にショックを受けたのか、頭を抱えて悶えている。

……面白いお父さんだ。

へりの準備が整つたらしい。

朔夜の大荷物も全て詰め込まれた。

お父さんのほうは先にへりに乗り込んだ。

あとは彼女だけだ。

改めて向かい合つと、なんだか妙な気分になる。

ほんと、こいつに振り回されてから、でたらめな毎日だった。クラゲに巨人、蜘蛛に骸骨。

男にキスされるわ迫られるわ。

いきなりぶつ倒れて俺のベッドで爆睡されるわ。

ズル休みして遊びに行つたり。

学校中で変な噂立てられたり。

2階からプールに飛び込んだり。

今思うと、地味な俺の普段の生活とのあまりのギャップに笑ってしまう。

すると、朔夜も同じように何か思い出しているのか、笑っていた。

それから

「英輔、耳貸して、耳」

朔夜はちよいちよいと手をこまねく。

「？」

なんだろう、と俺は一步近づく。

すると

「ありがと、英輔。助けに来てくれたとき、嬉しかったよ」

そんな言葉と共に、俺の頬に彼女の唇が軽く触れた。

「!？」

俺は慌てて後ずさる。

恥ずかしながら、顔が真っ赤になっているのが自分でも分かった。

すると朔夜は

「顔あかつ。これしきでそんなになってどうすんの」

と笑いやがった。

「な、な!! お前、そういうことはもっと大事にだな……!!」

と俺は堅気の貞操観を振りかざす。

朔夜はそんな俺を見てさらにけらけら笑つ。

(~~~~こいつはーーー！)
ほんとに、人騒がせな、賑やかな奴だ。

朔夜がへりに向かって歩き出した。

もう、あの背中を見ることはないんだろうか。

「朔夜！」

俺は彼女を呼び止めていた。

彼女は足を止める。

「……お前の本当の名前、教えるよ」

俺が叫ぶようにそう言っていると、彼女はくるりと振り返って

「全部取り戻したら、ちゃんと英輔に教えにいくよ！」

そう言って、笑顔で手を振った。

俺も手で応える。

彼女が言ったんだ。

なら、また会えるだろう。

彼女は教えてくれた。

手を伸ばせば届くってこと。

何も起こらないことが幸福だなんて人生を悟るのは、本当はもっと、ずっと後でいいんだってこと。

だったら、それまで、俺は目を逸らさない。

逃げないで、色んなことをやってみようと思うんだ。

いつか、彼女みたいに、堂々と歩けるように。

俺は朝日に溶けていく、1羽の鷺を見送った。

エピソード

土曜の昼ごろ、お袋が旅行から帰ってきて、それからまた、なんでもない日々が再開した。

月曜日、学校へ行く。

教室に入る。するとやっぱり、俺の隣の席は空席で。

「ねえ、憐ちゃんまた休みなのかなー？」

「なんか心配だなー。ふつといなくなっちゃいそうぞ」

「えー」

周りの女子がそんな会話をしているので、俺は少し心が痛んだ。

そんな会話を耳にしながら俺が鞆から教科書を取り出ししていると、外付けポケットからころりと、マスコットが出てきた。

例の、朔夜に付けられたマググのおまけである。

これを堂々とぶらさげるのも恥ずかしかったのだが、外すのもどうかと思って結局ぶらさげたままマスコット部分をポケットの中に隠すように突っ込んでいたのだ。

すると

「ねえ、東条君ってカエル將軍好きなの？」

と、右のほうで喋っていた女子の1人が珍しく話しかけてきた。

「え……」

1度も喋ったことがないような子に、唐突に話しかけられて俺は困ってしまったのだが、このカエルの、緊張感のない顔を見ているとなんだか笑ってしまっ

「これ、貰いものなんだけどさ。結構気に入ってる」

俺は自然にそう答えていた。

「そうなんだー。可愛いよね、カエル將軍！」

その女子は少し興奮気味に何度も頷いて、また内輪の会話へと戻っていった。

そこで

「ねえねえ、東条君つてもつと怖い人だと思ってたけど全然だねー」
「ほんとー、可愛いとこあるって感じ！」

「ちよ、私は前から結構格好いいなーって思ってたんだから！」
「もー、何カミングアウトしてんのよー」

本人達は声を押し殺しているつもりなのだろうが、そんな会話がもろに聞こえてきて俺は赤面してしまった。

それで、自然と頬が緩んでいたのか、

「何にやついてんの？」

と、訊かれてしまった。

「べ、別ににやけてなんか……」

と反射的に言い返しかけて、

「……!?!」

俺は勢いよく振り返った。

すると、そこには。

「おはよ、英輔」

白いシャツに、赤いネクタイ。

なんら変わらない、そのままの朔夜がそこにいた。

「あ、おはよー憐ちゃん！」

「おはよー」

彼女は笑顔で手を振りながら、そつなく周りのクラスメイトに挨拶を返している。

俺は慌てて

「ちよ!?! お前!! 帰ったんじゃないのかよ!?!」

出来るだけ声を押し殺して彼女に尋ねた。
すると

「いやー、そのつもりだったんだけどねー。昨日急に高志の知り合いから依頼が来てさ」

と苦笑しながらも彼女は語る。

「ほら、あそこの旧校舎。なんか曰くありげだと思ってたけど、実際、出るらしいんだよねー」

「で、出るって……おい、それ、お前の管轄じゃないんじゃない？」
「そうだけど、その依頼人つてのが高志が昔すっごくお世話になった人らしくって、断りきれなかったらしいの。で、ちょうど私の籍がまだここに残ってるってことで……」

と彼女は言う。

(……………なんつう……………)

俺は頭を抱えた。

それでもこの土日、ちょっと寂しい思いをして、夜空を物憂げに眺めてたらお袋に変な目で見られたり、それでもなんとか吹っ切ろうと頑張ったつもりだったのに、その必要はまだなかったのか。ああ。

「ねえ、英輔も一緒に行かない？ 旧校舎探検」

『行かない？』って訊いている割にもうすでに彼女は俺の腕に手を回している。

「……………どうせ連れてく気だろ？」

俺が言うと

「ん。まあね」

と彼女は悪びれる風もなくそう答えた。しかし

「……………嫌？」

と、少し心配気に彼女は俺の顔を覗き込んだ。

……………そんな顔をしないでほしい。

俺の答えはもう決まっている。

「ちゃんと付いてくよ」

俺がそう言うと、彼女は満開の笑顔で頷いた。

どうやら神様は、俺の非日常延長届けを受理してしまったらしい。まあ、せつかくだから甘んじよう。

何も起こらないことが幸せか？

まだそんなことは知らない。

だって、まだ見て、感じてないもののほづが多いんだから。
だから。

「英輔、行くよ!」

俺は彼女の手をとって、駆け出した。

エピローグ（後書き）

ミッドナイトブレイカー、ひとまず完結です。

本作は自分にとって2度目の現代ファンタジーものだったので、色々気負うところも多かったのですが、書いていたらバタバタと暴走しまして（笑）自分の中ではちょっと異作な感じですが、さすが最終的には要素、テーマ共に書きたかったものが書けたんじゃないかなーと、自分では思っているのですが……読者の方々は楽しんでいただけでしょうか？

さて、色々書きたいことはあった気がするのですが設定上のごちゃごちゃしたところはまたPCサイトのほうに特設ページでも作って公開しておくので興味がございましたらどうぞ（おい）。

最後になりますが、迷走に迷走を重ねたこの作品、最後まで読んでくださった心温かい皆様、本当にありがとうございます！連載中に下さったコメントも例えようのないくらい励みになりました（涙）。本当にありがとうございます。

それではまた、どこかでお会いできることを祈りつつ……。

2009年1月4日追記

ミッドナイトブレイカーは全3部のシリーズ化が決定しています。第2部にあたるおまけ的な短編は既にアップされていますので、この後の2人がちよつとだけ気になる、という方はよろしければ見てください。

本作は今後挿絵を入れたりノベルゲーム化したり（笑）まだまだ盛り上げていく（いきたい）所存ですので、春の真の完結までもうしばらくお付き合い願えれば幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1037f/>

ミッドナイトブレイカー

2010年10月8日12時57分発行